
本條玲子とその彼氏

巳田 弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本條玲子とその彼氏

【Nコード】

N2322S

【作者名】

巳田 弥

【あらすじ】

互いに等しい距離を置き、互いを見ている??。

生徒達に忘れられた旧校舎の図書室。その番人として静けさと読書に浸っていた三橋洋介の元に、“付き合えば不幸になる”と噂される美少女・本條玲子が現れる。玲子に告白され付き合うことになった三橋だったが……不思議と阻まれるようになる読書。干渉も詮索もなく引き出されていく誰に話すことも気にもしていなかった、自分の才を持つが故に周囲と生じている不協和音。天使のような微笑みでただ側にいるだけなのに、何か少しずつ変

化していく日常。これまで接点もない玲子が何故自分を好きなのか
……やがて三橋は玲子に疑問を持ち始める。
生まれた時から、抗い難い美しいものに魅入られた少年と誰をも魅
入らせる美しい少女の、噛み合っているようでいないような青春（
？）ラブストーリー！。

* 作中引用文および使用曲については『作中引用文献／楽曲集』を
ご参照ください。

一（前書き）

男というものは、本当に馬鹿なブリーマーである。

本條玲子には近づくなと、男子生徒の誰もが口を揃える。

曰く、本條玲子は『呪いの彼女』である・・・らしい。

とにかく付き合う男がことごとく不幸に見舞われる。

本條玲子が中学一年の時、入学式で見かけた彼女に一目惚れした二年のバスケット部エースはしばらく彼女を眺めた末に勇気を振り絞って告白した。本條玲子は校内人気一、二を争うアイドル的男子生徒からの恋の告白に、乙女の胸をときめかせコクリと頷いたそうである。

その時の彼の喜びはいかばかりか・・・男であればまあ容易に想像できる。

しかし、これがバスケット部エース君の不幸の始まりであった。

本條玲子と付き合い始めて3日目にバイクとぶつかる交通事故で足を骨折、入院、全治2ヶ月。それは奇しくも彼が本條玲子と一緒に帰ろうと、前日部活の前に約束を取り付けた日で合った。レギュラーからは下ろされ、病院での失意の日々。しかし悲しみばかりでもない、目下最愛の彼女である本條玲子がお見舞いにやってきた。

本條玲子の優しい気遣いに癒されかけたのもつかの間、彼は本條玲子の目の前で痛み止めの点滴を隣の病室に入院するご老人の栄養剤と取り違えられた。

このあたりで薄々おかしい・・・と思いつつも、いやいやまさかと否定したバスケット部の元エース君の怪我もようやく治り、さて遅くなった付き合っただけのデートに誘うぞと。そう意気込んで学校に向かおうと家を出て、十歩も歩かないうちに不良に絡まれ財布の中身は丸々取り上げられ顔に青痣作って・・・そこで彼はリタイアした。

月日は流れ、二年生に進級した本條玲子と次に付き合ったのは彼女と同じ年で学年一位の秀才だった。バスケット部の噂は聞いてはいたが、そんな非科学的な鼻であしらい勉強だけの男ではないと誰もがうらやむ彼女を手に入れて胸を張ったその一週間後、彼は高熱を出して倒れた。そして倒れた日は彼が小学3年生の頃から取り組んで、ようやく本戦出場の悲願を叶えた数学コンクールの日であった。

それでも秀才は偶然だと食い下がった。

しかし、所属していた科学部の実験で想定外の反応が起こり、彼ごと爆発しかけた目に合ったところでリタイアその2となった。ちなみに本條玲子はその時、彼の勧めで科学部の見学に来ていたそうである。

更に月日は流れ、三年生に進級した本條玲子と……いや、彼については人としてあまり触れないでおいた方がいいかもしれない。

現在、中卒にして浪人生活の真っ最中であるということだけ伝えておこう。

そして高校へ、この緑風高等学園に入学した本條玲子にはすっかり例の、『呪いの彼女』の評判が広がっていた。

男共は皆揃って、本條玲子にそのような業を背負わせた神を恨んだ。

何故なら、本條玲子はこの街一の富豪と名高い本條家の洋館から挨拶の声もさわやかに毎朝現れ、さらさらと音が鳴るようなストリートの高い髪を風になびかせて、清潔感溢れる紺のセーラー服に小柄でスタイル抜群な体を包んだ姿で、男共の握り締めた拳程の大きさしかない顔に、それはもう天使の微笑みとしか形容できない愛ら

しい微笑みを浮かべて登校してくる、本物のお嬢様であり、性格もいい美少女だったからである。

おまけに頭も良くて、ちょっとだけおっとりお間抜けさんときた。

今時、漫画ですらちよつと出てこないような、こんな“彼女”がいたらどれほど幸せな学園生活がっ……しかし実際、本條玲子を“彼女”にすれば不幸へと真つ逆さまなのだ。

ちなみに、本條玲子の女友達および男であつてもただの級友程度であれば何の被害にも合わない。つまりピンポイントに本條玲子の“彼氏”および“彼氏候補”限定の呪いであつた。そんなわけで男共は皆、地団駄踏んで口惜しがっているのである。

高校生になつた本條玲子の『呪い』つぶりはますますパワーアップしているようで、最近では彼女に告白したり、恋愛感情を持つて言い寄るだけで災難に見舞われるらしいと、どこまで本当か嘘かよくわからない無数の噂が流れていた。

彼女の評判を知つてもなお我が物にしようとした猛者がそれだけの数、この学園にいたとはなんと誇らしい限りではあるが、同時に気の毒なことである。

本條玲子を好きになつた男共は、彼女と手を繋ぐまでも至らなのまま、皆不幸に見舞われリタイアしていった。

流石に本條玲子本人も気に病んでるようで、告白、呼び出しには一切応じなくなつていた。かわいそうに、本人は一切何もしていないし悪くもない。

天真爛漫に明るかつた笑顔にも、どこか悲しげな翳りが混じるようになってたという。

それがまた皮肉にも本條玲子の魅力をさらに強固なものにした。

少し憂いを帯びながら、健気そうに明るく振舞う美少女に心惹かれない思春期男子学生など特殊なケースを除けばたぶんいないだろう。

更に更に月日は流れ、本條玲子が高校二年に進級した頃。
男共の間でこんな噂が流れるようになった。

曰く。

『本條玲子にキスできた男が、彼女を呪いから解放するだろう』

男というものは、本当に馬鹿なドリーマーである。
そう。

そんな噂話を悪友が話して聞かせてくれた時、放課後は人気のな
くなる古い木造旧校舎の片隅、第一図書室の書籍貸し出しカウンタ
ーの奥で好きな本を気ままに読み耽っていたのを中断された事を迷
惑だと感じながら、確かにそう思った。

「今、何て言った？」

その時と同じく書籍貸し出しカウンターに上履きの両踵を乗せ、
椅子にふんぞり返った姿勢のまままで聞き返しながら上目に相手を見
た。カウンターの向こうには悪友ではなく、俯きがちに立って俺を
見下ろす少女がいる。

さらさらと音を立てるような真っ直ぐで綺麗な長い黒髪。

軽くはにかむような表情で桃色に頬を染めている白い小さな顔。

小柄で華奢な割りに均整のとれた曲線をどことなく醸しだすセー
ラー服姿。

カウンターに乗せた本に重ねた両手の、桜貝のごとき爪の指先が
ふるふると小さく震えている。それにしても、久生十蘭とはまた・
・意外な趣味嗜好だ。

そんな暢気そのものな事を考えていた俺とは、百八十度違う張り
詰めた雰囲気と真剣勝負な眼差しできつと少女　本條玲子は顔を
上げた。

「好きです・・・」

真つ直ぐにこちらを見る強い眼差しとは裏腹に、消え入りそうなか細い声でたしかに先程耳に聞こえたと同じ言葉を本條玲子は繰り返した。

「まだ、じつとこちらを見ている。」

成程、たしかに美少女だ。悪友および男共が騒ぐのも無理はない。だがもつところ・・・小動物っぽい感じを想像していた、アーモンド形の大きく黒目がちな眼が印象的で、顔立ちだけみれば猫のようだった。睨むように顔を上げた様子から見て、案外気が強い性質かもしれない。

「あの・・・三橋く、ん・・・？」

「なんでしよう?」

なんでしようという応対の仕方もないとは我ながら思ったが、それ以外に言い様がなかったのだから仕方が無い。

好きです・・・の次に来る本條玲子の意思がどうあるかを聞きもせず答えられる事などない。俺は現時点で本條玲子に恋愛感情を持っていない、悪友が言うところの学園でも稀な男子学生である。本條玲子に限らず、基本的に女子や恋愛沙汰への興味は薄かった。それより静かに古今東西の先人達が遺してくれた物語の世界に没頭していた。

「えつと・・・三橋くんはわたしのこと嫌い?」

「いいや、嫌いではないよ」

というより、本條玲子を嫌いになるべき理由も現時点ではない。

「じゃあ、好・・・き・・・ですか?」

「一応、これが告白というものだとは理解しているので、君には残念だけど、好きでもない。一つ聞くけど・・・」
でなければ、一向に埒が明かない気がした。

今、読みかけの横光利一がいいところなのだ。

「なんでしようか?」

とりあえず、話をするのにこの姿勢は失礼だろうと考え、カウン

ターに乗せていた両足を下ろして立ち上がれば、艶々と天使の輪を広げる本條玲子の頭頂部を見下ろす形になった。ざっと見たところ157か8センチといったところか。ということは178センチの俺と約20センチ差である。

「君が俺を好きだとして、それで？　とりあえず俺が君をどう思っているかはさつき答えた通りだ。それとも俺に何か要望が？　俺は今取り込んでいる最中なので・・・」

「要するに、読書に忙しいので簡潔にと」

書籍の貸し出し者を特定する図書館カードを並べた机に、俺が頁を開いた状態で伏せた本へと目をやりながら本條玲子は凜とした声でそう俺の言葉を遮り、俺は頷いた。

「そういう事」

ふむ、なかなか理解が早くていい。

女子から想いを告白されるといったことは、ごくたまに発生する出来事ではあるがなかなかこうはいかない。本條玲子もそうだろうと予測したのだが、流石は学年十位内常連の賢女だけはある。

「わかりました」

妙に堂と落ち着き払った威厳と口調は、富豪の娘という育ちがなせる業だろう。

「三橋くん・・・えっと」

あらためて呼びかけた割には、何やら躊躇って再び俯き、好きだといっていた時より顔を赤くして言い出し難そうな様子で口ごもっているのです、少し彼女に水を向けることにした。

「何？　好かれる事自体は悪い気はしないからね。出来る限りのことは誠意を持って対応するつもりだから言ってる」

じゃあ・・・と、覚悟を決めたようにぐっと息を一旦詰めて、再びきつと本條玲子は顔を上げて俺を殆ど睨むように見た。

「わたしと付き合うか、キスして」

一息にそう言い、本條玲子は耳まで赤く染めて唇を噛み締めた。何か鬼気迫った様子の真つ赤な本條玲子を目の前に、俺は軽く腕を

組むと右手で自分の顎を掴んで思索しはじめた。

二(前書き)

付き合つかキスするか

年齢の割には肉が薄くて尖っていると自覚している顎先を掴みながら、相変わらずこちらを睨む様にじっと見詰める本條玲子の目を覗き込んだ。好きな男に告白という、一般的に年頃の少女にしてみれば一大事とされているものをやり遂げたせいにか心無し興奮した光にきらきらと輝かせている黒い瞳。やはり目が大きいと思った。瞬きの度にふさりと音を立てそうな程、睫毛が長く濃い。何かに似ているとしばし考えて、四歳下の妹がもっている人形に似ていると思いつた。たしかファッションモデルでどこそこ在住でと、やたらと詳細なプロフィールデータが販売メーカーによって設定づけられていて、それを覚えるだけでも面倒に思えるのだが、女の子というものはそういう設定があればあるほどのめり込めるものらしい。

付き合うかキスするか　付き合うが先に来たところによると、そちらの方が優先度は高いのだろう。キスの要望については、思い当たりにないわけではなかった。男共が夢見がちな頭で考えた幻想を本條玲子ももしかしたらと思っただろう。どうせなら自分が想う男にと考えた上で、今のこの状況だとすれば男としてはなかなか光栄かつ申し訳なく思う。なにしろ本條玲子に対して、今の今まで関心も余りなかったのだから。

「どつちがいいの？」

「え？」

「付き合うのとキス」

他人の思考と言葉だ、念のために優先順位の確認は取った上で対応するべきだろう。俺の言葉にぱちぱちと瞬きを繰り返し、本條玲子は怪訝そうに首を傾げた。

「三橋くんって・・・好きじゃなくてもそついう事出来ちゃう人なの？」

眉を潜めるように表情を曇らせて本條玲子が呟くように尋ねてきた。輕蔑迄には至っていないが、限りなくそれに近い種類の感情が見てとれたので、流石に心外だと俺は溜息を一つ漏らした。

「そっちでそう要望しておいて・・・」

「だって・・・」

「君がいま考えているような人間なら、さっさとキスして事を終わらせて読書に戻る」

「それって、なんか酷い・・・」

「だから酷くないように確認したつもりだったんだけどね」

「あ、そっか。あれ？　でもやっぱり何か変じゃない？」

「変じゃない。ついでに確認しておくけど、君はサド的嗜好の持ち主なのか？」

「どうして？」

「それなりに噂は聞いている。それが本当なら、今まさに君は自分が好きだと言う男の事を自らの手で不幸へ導かんとしているわけだ。その姿を見て悦ぶというのなら立派に嗜虐的性格の持ち主だと思っただけだが」

本條玲子は即座に首を横に振った。

そうして、なかなか懊悩に満ちた深い溜息を一つ漏らす。

自分に課せられた業に対して心底疲れ果てているように見え、少し言い過ぎたかと罪悪感を覚える。

「やっぱり・・・嫌よね」

「そういう話をしたつもりはない。ただまあ、こっちが苦しむ様を見てうれしがられるのはちょっと理不尽だし、そういう訳じゃないんだろ？」

「当たり前です！　それに・・・違うんじゃないかと思って」

「何が？」

「三橋くんは、わたしを好きな訳ではないから・・・わたしの方が、つまり、その・・・」

何度も告白を繰り返すのが恥ずかしいのだろう。本條玲子の気

持ちを察し、言う必要はないと鷹揚に頷いた。とりあえず、彼女の言動から見るに俺を好きだと言う事は不思議ではあるが真実であるらしかった。

「なるほど、つまり俺から言い寄った訳ではないから大丈夫だろう。そう君は考えた訳だ」

コクリとまだ頬を赤くしたまま、本條玲子は頷いた。

ただ恋心による身勝手かつ楽観的観測という訳ではなく、一応、仮定としては筋が通っている。それに恋心を向けている相手が必ずしも同じ想いを返してくれるわけではなく、むしろその可能性が高いという前提をはっきり意識しているのも珍しい。

本條玲子はどうやら論理的なタイプのようだ。

「ところでその自分の事を好きではない男と、失礼ながら噂が本当なら初めてのキスをしていいのか。あまりそういうタイプには見えないけれど」

「それは・・・だけど・・・」

言いながら、本條玲子は完全に下を向いてしまった。やれやれと俺は組んだ腕を解いてカウンターの向こう側にいる本條玲子に一歩近づくと、今更ではあったが周囲が無人であることを一応確認して下を向いている本條玲子の顎先を掬うように手をかけ上を向かせてカウンターの向こうへとやや身を乗りだすように身を屈めた。

「・・・え」

寄せた顔に、驚いた本條玲子の吐息がかかって、すぐに俺は胸元から押し返される。武道的な動きだった、何か嗜んでいるのかもしれない。富豪の娘でこの美貌なら親が護身術の一つや二つ身につけさせようと考えても不思議じゃないなと思いつながら屈めた姿勢を直した。こっちとしてもそうしたかった訳ではない。

ただ、本條玲子に彼女が提示した選択肢のどちらがより彼女自身の意に叶うのかをはっきりさせたかっただけだ。彼女にも言った通り、こうして自分に好意を向けてもらった事でかわった相手に対し、こちらとしては出来る限りの誠意を尽して対応するまでだっ

た。もつともこちらの誠意を誠意として受け取ってくれた様子の女性
性は過去に余りいなかったけれど。

「付き合うの・・・方で・・・」

「君を、現時点で好きな訳ではないけれど？」

何となく面白さを覚えて笑み混じりに言った俺を本條玲子は上
目遣いに見上げた。ふつくらした唇は瑞々しく、啄んだ時の感触が
良さそうではあったが、別に積極的に執着する程のものでもない
知っていたし、飢えてもいないのでそれはそれで過ぎ去った出来事
だった。

「本当、酷い・・・でも、嫌いな訳ではないんでしょう？　現時点
では」

「まあね、聞いていたよりずっと面白い子だったんだなと思ってる
よ。それは、返却？」

カウンターに本條玲子が置いた本について尋ねると、ふるふると
彼女は髪を揺らした。

「貸し出しお願いします」

「じゃあ図書館カードにクラスと名前書いて、背表紙の裏に挟まっ
てるから。鉛筆はその辺に転がってる」

返事の代わりにコクリと頷くのは本條玲子の癖らしい。カウン
ターに上半身を伏せる様に図書館カードに記入し始めた本條玲子を
見ながら、もといいた椅子に腰かけて足を組み、後ろ手に読むのを中
断していた本を取ろうとした時、校内放送が俺の名を繰り返した。

『図書委員の三橋洋介君、三橋洋介君、至急職員室の棧田先生の所
まで来てください』

手に取りかけた本から指を離して、俺は立ち上がった。そろそろ
何らかの形で呼ばれるとは思っていたが・・・まさかこのタイミン
グとは噂は本当かもしれないと、俺は図書館カードを書き終えたら
しい本條玲子を見た。

「君の仮説、早々に否定されたかも」

「どういう意味？」

「バスケットエースは足を骨折、秀才は数学コンクールの日に発熱、家族全員東大出のエリートは中学浪人・・・これ、本当？」

「・・・ええ」

「彼等は皆それぞれ彼等の、恐らくもつとも幸せだと思える部分で災難に見舞われた訳だ」

「あつ・・・」

今の今まで気がついていなかったらしい。本條玲子は大きな目を更に大きくして声を上げた。

「つまり君の、その呪いとやらは随分精度が高いものなんだな。ちなみに俺の場合は・・・」

「読書・・・」

「その通り、しかもなかなかいいところで中断されていた訳だが、どうやら今日は諦める他に無さそうだ」

ガチャリと仕切り壁のドアを開けて、貸し出しカウンターの外へ出て本條玲子の側に回ると彼女はしゅんと肩を落とし申し訳なさそうに頂垂れていた。

「冗談だよ、そろそろ呼び出しがかかると思っていた頃だから気に病まなくていい」

でも、と言いかけた本條玲子の艶々した頭をぐしゃぐしゃと掻き回して微笑みかけた、それでもしないと今にも泣き出しそうに見える様子だったからだ。女子が泣くのは余り見たくない。ましてや彼女と呼び出しの内容はなんの関連性もない。

「カードそこに置いたままでいいから。期限は一週間」

「はい」

「一時間は、ここには戻れないから今後の付き合いに関しては、また明日ここで話し合うということだ」

何か物言いたげにして黙っている本條玲子にまたと言って、俺は第一図書室を出るとコンクリート建ての本校舎にある職員室へと向

つ
た。

三（前書き）

お付き合いすると、三橋くんは女の子のお家に迎えに来るの?!
でないと機嫌を悪くする人もいるし、どちらのタイプなのかわから
なかったからとりあえず

種々雑多な木が適度な間隔を取り広げた枝葉を所々重ね合わせている様は、雑木林の入り口を連想させられた。無造作に見えて、全体を少し退いた視点で眺めてみると実に絶妙な配置で木々が植えられていることに気がついた。後の木々が成長した姿まで考えて造り込められた見た目よりずっと手間も費用も掛かっていそうな庭。木々の合間から、砂色の石を煉瓦のように積み上げたアーチが覗いている。ざくりと足元で音を立てる、地面に敷き詰められた砂利の跡を見るとどうやらそこは車寄せがある玄関らしかった。

建物の屋根は濃い灰色に光る瓦屋根で、全体を包んでいる石造りの壁は桜の花のような薄紅色。玄関アーチだけ訪れる者にすぐそこと解るような色を変えていた。玄関らしき部分は吹抜の天井にしているのか、そこだけ塔になっている。建物は二階建てのようで、細かく区切った大きな窓が上下に平行に並んでいた。長方形を連ねたアンティークな白い窓枠は、薄紅色の壁にレース飾りを貼り付けたように見える。数える気がしなかったので何角形かしらないが、装飾的な鉄柵の開いた門扉から建物に近づくにつれ丸く張り出したサンルームらしき部屋もあることがわかった。

たまに街中で見かける輸入住宅の洋館もどきな建物とは格が違う、日本の大工と外国の設計師が互いの技巧を競演して建てた真正正銘の洋館。そのうち重要文化財指定でもされそうな建物は『本條家の洋館』と人々に呼ばれている本條玲子が暮らす家だった。

物珍しい建物を観察するように車寄せのすぐ脇に植わっている楓の幹に背を預けて洋館を振り仰いで眺めていたのを、ふと時間が気にかかって頭を正面に戻し、制服の袖を軽く揺すり上げて腕時計を見る。

まだ本條玲子の家に来て5分も過ぎていない、もつと時間が経っているとはかり思っていた。この感じは何か物事の合間に本を読み出して、ふと我に返った時に似ている。

さわさわと木々が葉擦れの音を立て、緩い風に乗って建物の壁と同じ薄紅色の花びらが舞い降り軽く持ち上げていた腕の上に止まる。玄関の正面には樹齢50年はありそうな桜の木が満開だった。

紺色の生地の上から花びらを摘んで地面に落とす、黒エナメル
の革ベルトに皺が入っている腕時計の銀色の秒針が滑るように動いていくのをぼんやりと眺めながら、そろそろかなと胸の内を呟く。始業時間は8時30分で本條家の洋館から学校までは徒歩10分程度の距離だった。そして予想通りに、ガチャリと玄関が開く音と石の床を踏む革靴の音が聞こえ、銀の鈴を鳴らしたようなという形容がぴったりの本條玲子の声が聞こえてきた。

「うん、わかっている。ピアノの先生はいつもより30分早くにみえるのよね・・・はい、いってきます」

出かけの挨拶が続いて、コツコツコツ、コツコツコツ、コツンコツと3拍子を刻むような足音が途絶えて、ざくつと石の床から砂利に下りたなと思ったら、砂利が何か引き摺っているような荒々しい音を鳴らした。

「わっ、わっ・・・み、三橋くんっ?!」

教科書の他に弁当も入っているらしき学校指定のナイロン鞆をゆさゆさ鳴らすように、腕を前後左右に揺らして本條玲子があたふたしている。どうやら俺がここにいることに驚き慌てているらしい。

「おはよう。初めてまともに見たが、これはたしかに洋館だな」

「う、うん・・・」

とりあえず訳も解らずに返事をしたというような返事だ。

「それにしてもこういう屋敷に無断で入ったら犬か使用人がどこからともなく咎めにやってくるものだと思っていたが、あっさりここまで来れた」

「うん・・・」

「門も開いていたし無用心じゃないかな？」

「お、お父さんがもうすぐ出かけるから・・・車で・・・。玄関に防犯装置ついてるからたぶん大丈夫・・・」
「なるほど」

俺を見たり、門を見たり玄関を振り返っては口をぱくぱくと動かす、まるでネジを巻いたブリキのおもちやのようだ。

「あ、そうだ！ おはようございます、でも、どうして・・・？」
ようやく平常心を取り戻したようにあたふた動くのを止めて挨拶を遅れて返した本條玲子が、ゆっくりと俺を仰ぐように首を傾ける。
どうして、か・・・。

「昨日、付き合うことにならなかった？」

質問に質問を返す形になってしまったが、認識が誤っているといけないので先に確認することにした。

「う、うん。でも・・・お、お付き合いすると、三橋くんは女の子のお家に迎えに来るの?!」

「でないと機嫌を悪くする人もいるし、どちらのタイプなのかわからなかったからととりあえず」

「そう・・・」

ぽかんとしてこちらの顔を見上げている、本條玲子の少し開いた唇から小さな歯の頭が見えた。お嬢様らしく幼児期にちゃんと矯正したのか生来のものかわからないが綺麗な歯並びをしている。

「別々で行く？」

「一緒に、いい・・・」

本條玲子が希望を言ったので、了解の意を示すために頷き並んで歩き出す。

門を出て、綺麗に刈り込まれた背の高い生垣に沿って歩く。二、三十メートル先まで続く生垣の内側は本條家の敷地だった。

「教室、何組？」

悪友から聞かされた噂と本條家の洋館以外に本條玲子の事について

て知らないため、ごく基本的なことを尋ねかけた。千人近い生徒数を有する学校のため一学年10クラスある。同学年ということはわかってはいるがクラスを知らないのは何かと不便に思えた。選択授業や体育のような近隣クラスと合同になる授業で見かけたことがないから、クラスは離れているはずだ。

「三組、三橋くんは七組よね？」

「よく知ってる」

感心したように呟くと、両手で鞆を前に持って歩く本條玲子が白い頬を微かに染めたので、そういえば自分と違い本條玲子側はれっきとした好意を持って自分と付き合っているのだったと思い出した。

「まあ、当然か」

「うん」

話しながら、最初相手に合わせる気で速度をやや落として歩いてきたのを元に戻す。ぎこちなくなるとどしい返答の言葉とは反対に、本條玲子は意外と早足であった。のんびりと足を運んでいるようなのに、20センチも身長差があるこちらをあっさりと追い越してしまう。それに気付いて意識して歩幅を小さく運ぼうとする本條玲子に数メートル程歩いたところで普通に歩くことにした。それで丁度釣り合った。

すつと爪先を遠く前に、真っ直ぐ膝を伸ばして静かに足を運ばせる歩き方。

「踊りか何かしてる？」

「中学校までバレエ習ってた。どうして？」

「舞踊している人はよくそういう歩き方をする」

「すごい！」

急にぱつと顔を輝かせて本條玲子がこちらを見上げた。さらりと眉の辺りで切り揃えた前髪が綺麗な額を滑る。朝の光を反射する髪の毛の艶に眩しさを覚えて、軽く目を細めながらやんわりと本條玲子の賞賛を否定した。

「すごい」

「だって、三橋くん探偵みたい!!」

突然、大きな目をきらきらさせてやけに興奮し始めた本條玲子を一瞬訝しんだが、そういえば昨日、図書室から久生十蘭を借りていた。

たしかあれは探偵小説だ。

「どうやら本條玲子は論理的だが単純な思考回路の持ち主のようだった。」

「家にそういう人よく訪ねて来るから、それだけだよ」

「バレエやってる人が?」

「いや、バレエは少ないな・・・日本舞踊が一番多い。たまによくわからない我流の舞踏家も来るけど」

「三橋くんのお家って・・・」

「家までは見に来てない?」

歩きながら首を傾げて考える本條玲子を少し揃う気持ちでそう聞けば、案の定、顔を真っ赤にして食ってかかってきた。

「しない、しないもの! 住所だってわからないのにな!!」

「そうだろうね」

「昨日も思ったけど・・・三橋くんって、すごい意地悪」

口元をもぐもぐさせてぼやいている本條玲子に、くっくくと喉から笑いが漏れる。

「結構、近いよ。五丁目だから学区は違うけどね」

「え、それじゃあ・・・学校前の道を挟んだ反対側」

「そう、君の家と同じぐらいの距離かな、学校からは。たいした距離じゃない」

「でも・・・」

「いいよ、休日余り自由にならないし登下校時くらいしか時間が合わないさそうだ」

「お昼休みと放課後は?」

「図書委員」

「毎日?」

「他の委員は週一の当番制で本校舎の第二図書室だけど、俺は第一図書室専任」

途中で話が逸れていると気がついていたが、本條玲子が気にしていないようなので放っておくことにした。休日時間が取れないことと関係はあったが、別にわざわざ説明するほどのことでもない。

そうこう話しながら歩いているうちに賑やかなざわめきが聞こえだし、閑静な住宅地を抜けて、道幅の広い、国道へと繋がる道路に出ていた。南北に緩やかな坂になっている道を登った突き当たりに学校がある。本條玲子が学校前の道と言った道路でこの街の小中学校の学区の境界線でもある。本條玲子の家は東側だった。

本来、ガードレールに区切られた道の中央部は車道なのだが、今は尋常では無い台数の自転車道が道を占めている。国道からこの道に入るとあとは学校まで一直線なため、朝と夕方の登下校時間帯はほぼ学生たちの専用道路になってしまっからであり、緑風高等学園というそれなりに名の通った郊外の進学校は最寄駅から歩くには遠く、シャトルバスを運行するには近すぎる立地だった。

郊外で、しかも坂の上にある。

広い土地を段々に削り、教師の駐車場と生徒の駐輪場は十分に確保できる。

そんな事情もあり、通学する生徒の九割以上が最寄駅から自転車通学するという珍しい現象が起きていた。

つまり、本條玲子と俺は学校で少数派の近所から徒歩通学している生徒であった。

四（前書き）

前言撤回したくなった？

四

道幅は広くとられている通学路であったが、多少の時間差はあるものの在校生徒数約千人が通るには狭い道路だった。毎朝のことだが、ガードレールで区切られた車道部分は自転車が大渋滞を起こしており、歩道は歩道で紺色の制服で埋め尽くされている。いくら徒歩通学者は少数派でも千人の割は百人である。ほんの2分、3分の単位でタイミングが悪いと外を歩いているはずなのに満員電車の中にいる気分を味わうことになる。どうやら本條家の玄関先でやり取りしていて時間をロスしたために、一番生徒が多いタイミングとぶつかってしまったようだ。

始業時間は8時30分だが、実際に朝のホームルームが始まるのは8時40分。

そのため、始業5分前に到着するよう登校する生徒は多い。これが始業10分前だと他人と接触しない程度の距離は保てる人波で歩きやすさは随分と違う。

隣を歩く本條玲子の足取りが、段々とおぼつかなくなり遅れがちになる。小柄で華奢な彼女はすぐ他の者に押しやられたり割り込まれたりして、上手く人波に乗れない様子だった。両手で鞆を持っているから尚更で、見るに見かねて彼女に片手を差し出した。

「貸して」

「え？」

「鞆」

戸惑っている本條玲子を見無視して鞆を取り上げ、自分の鞆は肩に下げて片側に二つ鞆を持ち、もう一方の手で本條玲子の腕をとって引き寄せ、華奢な肩先に手を置いた。

「あ、あああのっ、三橋くんっ!？」

「合わせ辛い。今更だけど周囲に隠れて付き合いたかった？」

学内の有名人である本條玲子と並んで学校への一本道に出たとこ

るで、周辺の人間がこちらへ視線を密かに向けて気にしているのは知っていた。そうなるだろうと予想はしていたし人から視線を向けられるのは慣れていて気にならないが、どうやら本條玲子はそうではないらしかった。腕をとられて目を白黒させながら周囲を見て、困惑した面持ちでコクンと頷いた後、一呼吸置いて恨めしげな上目遣いで睨んできた。

「案外、少女趣味だな」

「・・・そういうことじゃなくて」

「今から離れる？」

「三橋くんが言ったように、今更遅いと思う・・・」

「だろうね、歴代の不運な恋人達・・・と果たして言えるか個人的には甚だ疑問だが、彼等を差し置いてこうして肩を抱いている。まあちよつとした話題にはなるだろうな」

「そういう言い方止して」

本條玲子の声に重みが増した。

「どの辺りに怒った？」

「歴代・・・と、ちよつとした話題。離して」

横顔を見せたまま本條玲子が静かに答える。赤面してしていないから怒っているのは明白だった。じつと一点を見つめて張り詰めている。感情的になって人前で声を荒げたりしないあたりには育ちの良さを感じた。

「歩ける？」

黙って本條玲子は頷いたが、とてもそうは思えなかったので離れたついでに彼女の身を半分隠す壁になるよう心持ち後ろに下がった。これで押しつけようとする生徒は半減するだろう。

しばらくそうして黙ったままの本條玲子の後を半歩下がってついていくように歩き、本條玲子の怒りが幾分か落ち着いたのを見計らって話しかけた。

「噂通り、本当に自分のせいだと思う？ どう考えても本條さんと直接関係がない」

「・・・わからない。けど、実際そういうことが起きてるから」

「呪いの彼女ね・・・」

「彼女つて言える程、ちゃんと付き合えなかったけれど」

「男子に友達からでもと熱心に迫られた。特に悪い人ではなさそう
で友達からと言っているのに断るのは気が引けた？ 好きでも無い
のに応じた罰だとか、それこそ相手に気の毒だとか・・・そんな風
に」

ぴたりと本條玲子の足が止まって、危うくぶつかりかけたのを寸
前で体ごと斜に傾けて避けた。驚いた表情で仰ぎ見る本條玲子の黒
目がちな眼と視線が絡む。歩道半分を遮るように立ち止まっている
こちらへ迷惑そうな視線を向けながら、生徒が何人か通り過ぎてい
った。

「何で・・・」

「中学生なんてそんなものだよ。今も、もしかしたら大人になつて
も大して変わらないんじゃないかな。付き合う内に好きになるかも
しれないし・・・脅されて無理にとか、嫌いな女の好きな相手をお
ざと取るとか、そういうのじゃないなら別に悪いことでもないと思
うけど」

「三橋くんつて・・・女の子や恋愛沙汰に興味ないって昨日言つて
なかった？」

頬に手を当て、呆れたような溜息をついて本條玲子はまた歩き出
した。

「興味はないけど、それなりに巻き込まれる」

「そう・・・それで毎回付き合うの？ 今みたいに」

淡々とした口調だったが、先程のように怒つてはいないようだっ
た。心なし表情が和らいでいる。校門を通り、朝練の生徒ももうい
ない校庭を横目に本校舎へと向かっていく。本校舎の壁に掲げられ
た時計が始業5分前を告げていた。

「大抵は相手が怒って前言撤回する」

「わかる気がする・・・」

「前言撤回したくなつた？」

半ばそうじゃないかと思ひながら尋ねてみたが、意外にも迷いなく本條玲子は首を横に振つた。はらはらと束になつた黒髪が揺れて広がる。それにしても本條玲子のような理性的な女子にここまで入れ込まれる覚えが全く無いので実に不思議だ。どこかで何か接点があつただろうかと記憶を探ろうとしたところで本校舎に到着した。

「そういえば・・・はじめて本條さんって呼んだね、三橋くん」

「試しにね、非常に呼び辛い」

靴箱の棚が立ち並んでいる通路に立ち止まり、顔を顰めるようにそう言つた俺を見上げて本條玲子は可笑しそうにくすりと笑つた。俺にとつてはまだ本條玲子の認識は噂話の登場人物の域からそう遠くないため、本條玲子は本條玲子という名の一少女であつた。そしてそれを本條玲子は理解しているようだつた。

「どうせなら名前がいい・・・」

ぼそりと呟いた本條玲子の言葉が、いかにも男と交際し始めの少女が言いそうな要求だつたので思わず苦笑すると、こちらが何を考へたのか悟つたように違ふの、と頬を少し膨らませた。これは怒つていゝのではなくて多少拗ねただけの表情だ。本條玲子は怒れば氷のように冷ややかになるタイプである。それにしても、さつき敵しい顔をした本條玲子はなかなか迫力があつた。もうあと数年したら本当に男を魅了するような感じになるかもしれない。相当の踊り手が決めの姿を取る時の、人目を惹き付けた刹那に心奪うような迫力。それに近いものを感じた。

「本條は・・・どうしても家とかお父さんっぽいから」
「なるほどね」

それはそれでありがちな理由だつたので、そう相槌を打てば彼女は唇をきゅつと引き結んで、俺を見上げたままますます頬を膨らませた。

「いますごく子供っぽいって思つたでしょう」

「いや・・・気持ちはわからないではないよ」

個人より家の名前の方が先に立ってしまうという点では、彼女の家も自分の家も同じようなものだったので鞆を手渡しながら神妙にそう答えると、不思議そうに彼女は首を傾げた。無理もない。家の名前が先に立つといても、俺の家の場合はある特定の分野に関わる相手に対しのみで、彼女の家ほど無差別広範囲ではない。

「そうだ・・・鞆と、それからさつき盾になつてくれてありがとう」
各々の靴箱へと別れる前に、ふと思いついたようにこちらへ向き直った本條玲子に丁寧なお辞儀付きで礼を言われた。気付いていたのかと苦笑すると同時に、どうやら随分と律儀な性格でもあるらしい、今のところ無理な要求をしない彼女について考えながら、上履きを手に取り通路に敷かれた簀の上に落とした。

五（前書き）

何でそんなに第一図書室ばかりなの
静かだから。

五

「みいいいつううはああしいいつ!! この裏切り者オオオ
!!」

心底退屈な授業を至極事務的に機械的にやり過ぎ漸く迎えた放課後、いつもの場所、いつもの椅子、いつもの姿勢に落ち着き、栞を挟んで事務機の抽斗に保管しておいた本を抱えて開こうとしたまさに寸前だった。ドタドタドタという足音と共に咆哮しながら第一図書室を襲来した悪友に溜息を吐き本を膝の上に置いた。

「酒場でのアルバイトがばれたのならリーク先は俺じゃない、他を当たってくれ」

制服着用の他は大抵の事が自由なゆるい規則の学校でも、流石に夜のアルバイトは咎められる。そもそも23時以降に夜の繁華街をうろつくのは条例違反で補導の対象だ。

表面が擦れて木目の浮いた貸出力ウンターに乗せた俺の踵を挟むように両手をついて、俺の膝まで上体を乗り出すようにして凄んできた悪友に斜に目線だけを送ると、そうじゃないつとカウンターを叩く音と共に返された。

「本條玲子だよっ、本條玲子!!」

「・・・ああ」

「ああ、じゃないっ!!」

生まれつきの明るい髪色の短髪に目も輪郭も三角形でひよろりとした痩せ型なのに、骨格だけはしっかりした体つきの悪友はいかがわしい夜の商売人に誤解されることが多い。今の興奮した様子なら制服姿のままでも誤解されるかもしれないなど、自分達の他は誰もいない第一図書室全体に響く声で喚く悪友を見ながら胸の内でのひりごちた。

「昨日、付き合うことになった」

淡々と事実だけを述べれば、急に脱力してカウンターに被さるよ

うに頂垂れた。

「どうしてお前ばかりそうっ、何でだ、理由は、お前どつかで何かした？」

「俺のせいじゃないし、今のところ不明だ。佐々木むつみはどうしたんだ？」

流石、噂を話して聞かせてくれた本人だけあって、迷惑千万な食い下がりぶりだ。焦れた気分で手にした本の背表紙を指で軽く叩きながら、悪友の恋人について尋ね俺はもう一度深い溜息を吐いた。

「それとこれとは話が別！ あんな、天然記念物クラスの美少女というのは、実際の天然記念物と一緒に皆で等しく大切に愛でるものなんだよ。占有は犯罪だ」

「なるほど・・・犯罪ね」

おそらくそれが彼女の噂を囁く男子生徒の全般的な見解なのだろう。どうりで今日一日、やけに敵愾心に満ちた視線を感じて過ごしたわけだ。だが、俺にとってはそんなことよりも悪友に黙ってもらうことが先決だった。

「どうでもいいが、昨日から中断されたままの読書をな、再開するのを寸止めされて迷惑していることに気が付いてくれないか、三田村。玲子は前科一犯だが、お前は前科複数犯だろ、これ以上罪を重ねるのは止める」

ここにきてはじめて悪友の名を呼んでその罪を突きつけてやれば、頂垂れたまま三田村は自棄気味に言葉にならない声を上げると頭を振った。

「・・・すでに呼び捨てかよ」

「本條という姓より名前の方がいいそうだ」

椅子の肘掛に両肘を張って片一方で頬杖をつきながら答えれば、諦めたような溜息を吐き出してカウンターのの上に身を縮込ませて三田村は俺に背を向けて座り込んだ。

「昨日からって昼は？ そういやここも閉めてたな」

「・・・昼も来たのか」

「事の次第を聞いてやろうと思つてな」

「尋問してやろうだろ。昼は第二図書室にいた、副委員長の佐竹に呼ばれて」

言いながら昼休みの出来事と髪を固く結び上げた佐竹の姿を思い返す。

丁度、この第一図書室の鍵を開けようとして、彼女のクラスメイトに呼び止められた。昼の当番中に確認したいことがあるとの伝言に佐竹の用件なら余程大事なのだろうと、例の横光利一が気にかかりながら第二図書室に向かった。第一図書室を重要視しているのは殆ど私室として扱う俺一人だ。閉まっけていても実質的に支障はなかった。ところが行つてみると、佐竹の用件は別段急ぎと思えるものではなかった。

「困るの。いくら新しい書庫が広いからって、無駄に蔵書を増やさないで頂戴」

途中経過の仕分けリストをクリーム色で平らな貸出力カウンターの上に載せながら、いかにもしつかり者な口調で佐竹はそう言った。

「ここと、ここ・・・あとこの全集も、第二図書室にある。こつちのは全部移すんだから」

「ルブランの作品集・・・これは訳者が違う」

差し出されたリストを手にとつて、カウンターに背を預けて佐竹を斜向かいに見下ろす格好で指摘された箇所を目を落として説明する。

「第二図書室にあるのは1980年代に発行された偕成社版だろ？」

こつちにあるのはもつと前、新潮が出した堀口大学訳だ。今も文庫で手に入るけど置いといて損はないかな・・・それと」

カウンターから伸びてきた細い腕がピツと手元からリストを奪つていったのに、少々面食らつてカウンターの佐竹を見下ろすと別の書類を突きつけられた。

「次、こつち」

「何、もういいの？」

「選定の方針がわかればいいの。資料価値を考慮してってことでしょ」

個人的に読み返したくなりそうだと思う本も混ざっていたが、知れば真面目な彼女から説教されるのはわかりきったことなので苦笑で誤魔化して黙っておいた。

「昼休みは短いので、早く見て」

「リクエスト図書のリスト？ 次の委員会でも・・・」

「最近、数が増えてるの。新しい図書室ができるからって。だから先に見て意見聞かせて」

「流行図書なら、そっちの方が詳しいと思うけどね」

手渡されたリストに並んだタイトルを眺めながら言えば、キイト回転椅子が軋む音がしてパソコンのモニタに向き直った佐竹の横顔が顔を上げた先にあつた。紙のカードに手書きな第一図書室と違い、第二図書室の本は全てバーコードが付与され貸出履歴は生徒番号で記録される。

「・・・相変わらず、家では読まないんだ」

再びリストに目を落とした俺は、図書委員の中では佐竹しか知らない話を持ちかけられる。学校でも家でも、余白の時間は全て本を讀んで過ごしていると皆思っているが、実際は学校にいる間しか好きに本は読めない。

「まあね、家はなかなか。特に今は・・・」

「本條さんという新しい彼女も出来たことだし？」

ピッ、ピッ、と返却図書のバーコードを読み取ってはキーボードを打ちながら、俺の言葉尻を見当違いな方向に繋がった佐竹におやとリストから顔を上げる。

「今朝から学校中、その話で持ちきり」

モニタを見ながらまるで機械の様に動かす手を止めることない佐竹の言葉に、やれやれとリストの二枚目を開く。

「早いな、流石に。そうじゃない、定演会が近いから家中ピリピリ

しているだけだよ。内弟子指導の手伝いに容赦なく駆り出される」

「三橋流箏曲の次期家元なら当然でしょ」

「継がないよ、目下、鬭争中だ。教えるのは向いてないし、政治的に立ち回るのはもつと苦手だと訴えている」

「・・・手、怪我したりして」

そろりと潜めた声で呟かれたのに、玲子の噂を気にするのは男共だけではなかったかと軽く笑えば、タンツと乱暴にキーを叩く音がカウンターの中で響いた。見れば体は横を向いたまま腕を組んだ佐竹がこちらへ顔だけ向けて睨んでいる。丸くて涙袋がふつくらしている目で睨まれてもどこか愛嬌があつた。

「笑い事!？」

「仮説によると、こつちから言い寄つたわけではないから大丈夫らしい」

「何よそれ。じゃあ、やつぱり本條さんから?」

「理由は聞いてない、いきさつとしては一緒だよ」

リストを返しながら目を細めて答えれば、受け取つた佐竹は顔を背けるようにモニタに向き直つた。リストを両手にしたまま作業を再開する様子がない。きつちり几帳面に結い上げている髪が目に残る。ピンで固く纏められているのを下ろせば柔らかな猫っ毛で、汗に濡れれば綺麗な頭の形にぺたりと添うことを知っていた。

「そつちが本当の用件?」

「たまたま話の流れ・・・委員長としてはどう?」

「別に問題無いよ、予算もあるし。この調子であと半年、適当に配分してくれば」

「丸投げじゃない・・・何でそんなに第一図書室ばかりなの」

「静かだから。用事はこれだけ?」

「そつよ。ご足労いただきありがとうございます、委員長」

ピッ、ピッ、と再び鳴り始めた電子音に肩を竦めて、カウンターの上に置かれたデジタル時計を見れば、第一図書室に戻って丁度千ヤイムが鳴りそうな時刻だった。横光利一は放課後までお預けかと

耳元まで伸びてきた髪を掴むようにかき上げ、第二図書室を去ろうとした俺にぼそりと佐竹が呟いた。

「本條さん、すごくいい人よ。心無い委員長と違って」

皮肉のつもりではないのはわかっているので聞き流し、第二図書室を出る。昨年末に5ヶ月の付き合いに別れを切り出したのは彼女の方だ。長く続いた方だった。

「……元カノの呼び出しか？」

三田村の声に回想から我に返り、こちらを振り返って見ているにやにやした表情に首を横に振った。

「そうじゃない。新校舎に収める本と新しく購入する本のリストを当番中に見てくれて」

「口実だろっ」

「……かもしれない。それより、三田村」

流石にこう何度も偶然が重なれば沸いてもくる疑念を、この付き合いが長い悪友にぶつけてみようかと頼杖から頭をはずして三田村を視界に捉え直すと、何か察したのかにやにやを収めた三田村は神妙に表情を改めた。

「昨日は委員顧問の棧田、昼は佐竹、そして今はお前だ。読みかけの本を読もうとする度に邪魔が入る……どう思う？」

「おいおい、それって……」

嘘だろっつと三田村がこちらに身を乗り出してかけた時、がらりと入り口の引き違いのドアが開く音がした。

「ごめんね、三橋くん！ ホームルームの、後、日直で、手伝わせれちゃって……」

「あ……本條玲子」

間抜けな響きの三田村の呟きを可笑しく思いながら、息を切らせて図書室に入ってきた玲子を片手を挙げて俺は迎えた。

六（前書き）

それは静寂との最初の邂逅だった。

六

埃の匂いがした。鼻の奥をざらつと撫でるような濃縮された・・・それが湿った古い木の匂いだと理解するのに数十秒を要した。若木の頃は虫を誘い出す樹液を確かに持つていたと思える甘さを含む匂いだった。ここが入つていい場所なのかどうかわからなかったが、出入り口を封鎖している様子もなく簡単に足を踏み入れることが出来たのだから大丈夫だろうと、人気の無い木造校舎の板張りの廊下をのんびりと歩いた。外から、晴れがましさを伴ったざわめきが雨に遮られて遠く掠れて聞こえる。

入学式は雨降りになった。しとしとと頼りなく生暖かいようで肌寒い春の雨。快晴の青空に桜が咲き誇り爽やかな風に花びらが舞う。そんな入学式のイメージ通りの天気には毎年なるとは限らない。こんな天気だったからこそ、ひっそりと時間を止めたように建っている本校舎の端から渡り廊下で繋がった木造の建物と出会ったのかも知れない。

本校舎前の広場になっている場所で子を待つ父兄達同様に、叔父も俺を待っているに違いなかった。同じ中学から入学した三田村に合せ一旦外に出る振りをして屋内に戻った。叔父は三田村を知っている。彼を捕まえきつと尋ねるだろう。もうしばらく時間がたてば先に帰ったと諦めるはずだ。嫌っているわけではない。むしろ洒脱で物の分かった大人として好感を持っていたが、父兄として式に出席した彼と共に帰るのは気鬱だった。父は小学生の時にすでに他界していた。

それなりに名が通った歴史ある進学校。郊外の利点を示すように敷地は広く施設の数も多かった。千人近くの生徒を収容しなければいけないのだから当然だ。

時間をやり過ぎす為、一年生の教室と科目別教室を集めた講義棟から二年生と三年生の教室に職員室と主要な福利厚生を集めた本校

舎へと渡り、無機質なパーツで出来たそれぞれの施設の内部をぶらぶら見て回っていたら、唐突にそれまでとは全く趣を異とした灰色のコンクリートに彫刻が施された渡り廊下とその先に建つ木造校舎と出くわした。

木造校舎は本校舎の影に隠れるようにひっそりと建っていた。教室は教室として使われている気配がなかった。大きなキャンバスを床に置きペンキをぶちまけていたり石膏像がところ狭しと置かれていたり、グラウンドピアノ一台だけでもしくはアップライトのピアノを数台並べていたりといった教室がいくつかあった。ふと窓の外を見れば本校舎の南側は大規模な基礎工事の最中だった

後で知ったが、老朽化した施設を吸収し更に新しい設備を入れるための新校舎を建設中とのことだった。老朽化した施設とは木造校舎のことだ。以前から使われていない教室は芸術コースに属する生徒の為にアトリ工と器楽の練習室として利用されていたが、校舎全体で見れば使っている教室はごく一部だった。まだ入学したての学校に対する新鮮さと好奇心で一階部の奥へ奥へと薄暗い廊下を進み、突き当たりの引き違いドアに行き着いた。ドアの上部、明り取りの嵌めこみ窓とを仕切る部分に真鍮のプレートが打ちつけられている。

第一図書室。

乱暴な情動や焦燥の気配漂うアトリ工や器楽室とも、打ち捨てられた侘しさ漂う使われていない教室とも違う気配を嗅ぎ取り、錆びが浮いて塗装の？げた金属製のドアに手を掛けてみた。ガタガタと音を立ててドアは開き、湿った空気が濃くなった。

「これは・・・すごい」

思わず声に出して呟いてしまった。窓のある場所以外が全て天井まで作り付けの書棚で、本で埋まっていたからだ。どれも古い本で圧巻だった。焦茶色の革貼りに金で箔押しされた三十巻以上ある百科事典、筆で手書きした和綴じの本まである。

随分前に閉じてしまった図書室なのか、書棚にも床にも埃が積も

っていた。

本来生徒が本を開いて調べ物や勉強したりするはずの大きな並んだ机の上に、本が何冊も平積みになって山脈を作っている。

奥まった位置に本の貸出を受付けていたらしい司書部屋らしき小部屋とカウンターがあり、そこへ足を向ければぎしつと床を踏む軋み音がして、そこでふと気がついた。

外の賑やかな声は一切聞こえない。

立ち止まって、目を閉じて耳を澄ましてみる。

沈殿した澱が底に溜まってじつとしていているような静けさで、それは静寂との最初の邂逅だった。

「走って来なくてもよかったのに」

片手を挙げて出迎えた、まだ肩で息をしている玲子をカウンター越しに見ながら言えば、うんでも・・・と曖昧な返事をした玲子はちらりとすぐ隣でカウンターに腰掛けている三田村に目線を送った。その大きな目が遠慮なく誰と声に出すように疑問を呈しているのに苦笑する。

「三田村陽輔、中学からの腐れ縁だ」

「三橋くんのお友達？」

「そ、数少ないね。おおお、間近で見るとますます・・・」

「三田村、もう行け」

余計なことを言い出す前に三田村の言葉を遮ったのとはほぼ同時に、深々と玲子が三田村に綺麗なお辞儀をした。さらりと肩先から長い黒髪が零れる。

「はじめまして、本條玲子です。三田村くん」

「知ってる知ってる。はじめまして玲子ちゃん、あ、オレ溺愛中の彼女いるから安心して」

丁寧な最敬礼を見せた玲子とは对象的に、ひらひらと掌を振って三田村は三角形の目をこれ以上ない程細め、これ以上ない軽薄な調子で玲子に応じた。

三田村という男は誰に対しても馴れ馴れしい態度を基本にしていたが、それがうまく人に畏怖心を与える容姿に中和され話せば気のいい奴として扱われた。俺もその例外ではない。

「三田村・・・」

「なんだよ苗字より名前の方が好きで、噂が気になってるんだろ？」

それに占有は犯罪と小声で囁いた三田村に鼻白んで俺は再び頬杖をつき、手元の本の上で右手の指を順番に折り曲げるようにして背表紙を叩いた。そんな俺の様子を見て玲子が三田村を庇った。

「あ、いいの三橋くん。その方がいいもの」

「そう」

「でも、ふふっ・・・」

不意に愉快そうに軽く握った手の指を口元に当てた玲子に、頬杖をついた左側へと首を傾げる度合いを深くして、カウンターから足を下ろして右膝に左足を乗せるように組み直す。

「何？」

「二人とも同じ名前なんだなって」

「そ、そのことで中学の入学式の列の後ろにいたこいつに話しかけたのが始まり」

「そうなんだ、二人とも中学校の時から背が高かったの？」

「五十音順だったんだ」

入学式で身長順にはあまり並ばないだろうと思いつながら補足した俺の言葉に、玲子は両手を使って何か数えるような素振りをして、ものすごく納得した顔つきで頷いた。

「“タ”と“ツ”ね。“ミチ”の人がいなくてよかったね」

「は？ みち？」

さっきの素振りはどうやら俺と三田村という姓の読みを拾っていったらしいと理解したが、突然、自分に向けられた暗号めいた玲子の言葉に三田村は付いていけなかったようだ。

「道田くんとか道山くんとか、そういう苗字の人がいたら三橋くんが後ろにならないもの」

「ああ」

やっと理解が追いついて納得した三田村にっこり得心顔で玲子は微笑んだが、俺としては玲子の言うよかったとそれに対する三田村の納得の方がさっぱり解らなかった。

前後ろに並んでいなくても同じクラスなら知り合うし、友人になるならないはまた別の話だ。どうやら妙にこの二人は馬が合うようであった。

「本当、オレぐらいだよ三橋みたいな屈折した奴と付き合えるの」「そうか」

この場を去らない三田村への当てつけに拍子をとるように本の背表紙を指で叩き、さらっと三田村の自負を受け流すと、何が可笑しいのかくすくすと玲子がまた笑う。何時まで経っても今日の本題に入れそうにない。

「仲良いのね」

「別によくも悪くも無い。それにその理屈なら五十音順に並ぶ度に俺は前後の人間と友人になることになる」

「あ、そっか」

呆れた思いで傾けている頭を軽く振る。母親譲りに軽くうねった伸び掛けている髪が目の端を軽く叩いて反射的に目を瞑った。頭が良いがちよっとだけおっとりお間抜けさん。なるほど、三田村が伝えた玲子の評はどうやらその通りのようだ。

「きっかけてことだろ」

「なるほど・・・きっかけね」

「な、こういう奴だから玲子ちゃ・・・」

「“マ”の苗字と“三田村くん”と“ミチ”の苗字の人がいなかったら、私も三橋くんの前になるね」

俺に指摘されて合わない理屈に気が付いた後も名前で遊んでいる玲子はどうやら無意識に頑固でもあるらしい。そして彼女は気が付いているのだろうか。

「出会って3分経たない内に邪魔者にされるってっ！！！」

三田村の言うような占有欲からではないが、暗に俺の内心を代弁したことに。

「あ、違うの、違うのよ！ ごめんね、三田村くん！！」

目の前で三田村と玲子が漫才じみたやり取りを交わすのを眺めながら喉の奥で笑う。

「ホンジョウ」・・・確かにそうだな」

それにしても、埃が降り積もっていた頃に比べここも騒がしくなったものだ。いや、普段はその頃と同じ位静かか。要するに俺以外の人間がここにいるから賑やかなのだ。第一図書室を使える状態にしたのは俺自身であるし、人が出入りする以上そうなるのは当然だ。彼等は落ち着いた場所とここを気に入るかもしれないが、まったくの静寂は必要ない。そんな事を考えながら、どうやら今日も諦めることになりそうな横光利一の背表紙を撫でて本を後ろ手に事務机に置くと、俺は組んだ足を下ろし立ち上がった。

「玲子」

「はい。えっ?!」

反射的に返事した玲子の大きな目が、驚いたように見開かれるのを一瞥し、俺は自分の腕時計へと視線を移した。

「16時34分。君、今日早く帰らないといけないんじゃないの?」

あつと小さく息を呑む声が耳に届いた。

「・・・送るよ」

閉館時間は17時であったが、放課後の第一図書室は昼よりも人が来ない。三田村と玲子だけで十分千客万来の気分であった俺は、司書部屋の仕切りの戸口側に釘を曲げて打ち付けたフックに掛かった鍵を取り、その下の床に置いた鞆を手にカウンターの向こう側へと出た。

七（前書き）

迷ったのか、新入生？

七

「よかつたの？」

だらだらとした下り坂を並んで歩く玲子の問いかけに、黙って軽く頷いた。第一図書室を閉館時間前に閉めたことについての問いかけだった。

膝の動きに合わせて玲子の鞆が跳ねて踊っている。両手で鞆を前にといつた持ち方を玲子がする為だ。まだ外は明るくやや黄色い夕方の光が玲子の艶やかな黒髪を輝かせ、白い頬に睫の影を落としていた。小さめの鼻とすっと通った鼻筋、ふっくらした丸い頬からすつと滑らかな線を描いて尖る顎の輪郭。三田村ではないが、こうして近くであらためて見ると遠目で見る以上に玲子は美少女だった。

それにしても、ほんの少し前まで図書室の明かりを消せば真っ暗になっていたのに、いつの間にか随分と日が長くなっている。風が吹けばどこからともなく桜の花弁がひらひらと降ってきた。今週末で花見の時期は終わりだろう。そうこうしている内にあの場所は無くなる。その後は新しい図書室の広い書庫に移る考えでいた。その頃になっても玲子は隣に並んでいるだろうかと、朝、耳に挟んだ通り彼女のピアノ教師の通ってくる時間が変更になった話を聞きながらふとそんな事を考えた。

「でも、どうしてわかつたの？」

「朝、玄関から出てくる時の会話が聞こえた」

「そう。あ、そういえば・・・三橋くんが持つてるんだね」

「何を？」

「第一図書室の鍵。職員室に返しに行ったりしないの？」

「ああ・・・これは個人的に預かってるから」

にこやかにこちらを仰ぎ見た玲子に、鍵を収めた上着のポケットに手を入れ探って取り出す。真鍮製で柄の部分が三つ葉をかたどった古風な鍵だった。柄の穴に後から付けたとわかる輪にした細い鎖

が通っている。

「個人的に？」

玲子が首を傾げじつとこちらを見詰める。どういう事だとやはり大きな目が口ほどにものを言っていた。玲子の目は雄弁だと苦笑しながら、鍵を預かったいきさつを話し始めた。人に話したのは初めてだ。誰にも鍵の事を聞かれたことが無かったからだ。皆、図書委員長だから鍵を持っていると気に留めないのだ。

「棧田先生知ってる？ 倫理の」

「ええ、担任だもの」

二年生から生徒は理系と文系と芸術系に大雑把に分けられる。玲子は三組で理系クラスだったから倫理なんてマイナー教科の教師は知らないだろうと聞いたのが、意外な答えが返ってきたので俺は驚いた。一年の時は副担任の立場だったが三組の担任になっていたのか。

入学式の日に見つけた第一図書室は、時を止めたような木造校舎の中でもとりわけひっそりと堆積した時間の中で沈黙していた。

もともとが外部の音が入りにくい造りだった。隙間風を防ぐ為にゴムのような樹脂を枠とガラスの継ぎ目に塗った窓は固く閉じるようになっていたし、窓が無い部分の壁殆どは本棚で、天井まで壁を多い尽くす本が一種の防音の役目を果たしているようだった。

生徒の勉強用にしつらえられた大きな机の向こうにある司書部屋へ近づこうとして、何となく足を止め、背後の、壁とは別に等間隔に立ち並ぶ背の高い、側面におそらく本の分類である札の掛かった本棚を振り返って、はあ……と、深く息を吐き出し吸い込んだ。埃と湿った木と紙、窓とドアの錆びた匂いと黴臭さに微かな煙草の……煙草？

すつと、目の前を靄のように薄い紫煙の筋がたなびいて流れていく。

煙？ こんな燃えるものに事欠かないような場所？

不審に目を細めて煙の筋を追うように近づけば、ガタツと本棚と本棚の影になつた暗がりから乱雑な物音と黒っぽい塊がもそもぞ動くのが垣間見えた。誰かいると思つた瞬間、黒い塊が呻るように声を上げた。

「あゝつたく、こつ資料探しのたびスーツ埃だらけにされちゃたまらないな・・・ん？」

「・・・図書室で啜え煙草ですか」

「大きなお世話だ・・・昨日まで中坊だつた奴に言われたくはないね」

そう俺を一瞥して即座に新入生だと判断を下した黒い塊ならぬ一人の男は、濃いグレーのスーツを着込んだ身を屈めたまま啜えていた煙草を左手に挟んでふうつと煙を吐き出すと、億劫そうに立ち上がった。胸章のような水色のリボンがついているところを見るとどうやら教師のようだった。入学式で教師は水色、祝辞を述べる来賓は黄色のリボンを胸につけていた。

「迷つたのか、新入生？」

はー・・・と、迷惑そうな表情で下向きにまた煙を吐き出して、そのままじろりと探るような目つきでこちらを見てきたのでとりあえず頷いた。

「ええ、まあ。けど、昨日まで中坊だつたことは関係ないでしょう」
入学早々、教師に素行に問題があるなどと印象をもたれていい事などない。

まだ胡散そうにこちらを観察するように見ている男の言葉をとつて冗談めかして誤魔化せば、男はぎゅつと眉間に皺を寄せるように目を細めて煙草を口元に運んだ手元をそのままに、あるよとくぐもつた声で言つた。

「嗜好品をたしなめる資格があるのは、大人だけだ・・・」

口の端を吊り上げ、再び煙を吐く。細めた目がやけに強い光を放つていた。そういえばこの学校は個性的な教師が大勢いると悪友が言つていた。目の前の男もその一人かと苦笑すると気に食わなかつ

たか鼻に皺を寄せた。三十代半ばくらいか、まだ若い。

「棧田だ、社会科。クラスと名前」

再び口元に持っていた煙草のフィルターを噛むように、ぶつ切りの言葉で男が名乗り尋ねてきた。先に自ら名乗るところは好感が持てたので素直に答えることにした。

「二組の・・・」

「ああ、三橋か・・・思い出した。今年入った名家の片われ」

「は？」

「一応、副担任だからな。生徒ファイルに顔写真貼ってあるの見て。入学書類で証明写真何枚か出しただろう？」

問いかけておきながらこちらの返事を待たず、棧田は飄々とした足取りで横を通り過ぎ、並んだ机の一つに飛び乗るように腰掛け煙草を再び指に摘んだ。見ればその火の下に小さなステンレス製の灰皿が置いてある。

「喫煙室以外禁煙なんて、いやな風潮だ・・・」

「教師があちこちで煙草吸っていたら、生徒に示しがつかないからでしょう」

「そうそう、そう言う奴がいたせいでこうなった。教師の弱みを握ったと思うなよ、バレたところで始末書一枚書けばチャラになる話だ」

「そういった書類は大人にとっては一大事じゃないんですか？」

「あのな、減俸が怖くて煙草が吸えるか」

その割りに隠れて吸っているなんてまるで小心な不良学生だと言え、くしゃりと顔を今度は愉快そうな笑みに歪めてガキにはわかるまいよと吐き捨て、棧田は煙草を灰皿の上に揉み消した。

「生徒は立ち入り禁止ですか？」

「禁止つて程じゃないがこんな部屋だからな、普段は閉めてる。勝手に本を持ち出されても困るしな。使うのは専らおれぐらいだ。結構いい資料があるんだが・・・」

「そのようですね」

「いい加減どうするか考えないとなあ・・・見ただろ、裏の。来年度の夏休みに完成する。あの新校舎のワンフロア全部図書室にする計画なんだと。他校との差別化って奴だ」

机に腰掛け、右足の脛を左膝の上に置き両手をやや後脇について部屋全体をぐるりと見渡すように軽く棧田は仰け反り、天井に顔を向けたままどうするか考えないとなあ・・・そう再度ばやくように呟いた。どうやら棧田はこの図書室の管理監督を任されているらしい。

「ま、この校舎と同時に廃棄処分が妥当なんだろうな。本校舎の第二図書室に十分蔵書もある」

「たまに使っているんでしょう?」

「まあ、なあ・・・本当にごくたまにな。別に無くても支障はない」

この校舎自体そういう場所だとはやはり天井を向いたまま言って、左手を机から離して上着の胸ポケットを探り新しい煙草とライターを取り出すと仰け反った上体を元に戻した。

「勿体無い」

「そうか?」

カチツ、カチツとライターを弾く音を立てながら火の点いてない煙草を啜えた不明瞭な相槌を打ち首を捻る。どうやら上手く火が点かないらしい。

「貸してください」

「ん?」

「ライター」

黙って手渡されたライターは細長い革ケースを被せているが、100円ライターと大差ないものだった。一度傾け、両手で棧田の煙草へ構えてカチリと鳴らせば一回で火が点いた。中のガスが偏っていただけだ。

「なんだ、手馴れてるな」

「大人の世界が近いもので、俺自身は真面目です」

家の事情で会う大人の女性の中にはこういうことを子供にさせて

擲う人がいる。しかし、それだけの事だった。棧田は眉を顰めたが何も言わなかった。型に嵌めた見方で人を判断はしないらしいと俺は棧田を評価した。

「折角、いい場所があると思ったのに・・・静かで」

「ほう？」

「利用できないまま無くなるわけですね」

もう一度、図書室全体を視線だけで見回した。

「気に入ったか？　ここ」

「ええ、まあ・・・」

あの司書部屋の中はどんな感じなのだろうと気を取られたままで生返事を返せば、棧田は啞え煙草のまま肩から頂垂れるように下を向いた。

「そうか・・・くっ、くくく・・・ハハッ、ハッ！！」

肩を揺らして頂垂れた頭をゆっくりと起こしながら、啞えた煙草を抜きとって反り返るように急に豪快な笑い声を立てた棧田にぎよつとして我に返った俺を、上体を戻してから睨み上げるように俺を見据え不敵な笑みを浮かべた棧田に厄介事の予感を覚えた。

「それで？」

「突然、図書委員になれと命令された」

本当はその後もつと色々とやりとりをした末で鍵を預かったのだが、説明が面倒なので割愛した。とにかく管理監督者として第一図書室の扱いを持って余っていた棧田と第一図書室を気に入った俺の利害が一致して今に至っていた。

「ふふ・・・棧田先生って面白いよね」

「非常に迷惑な教師だ」

「でも、三橋くんには丁度よかつたね」

「・・・そうだな」

恐ろしく核心をついた玲子の屈託のない一言に、一瞬だけ動揺を覚えたが何も知らない玲子にはここにこと俺の指に引っかかっている

第一図書室の鍵を興味深そうに見詰めていた。

そこまで話したところで本條家の洋館の前に到着した。

八（前書き）

なるほど・・・こうしてちょっとした災難の積み重ねが全部彼女の
噂へと集約していくわけか。

もしも噂が本当であるのなら、玲子の『呪い』の精度はかなりのものだ。

玲子に言い寄り付き合おうとする男達は、彼等にとってもっとも幸福を感じるであろう活動を犠牲としなければならない。

それが噂と過去の事例で示唆されている、玲子の『呪い』の内容である。

自分から言い寄ったわけではないが、断る理由が特に見当たらないという理由に基いて玲子と現在付き合っている俺にとって該当する活動は読書だ。今日は玲子と特に約束をしていないが『呪い』の効力は続いているようで、昼休みは佐竹が新入生の図書委員を委員会前の見学と言って第一図書室に連れてやってくるし、放課後は今年度最初の委員会だった。

おまけに明日は取り壊し工事を行う業者が一日計測作業に入るとかで、木造校舎は終日立ち入り禁止のお達しが出ている。

玲子と付き合い始めて三日目。

その間、読みかけの横光利一は続きのページを読み進めるところか、本を開くことすらできない状態だった。第一図書室の本を持ち出さないこと、他の生徒のように借りることも不可。これは棧田と俺との間で結んだ規約事項の一つであった。

本来なら閉じておくことになっていた公の場所を一学生が占有し、開館日と閉館時間を個人の都合で自由にしていることへのペナルティだった。委員会もある、試験期間もある、家やごく個人的な用事もたまには入る、体調だって崩す時もあるだろう。いくら本人がその気でも、一人で毎日下校時刻まできっちり開放する義務の遂行は不可能で、そんな事をさせるわけにもいかないというのが棧田の主張であり、それはその通りだった。哲学科卒の倫理教師らしく、物事の正負のバランスに関して棧田は神経質過ぎるほどきっちりして

いた。

棧田に玲子のことを聞いてみようか・・・ちらりとそんなことが頭をよぎったが、あの男のことだ得るものがあれば失うものもある一言であしらうに決まっている。

得るものか。

果たして学内の人間、特に男共が考えているように俺は玲子を得ていると言えるのだろうか。玲子は常時送り迎えをしなくても機嫌を損ねない少女だった。お嬢様らしく複数のお稽古事や何か家の用事も時折あるらしく、俺は俺で第一図書室を下校時間まで強制力はかなり緩いが可能な限り開放する義務がある。

とりあえず今朝、朝は一緒に登校し、その日の都合を互いに教え合うということで双方間で合意した。それを提案したのは玲子自身である。昨日、中途半端な時間で図書室を閉めて送ったことが気がかりだったらしい。無理に下校時刻を合わせなくていいと言った。

そうなるに玲子が昼休みか放課後に第一図書室にやって来ない限り、まとまった時間を一緒に過ごすのは登校時以外に平日では不可能だった。玲子は理系、俺は文系で授業のカリキュラムが違う。選択授業や合同授業で一緒になることはまず有り得ない。三組と七組ではクラスが離れ過ぎて授業と授業の合間に何か話しに行っても中途半端に互いの時間を浪費するだけだ。学校イベントでクラス同士組むこともないだろう。

要するに校内では第一図書室以外に接点を持てる場所が無い。空いた休日に校外で会っても構わないのだが、玲子が休日について言及することはとりあえずこの三日間の内では一度もなかった。俺の側だけで言えば深夜も選択肢に入れられるが玲子はおそらく思いつきもしないだろう。

本人に恋愛感情はないときっぱり最初に告げ、成り行きで付き合い合っている側から言えたことではないが、本当にそれで付き合っているといえるのかと疑問に思える玲子の淡白さである。女性というものはそうでないと言っている男を占有しようとするものだと思う

ていた俺としては玲子との付き合いはかなり拍子抜けで、そんなふうに拍子抜けている自分が妙だった。何故なら俺に対して玲子は恋愛感情がある。それは自惚れではなく事実だ。しかしこうして玲子の淡泊さにそれでいいのかなどと気を回している表面だけみれば、まるで役回りがあべこべである。

そして双方の感情や付き合いの深さに関わらず、読書が何かしらによって阻まれるという現象だけは、今のところしつかり続いているのだった。まあ、仮に『呪い』が本物だったにせよ、対象範囲が読書だけに怪我をすとか病気になるとか受験に失敗するとか、そういう危険はなさそうなのだが……。

そこまで考えて俺はふと、ある重要なことに気がつく。

校内で玲子との接点を持つとしたら第一図書室に俺がいる時間しかない。ということは、玲子と時間を過ごせば必然的に本を読むことができない。まさに『呪い』のような構造に陥っている。

「……ことで、委員長！」

「ん？」

どうやら俺のことを呼んだらしい声に気がついて考えることを中断し、声が出た方向へぼんやりと視線を向ければ、きりきりと眉を吊り上げている最中の佐竹の顔があった。

「聞いてました？ 委員長？」

そうだった。

あらためて周囲に目を向ければ可動式の会議机を口の字型に並べ、一年から二年の各クラスから選出された、俺と佐竹を除いて18名の図書委員が席につき、佐竹の様子につられてこちらを注視している。全員の様子を一瞥で確認できる議長席に佐竹を隣にして俺は座っている。

「分かってるよ」

状況を思い出した俺は頬杖ついたまま、隣に座って書類を手にしている佐竹に再度視線を向け、ついでに今話している議題が何か佐

竹の手元から盗み見た。会議の書類を読む時、間違えないよう字を人差し指でなぞる癖が佐竹にはある。

「科学部からの資料購入要請をどうするかだろ？」

「・・・聞いていたならいいんです」

佐竹は気がついていない。俺が聞いていたとは答えていないことに。

「さて」

俺は佐竹の側の列に並んで座っている新入生を見た。俺の学年もそうだが女子の比率が高く10人中男子は3名だった。

「この学校は委員の任期が2年と長い。1年間ではその時々の仕事や問題に対応することがやっとで、生徒による学校運営力が向上しないというのが理由らしい。俺達にとっては迷惑な話だ・・・」

そう言くと新入生達だけでなく、俺の側の列に座る二年の委員からも忍び笑いが起きた。

単純な学力だけではない総合的な人間力の育成という名目で、この学校は生徒に学内の各機能を運営する権限をかなり大きく委譲している。こんなもつともらしい委員会が毎月定例で開かれるのも、年間数十万から百万以上の書籍購入予算の採配を生徒に任せているからだ。図書室の書籍リクエストは本好の生徒からだけではない。教師達が授業に必要とする資料もあれば、部活動に必要なものもある。

部活動絡みで書籍購入を要請してくるのは文学部や美術部や科学部などの参考資料を必要とする文化系の部が多かったが、たまにスポーツ科学に関する本を運動部が要請してくることもあった。

リクエスト全部を聞き入れていたらきりが無い。そのため、こうして毎月のリクエスト書籍をまとめて協議して決め、決めた内容は委員顧問のチェックを受けて、生徒会に回され、そこから更に学園長の決裁を受けて確定となる。

だから三田村が言うように、昨日、佐竹が数が増えて困ってるから事前に見てくれとリストの確認を依頼してきたのが玲子のことを

聞く口実だとは決め付けられない。

「・・・三年生は受験で委員は免除される。つまり、来年こういった問題を片付ける中心になるのは君達だから、わからないからと言わず意見を述べて欲しい」

頬杖をついたままの姿勢ではあったが、真面目な口調で静かに言えば新入生達は表情を固くして頷いた。

佐竹の機嫌を直すにはこんなところか。彼女に仕切り倒して貰わないと委員会は面倒なのだ。なにしろ俺は第一図書室専任なので佐竹以外の図書委員とは委員会以外に接点がない。そもそも委員長であるという自覚も余り無い。

立候補者がいないのなら独断と偏見で決めるといつて、委員長に新入生だった俺を指名したのは棧田である。委譲されている権限が大きいだけに責任も大きい。しかも顧問の指名であれば尚更、それを覆してまで委員長になりたいと主張する生徒などいなかった。

そしてそれは明らかに第一図書室を俺に預けるための棧田の口実だった。

やれやれと息を吐くと、隣で佐竹が口元に微かな笑みを浮かべるのが見えた。あとはさつきまでと同様に彼女に任せておけばいい・・・などというのは甘かった。

どうやら佐竹はずいぶんと虫の居所が悪いらしい。いつものように、では意見のある人はお願いしますと言った後、妙な雰囲気沈黙して俺へ顔を向けた。

「・・・と言いたいところですが、たまには委員長の意見を先に聞かせてもらえますか？」

今の状況と玲子にはまったく関連性がない・・・こともないような気もしないではないが、直接的には関係はない。

それでも、噂が念頭にあるとついちらりとそのことが脳裏を掠めていく。

なるほど・・・こうしてちょっとした災難の積み重ねが全部彼女の噂へと集約していくわけか。

そう俺は、にっこりと冷笑を向ける佐竹の顔を見ながら、玲子が
初日に俺に見せたしゅんと肩を落とした姿を思い描いていた。

九（前書き）

副委員長がその言つなら

九

「また、どうして？」

急に議題について意見を述べると迫ってきた佐竹に尋ねれば、だって、毎回皆の意見をまとめるだけでしょ、そんなの寝てても出来ずとあっさりした調子で返された。会議室全体に笑い声のさざめきが起こる。

「一年の時から委員長のベテランでしょう？ たまにはお手本見せてください」

しれっと冗談めかした物言いで攻めてくる。どうやら佐竹は相当機嫌が悪いらしい。

副委員長の言う通り、たしかに三橋君はベテランだもんね。三橋本の虫だしな・・・と二年生の列から聞こえてくる。誰も佐竹が、悪意とまではいかないがかなり意地の悪い気分であんなに突っかかっているなんて考えもしていない。

「心無い委員長」

二年生の列でどつと笑いが沸き起こり、一年生達がきょとんと不思議そうに顔を見合わせてから俺と二年生の面々を交互に見る。やれやれと俺は諦念の溜息を吐き出すと頬杖から顔を上げて頭を軽く振った。

心無い委員長。

時折、佐竹は、淡々と必要最低限の役目だけこなして委員を放置する俺のことを、好意もないまま佐竹の求めに応じて付き合ったユアンスも仄かに匂わせてそう呼ぶ。佐竹と俺の関係を学内で知っている人間は三田村と棧田だけだ。心無い委員長。その呼び方を三田村に話した時、奴は膝を打って腹を抱え、笑いながら、佐竹も言うなあ・・・ぴったりだとコメントした。

他の人間は佐竹が俺に仕事をいいように押し付けられている不満と、ついそれに応えてしまう面倒見のいい委員長体質である自分自

身への諦めを含んだ言葉だと捉えている。

「わかったよ・・・」

ここで適当に流したら他の委員の反感を買っただけだ。図書委員の仕事を持ち回している実質の委員長は佐竹である。図書委員は皆、面倒見の良い佐竹の味方だった。

「副委員長がそう言うなら」

ぺらりと手元に置いたまま一文字も読んでいなかった議題が印刷された書類を手にとって目を落としたり。

いくら棧田に黙認されているとはいえ、軋轢なしに第一図書室専任では副委員長の佐竹が必要だった。自分で委員長体質だと言っている佐竹にその認識が薄いが、付き合う付き合い合わない以前に図書委員という組織の中で俺の佐竹に対する依存度は高かった。

「まあ、確かに・・・時流に乗った強気の申請だな」

書類に科学部が要請した書籍名と本の寸法、金額が並んでいる。

大判フルカラーの色見本帖を含んだ、染色に関する専門書が十数冊。

どんなきつかけでそんな研究テーマに取り組んだのか知らないが、科学部は前年度から草木染における成分分析と化学反応の実験と検証を繰り返して、最近、その研究成果を評価した協力大学の教授を通して文部科学省から表彰を受けたばかりで新聞にも載っていた。時流に乗ったと言ったのはそのためだった。

専門書だけにそれぞれ結構いい値段が付いている本ばかりで冊数も多い。そんな申請を出してきた科学部に対しどのように返答するか、承認か却下かというのが議題だった。

「特にこの大判の色見本帖、一冊で5万円もする。他の本も含めたら大体10万円くらいか・・・どうしようかな？」

「いくら表彰されたからって、一つの部だけにそんなに予算割くことは出来ないと思います」

議事録係をしていた二年の女子が顔を上げて、首を傾げた俺を非

難するように言った。確かに年間で見ても一つの部のために掛ける予算としては大きすぎた。画集という本の性質上どうしても予算がかかる美術部ですらせいぜい3、4万円弱なのだ。

予算は本だけに使えるわけではない、定期でとっている新聞や雑誌もある。

ちらりと佐竹へ視線を向ければ、議事録係に詰められた俺に対してどうするのといった澄ました横顔で書類に目を落としている。やはり機嫌が悪い。

委員会に身が入っていないなかただけではここまで機嫌を損ねない何か他に理由になりそうなことはあつたかと考えたが委員の仕事で思い当たらず、やはり昨日とってつけたように佐竹が切り出した玲子と付き合い始めたことが絡んでいるように思われる。

しかし、昨年末に別れてからもう3ヶ月以上だ。

別れた後、佐竹は特に普段と変わりなく後腐れの無い様子でいたし、俺が別の人間と付き合い合うことで機嫌を損ねるには少し時間が経ちすぎている。

そもそも、もういいもう十分だと突然、別れを切り出したのは佐竹だ。

付き合う時に断る理由が無かったのと同じく、堪りかねた様子でそう言った佐竹を無理に引き止める理由は、俺の側にはなかった。

「他の部だって黙っちゃいませんよ、特に美術部とか・・・」

「けれど、蔵書の中では手薄な分野の本で、科学部だけの利用に限定されない本だ。芸術コースや家庭科の先生なんかも使いそうかなそれに実績を出した上での申請というのは一応考慮しないとね」

「理屈捏ねてないで、結論を言つてやれ、三橋」

遠く正面からやや枯れた、乱暴な調子の声が掛かった。

見れば口の字に並べた机の対岸に委員顧問として出席している棧田が、退屈そうな面持ちで右肘を机に掛け脚を組み、窓へと横向きに座っていた。左手が所在なさげに上着の胸ポケットの縁をなぞっ

ている。さつさと委員会を終わらせて煙草を吸わせると言いたいのだらう。今の議題が本日最後の議題だった。

「わかっているなら棧田先生がまとめてください、俺を委員長に指名した時みたいに」

「生徒の自主性と自律精神を育むのがこの学校の方針だ」

まるで煙草を啜えている時の様に、軽く下唇を噛むようにひっそりと笑みを棧田は浮かべる。頭の中では別のことを考えながら口ではもっともらしいことを言う。大人の相手をする時にたまにすることだが、棧田はそういう時の俺をよく見抜き、面倒臭いと茶々を入れてくる。

「委員長」

先を促す涼しい佐竹の声が聞こえて、俺は手にした書類を机に置くかと促すようにとんとんと人差し指で表面を叩いた。

皆がいつせいに各自の手元を見る。

「一緒に申請してる他の本も、合計すれば色見本帖とほぼ同額。どちらか科学部に選択させる。別に申請された内容全部承認もしくは却下することはないと思うけどね」

「つまり保留……？ で、再申請ですか？」

一年の真ん中辺りに座っているショートカットの女子がそう首を傾げたのに頷いて応じる。

「それでも一つの部に使う予算としては大きいけど、新聞に載るような実績に対してということ。だから今回限り。他に意見か質問は？」

誰も特に何か言おうとはしなかった。再び頬杖をついて隣の佐竹を見て苦笑した。

「俺の意見で終わってしまったみたいだ。副委員長は？」

「委員長の意見で妥当だと思います。じゃあ、後日科学部には再申請上げて貰うことでもいいですか？」

佐竹の問いかけに図書委員全員が頷いた。

「では、解散」

俺の言葉に、ガタガタと皆が立ち上がり書類やペンなどを手早く片付け、何か話しながら会議室を後にしていく。一番早く廊下に出ていったのは棧田だった。各階に申し訳程度に作られている喫煙室に行くのだろう。後に俺と佐竹が残った。

「帰らないの？」

ぐずぐずと席残って書類を読み直している佐竹に声を掛けながら、議事録係が残っていた議事録の文字に目を走らせる。名目ばかりの委員長とはいえサインして棧田に回すのは俺の仕事で、棧田は回した書類をそのまま生徒会に渡す顧問だから一応確認しておく必要がある。それに会議室の鍵は棧田が持っていた。喫煙室で一服したら戻ってくるだろうから、議事録を渡すために待つつもりでもあった。

「本條さんは？」

「さあ、もう帰ったんじゃないかな？」

用事がなければ真っ直ぐ帰宅しそうだなど想像して答える。そうではないかもしれないが部活も委員会にも所属していない玲子が、放課後残ってすることなど想像もつかない。

「いつもああやって、ちゃんとしてくれればいいのに・・・」

俺の問いかけの答えと言わんばかりに鞆を机に置いて、佐竹がぼやく。話題が飛んだのですぐに反応できなかつたが、さっきの委員会かと理解して苦笑した。

「しつかりした副委員長がいるからね」

「しつかりなんかしてないっ！」

ガタンと乱暴に椅子を鳴らした佐竹の、立ち上がる勢いと少し張り詰めた物言いに驚いて彼女を見上げた。考え事をしていたので中断された時と同じく、きりきりと眉を吊り上げ心なしか頬を紅潮させている。

「機嫌悪いね、何かあった？」

「別に何も・・・心無い委員長が気にするようなことは」

「仕事押し付け過ぎてるなら、謝るよ。そっちは甘えて放ったらかしだから。手が足りてないなら・・・」

「いいわ、別に。こっちは19人いるから足りてる」

「そう？　なら、いいけど」

議事録確認者の欄に三橋洋介と記入し、筆記具と書類を一つにまとめ、足元に置いていた靴を取り上げるために腕を下に伸ばして身を屈めれば、帰る委員長と曲げた背に声が落ちた。ああ、と返事しながら鞆を手に身を起こし、机にまとめた物を収め、会議室の出入口に佇む人の気配を感じたので振り返れば、ドアを半分開けて斜めにこちら向いた佐竹が俺を見ていた。

「何？」

「もういいって言ったら、本当にもういいのよね・・・止めもしない。本條さん、一年の時間じクラスだったの。いい人なんだからちやんと付き合っただけよ」

「そのつもりだけど？」

「・・・ならいいけど」

まるで捨て台詞のようにそう言って、ふいっと背を向けて早足に佐竹は去っていった。

十(前書き)

ほんっと、お前は昔の自分見てるよつで背が痒くなる・・・

「何だ？ お前等、まだごちゃごちゃ続いていたのか？」

ほぼ入れ違いに、やけにすつきりした顔で戻ってきた棧田が、半開きのドアに手を掛けて会議室に入りかけた体を反らす様に傾け佐竹が去っていった方向を見た後、俺を見て口の端を吊り上げる。

「続いてませんよ」

「不純異性交遊なんかするからだ」

俺の返事を無視して、口の字に並んだ会議机の向こう側を回って窓側へ移動した棧田は手近な机の上に腰掛けた。

「してませんよ」

不躰な棧田の物言いに微かな反発を覚えて偽りを答えれば、胸ポケットを探りながら第一図書室ではだと棧田が鼻先でせせら笑うように言った。お見通しらしい。

「急に女っばくなっちゃったからなあ・・・ま、詮索はしないが」

「教師が女生徒に対する言葉にしては、それこそ不純な響きです」

「どうせ風音に押し切られたんだろ？ やっぱりおれが見た通り危険だったな」

「俺に言わせれば、佐竹を名前で呼び捨てにしてる教師の方が危険に見えます」

立ち上がって胸ポケットから出した煙草を啜える棧田に議事録を渡し、一番近い窓を全開にして寄りかかった。カチリと棧田の手元で音がした。

「おれはかわいい生徒は贖罪することになっているが、それで言い寄られてもお前みたいに来る者拒まずで応じないし、望まれても手は出さない」

34歳と、生徒から見れば中年オヤジの扱いになる棧田であったが、ニヒルで捌けた物言いと何気なく見せる気遣いに、生徒の、とりわけ女子からの人気が高かった。職員室より社会科準備室に籠っ

ていることが多い。棧田のところへ、何かと理由をつけて通う女生徒を何人か見かけたことがある。

「生徒を贖するなんて公言してるの、この学校でもあなた位だ」

「平等とか公平になんて、見ていないのと一緒だろ？」

「そういう事を言う人が、第一図書室での不純異性交遊は禁止なんて条件出すのが不思議です」

俺に同意を求める、言葉遊びのような棧田の言葉に呆れて皮肉のつもりで言えば、くつくつと喉元を鳴らして、煙草を口元から離して煙を吐いた。人目につかない場所となればどこでも喫煙する教師のおかげで、最近、風紀委員の取り締まりが強化されている。迷惑な話だ。

「人気のないあんな場所だからな。告白に逢引にその他諸々と都合がいい場所だろ？ 金の無いガキのラブホテル代わりにされちゃ堪らない」

「俺はあそこの静けさを気に入ってるので、その点は同意しますよ」

「本條との逢引場所になっているくせに」

「・・・相変わらず、早耳ですね」

「昨日から、学校中その話で持ちきりだ」

どこかで聞き覚えのある言葉だ。それにしても佐竹を贖する棧田が玲子は普通に苗字で呼んだのが意外だった。佐竹のように何かを任せられるしっかりしたタイプではないが、玲子は玲子で容姿も込みで教師好きしそうなタイプの生徒だろうに。

「あと、昨日日直だった本條にな、ちよつとした雑用頼んだんだが、やけにそわそわしてるんで尋ねてみたらお前と約束してるって聞いてな」

日直で、手伝わされちゃって・・・。

息を切らしながら第一図書室に現れた昨日の玲子を思い出した。

玲子に用事を頼んだのは棧田だったのか。そういえばこの男は彼女のクラスの・・・。

「担任でしたね。彼女は贖の範疇に入らないんですか」

「ん・・・まあ、怖いからな」

手にした煙草から窓の外へ流れていく細い煙を、遠くを見るように目を細めながら見る棧田に噂を真に受けるなんて意外だと言えば、そうじゃないと頭を振って煙草を口元に戻し、深く吸ってゆっくりと吐き出した。

「ガキ共が言ってるのじゃない・・・いそいでいないタイプだよ。迂闊に近づくと危険だ」

「危険？ 玲子のどこが？」

あんな生まれたてから人に飼われている猫みたいな、人懐っこく無害そうな玲子のどこが噂以外に危険というのだろう・・・。

吸い込まれていくように煙が逃げていく窓の外を、どこか虚ろに眺めている棧田を不審そうに見詰めていた俺に気がつくくと、棧田は俺を見上げて口の端を思い切り吊り上げた。

「三橋、お前やっぱりガキだな」

「は？」

「風音にはちゃんと引導渡せ、不憫で仕方ない。さっさと帰れよ施錠できないだろ？」

上着のポケットから取り出した携帯灰皿に吸っていた煙草を仕舞って、議事録を手に机から飛び下りると俺のすぐ横まで来てぴしゃりと窓を閉め鍵を掛けた。

「いいかもな、お前と本條・・・あいつなら風音と違って安心だ」

「言葉の意味がさっぱり理解できない」

窓にもたれていた背を起こし元いた席に戻って、机に置かれた鞆を取り上げる。

「ほんつと、お前は昔の自分見てるようで背が痒くなる・・・」

愉快そうな表情で見送るように俺を見る棧田に、目礼の挨拶だけして、俺は会議室を出た。すでに下校時刻は10分過ぎていた。

ピンと張った箏の絃を一本、爪を嵌めない指で弾いてみれば歪んだ愛嬌のある音がした。

今度は爪を嵌めて軽く掻き鳴らす。シャランといい響きで箏は鳴った。調弦は平調子。箏の最も基本的調弦である。姿勢を正し、一息吸って吐き出し、最初と次の音を右親指で弾く。人差し指と中指で軽く掻き鳴らす、左手で絃を押さえ・・・最初はゆっくりと、段々早さを増していく。いちいち、どの絃を、どの指をと意識しなくても勝手に音が広がっていく。

『六段の調べ』基本的奏法が効果的に盛り込まれているこの曲を弾くのは食事と同じ位に当然な事だった。習い始めの初心者が練習し、上級者にもまたよく演奏される7、8分の長さの曲。自分が奏で他人が奏で何百何千・・・何万回耳にしたか、もはやわからない。弾き終わり、また息を吐く。弾き始めると頭がぼうつとする、音だけの世界に支配され、本当に奏でているのは自分の手指なのか曖昧になっていく感覚・・・何年経ってもコントロールできない。

帰宅して、学校の課題を片付け夕食と風呂を済ませた後、三時間ばかり弾いてぷつりと糸が切れたように意識を襲う眠気に従う。こんな状態で本など読めるわけがない。

特に根を詰めてさらう曲がある時は。

宗家主催の定演会他、各方面の座敷や宴席や演奏会に呼ばれて。稀に政治家なんかのパーティの余興もある。表に出るのはもっぱら家元である叔父で、俺が必ず出るといったら宗家主催の定演会位だがたまに代役を務めることもあった。

「誰もが弾くが・・・同じ曲とは思えんな」

「帰ってらしたんですか」

「つい、さっきな・・・」

広い稽古場の入り口側に叔父が何か包みを抱えた内弟子の男一人を従えて、羽織袴の外出着で立って腕を組んでいた。浅黒い顔の鼻先が微かに赤い、宴席だったのだろう。

「お帰りなさい」

「ん、ああ、ただいま・・・もういい、それは皆で食べなさい」

後ろの言葉は内弟子に掛けた言葉で、彼は一礼して去っていった。

包みは土産の菓子折か。

「兄さん同様・・・いや、兄さんよりもっとこう・・・艶っぽいんだよなお前のは。絡みつくような引つ張られるような」

どかりとその場に胡坐をかいて座り込み後頭部を搔く叔父に目を細めた。

「随分、飲んだんですか？」

「いや、それ程は・・・もうあれだ、歳だな。すぐ酔いが回る」

「だからって、未成年なので出向きませんよ。俺は」

「まだ何も言っていない」

出鼻を挫かれて口の端を曲げる叔父に困ったように肩を竦めて、箏をシャン・・・と戯れに鳴らせば、うとう、と呻って叔父が肩から大きく頭を振った。

「適当に鳴らして、それだからなあ」

「定演会の曲をやるので、悪いけど」

「あ、ああ・・・外そう。邪魔したな」

人がいると集中できない。弾いている間は内弟子はもとより叔父ですら声を掛けるのを憚る。稽古場に一人、箏の木目と絃とそれを支える箏柱と指に嵌めた爪と・・・それ以外、向き合うものなどなく、それすらもすぐ視界から消える。

産まれた時から・・・もしかしたら産まれる前からかもしれない。誰かが奏でる音を聞き、自分が奏でる音を聞き・・・弾けば骨の髄まで染みだす音は外に出る、けれどそれは新しい音を聞くことでもある。

嫌なわけではない、奏でることも聞くことも・・・独特の恍惚感には止めるという選択を捨てさせる。いつか完全に侵食されてしまうかもしれない。強力な誘いを頭のどこかで払いのけながら何かに操られるように箏を奏でる、毎晩、欠かさず。

どんなに熱心な内弟子でも、叔父も、こんな感覚はないそうだ。

玲子は・・・どうなのだろう。早く帰宅しなければいけない帰り道、4歳からピアノ教師を呼んで習っていると聞いた。

そんなに本格的にやっているのなら、なぜ芸術コースにいかないのかと尋ねれば、あっさり下手だからと答えが返ってきた。でも楽しいし好きなのとも。

楽しい・・・か。たしかに楽しくもあるけれど。

「きつと、違うだろうな」

玲子と俺の付き合つというものの感覚と同じように。

軽く頭を振って、絃を押さえる。

最初の音を弾けば、ピンッと包まれるような深い音がした。

十一（前書き）

ぜひ、玲子ちゃんに三橋を更生してもらいたいね

「今日、木造校舎入れないんだってね」

朝の合流場所と決めた本條家の洋館の門柱で挨拶を交わしてすぐ、
そう聞いてきた玲子に黙って頷く。

「第一図書室は？」

「閉館」

ひょこんと前屈み気味に一步先に跳ねるように進んだ後、振り返
って俺を仰ぎ見た玲子にそう答えれば、そう、と玲子は言っ
て上体を起こした。肩甲骨まで伸びた黒が背中
で跳ね、肩先を滑るそれがさらさらと音を立
てるよう揺れる。

「何？」

歩き出し、玲子と並んだ俺の顔を窺うようにじつと見詰める玲子
に問いかければ、俺の顔を見たままおずおずと首を竦めよう
にして口を開いた。

「じゃあ・・・今日も読めないんだね・・・？」

一瞬の間を置いて、玲子を読みかけのままになっ
ている本のことを言っているのだと悟って、ああ、と苦笑した。
ここ二三日慌しくて、少し忘れかけていた。

「そうだな、これで四日目？」

まだ四日目なのか・・・と玲子に言った言葉を反芻する。
玲子が現れてから休み時間と放課後の度に何かあるので、一週
間以上は経っているような気分だった。

「・・・ごめんね」

しゅんと初日に棧田に呼び出された時のように項垂れた玲子
がぼそりと呟いたのに、艶々した玲子の頭の天辺を子供に
するように撫でた。俺と並んだ時の高さといい、位置と
いい、つるんと天使の輪のように艶が広がっている
見た目といい、玲子の頭は何かつい手を伸ばしたく
なる感じなのだ。

「君と関係ない理由だ。それとも君は天才的な策士家で、他人が俺の読書の邪魔をする動きを取る様に仕向けてる？」

俺が撫でた部分を片手で押さえてふるふると玲子は首を横に振った。

「なら、謝る必要ない」

「うん。三橋くんって・・・時々、思いもつかないこと言うね」

「探偵小説好きみたいだから、そういう可能性もあるかなと・・・」
「うーん・・・たぶんないと思う」

歩きながらしばし自分の事を省みるように呻って、思い当たる事は無かったのかにつこりと答えた玲子に、一応、可能性を考えてみるのかと俺は思った。そして否定しなかったところを見ると、やはり玲子は探偵小説が好きなのようだった。

「久生十蘭は読み終わった？」

「ええ、でも読み返してるの」

「何か気に入った短編があった？」

こくと玲子が楽しそうに頷いた。あんまり楽しそうだったので思わずつられて目を細めてしまった。俺が本を読めないことも気にしつつ、自分は自分で楽しんでる。人によっては身勝手と捉えるかもしれない玲子の天真爛漫さというのは、憎めない美点だと考える。

因果関係もはっきりしないのに、変に卑屈に氣遣われても氣が滅入るだけだ。

「そっいえば、三橋くんは何を読んてるの？」

「横光利一の“春は馬車に乗って”」

「可愛い題名ね」

作者と題名を告げる。玲子はどうやら俺の読んだ本について何も知らない様子で、作者より先に題名に反応した。確かに題名だけ聞けばなんとなく牧歌的で玲子の様な少女が好みそうな響きだ、それでいて内容は肺を病んだ妻と彼女を看病する夫の夫婦間の愛憎入り混じる応酬が淡々と綴られている。

「そうだな・・・復刻全集の一冊で、装丁もちよつと可愛いらしい。外箱に口バが引く馬車のシルエットの絵とかあつて」

どんな話と聞かれて答えたら困惑しそうなので、苦笑しながら本の外見について教えれば、玲子が興味深そうな表情をして見せたので今度見せるよと約束した。

「明日は読めるといいね」

「まったくだ。どうもここ二三日、密度が濃いからそろそろ落ち着きたい」

「密度？」

「毎日、色々と・・・新入生とか、委員会とか」

学校前の道路にでるだらだらと緩やかにカーブする住宅地の道を歩きながら、右手で顎を掴むようにしてここ二三日の出来事を思い返す。ちらりと佐竹の事が頭を過って消えた。

「昨日は委員会だったのよね。どうだった？」

「どうつて？」

「無事終わった？」

「終わってなかったら、まだ会議室にいるよ」

そうねと何がおかしいのかくすくすと玲子が笑う。まだ四日目だが、四日とも何か玲子は楽しそうに見えた。いつもそうなのか、たまたまそういう時期なのか、それとも俺と付き合い始めた事が多少影響してるのかはわからない。

玲子とちゃんと付き合い合えか・・・。

根拠のない俺の一方的な印象だが、俺と付き合い合つ事とは関係なく、いつも玲子は楽しそうであるような気がした。

溜息吐いたり、怒ったりしても、玲子は底に暗いものが感じられない。

「放課後、何か用事ある？」

学校前の道に差し掛かり、ふと玲子の横顔を見て何となく尋ねてみた俺の言葉に彼女は首を傾げる。今日は生徒が最も多くなる時間帯を避けているので並んで歩く。

まるでパソコンが演算処理をしているように、数秒ほど沈黙して玲子は口を開いた。

「うっん、特には」

「どこか行く？ 第一図書室は閉館だし」

たとえ第一図書室を開ける必要が無くても、新校舎完成が迫ってきている今、第二図書室と蔵書リストの突合せ作業を行う仕事があるにはあるのだが、昼休みの内にやってしまえばいい。第二図書館はデータベース化されているため突合せ作業は大した手間ではなかったし、まだ四日目とはいえ、こうして朝、共に登校するだけの付き合いなので、互いに放課後の都合が合うなら玲子と街をぶらついてみるのも悪くないように思えた。

「あ、じゃあ・・・あ、やっぱり急かな・・・うーん」

急に何か思いついたように大きく目を見開いてすぐ、また何か思い直したように考え込みだし、最終的に俯いて呻ってしまった玲子を怪訝そうに眺める。

「何？」

「あのね・・・」

言いさして、また口を閉ざしてしまった玲子に首を傾げれば、視界にガードレールを隔てた車道を自転車の大群が歩くのとはほぼ同じ速度で走るのが見えた。自転車置き場の入り口がつかえて渋滞になっっているのだろう。

「三橋くんの・・・お家・・・」

ぼそつと漏らした玲子の呟きに、ああそついえば玲子は俺の家を知らなかったなと思ひ出す。こちらは玲子の家を知って毎朝、門まで訪ねているのにそれは不公平に思える。

「俺の家？」

「うん」

「構わないよ」

「本当?!」

人の出入りは常にあるだけに来客には慣れている家だ。それに玲

子は自分の客になるわけだから家の者の都合は関係ないため、特に支障はない。玲子の表情がわくわくと嬉しそうなもの変わる。その表情のまま俺を見上げて玲子は言った。

「三橋くんのお家行ってみたいなって。やくざの親分みたいなの、大きいお家なんでしょう?」

「まあね」

それはそうなのだが・・・一体それは、俺の家だからなのか、やくざの親分みたいな家だからなのか、大きな家だからなのかどれに重点を置いた言葉なのだろうか。

「玲子・・・」

「はい」

「君は、時々、思いもつかないことを言うね」

ゆっくりと不思議そうに玲子が首を傾げる。そうかなと大きな目が言っていた。

噂や、お嬢様であるとか少し天然であるとかそういういった評判を別にして、玲子は何か物事の気にかかるポイントが少し変わっていると思った。

アツ、ハハハハハハツ、ハハツ・・・!!

「笑い過ぎだ、三田村」

廊下を歩きながら窺めた。三限目は選択授業で地学だった。隣のクラスで授業が一緒になる三田村に、講義棟の教室へ向かう途中、今朝の玲子の話を聞かせたことを軽く後悔した。三田村はまだ盛大に笑い声を立てている。すれ違う、自分の教室に戻る途中の新生や上級生から奇異の目を向けられても、三田村はまだ笑い続けた。

「・・・騒がしい」

「た、たしかにさっ・・・お前の家って門の向こうに看板あるから、やくざの家だって誤解してる連中いるけどっ、ハハツ・・・」

「三田村」

「普通、それを聞いたとして行ってみたいって思う？ あゝもうッ、玲子ちゃん面白すぎるっ！！」

「一つ言っとくが、その誤解についてはお前も一役買ってる」

夜の街で何かやってるらしい三田村が出入りしている家には、和服きた大人に頭を下げて出迎えがあるとか、その家から出てきた黒塗りのやけに大きな車に平日学校休んだ俺が乗っていたのを見たとか・・・そんなこんなで、三田村とつるむ三橋はやバいと、別の街から電車と自転車を使い、俺の家の前を通って通学してくる生徒の一部に誤解があるのは知っていた。たしかに三田村や俺と接点が無い生徒がそこだけ見れば、思い違ってしまうのも有り得ない話ではない。

三田村の言う通り、三橋流箏曲の看板は門の内側、正面玄関に掲げられているし、一般的な高校生には邦楽なんて縁のないジャンルのものでろう。

実際は、三田村については彼の父親が道楽半分に営んでいるバーでアルバイトをしているだけであり、俺の家に遊びに来た三田村を出迎える和服を着た大人というのは、叔父の内弟子であるのだが。ちなみに黒塗りの車というのは叔父が使っている自家用車である。

一応、紫綬褒章なんて大層なものも貰っている三橋流箏曲宗家の家元であるため、対外的にそんな安っぽい車にも乗れない。やけに大きいのは贅沢とか威を示すとかではなく、箏というかさばる楽器を積み、更にお付の内弟子も乗せるためという完全に実用上の理由だった。そもそも叔父は、俺の父親から家元を継ぐ前は、今にも故障しそうなボロの四駆に乗っていたような男である。

平日俺が乗っていたのはたぶん、何かの理由で断り切れずに演奏しにいった時だろう。

まあ、堅気の家かと聞かれれば、いわゆるサラリーマンや事業家や公務員の家ではないので微妙なところではあるのだが・・・。

「玲子はやくざの家と聞いたから行ってみたいと言ったんじゃない。やくざの親分みたいに、大きな家だから言ったんだ」

「どっちだつて対して変わんねーだろ？　なんて言うかさ、玲子ちゃんって今までにお前に近づいた女の子の中にはいないタイプだよな」

「さあね」

「何かお前と合う気がするよ。ぜひ、玲子ちゃんに三橋を更生してもらいたいね」

「そうか」

「お前がこんだけ心理的に振り回されてるのも珍しいからな」

「別に振り回されてないし、玲子も振り回すようなタイプでもない。むしろ女の子としてはとてもマイペースで安定していると思う。」

「ま、仕方ないな・・・」

選択授業の講義を行う教室に到着したのとほぼ同時に、ガツッと三田村が俺の左肩に手を置いて体重を乗せてくる。

「俺も遊びに行つてやるよ」

「頼んでない、佐々木むつみとデートしないのか？」

三田村は剣道部に所属しているが、道場にも現在改修工事の手が入っていて部活動は休みになりがちだった。

「お母さんと買い物なんだつて、かわいいだろ？」

「でれでれと相好を三田村が崩す。」

強面の男の目じりが少々下がったところで、見た目として気味が悪いだけだ。

母親と買い物で何がかわいいのだろうか・・・そもそも何故、三田村が玲子と一緒に俺の家に来る流れになつているのだろうか。別にそのこと自体は特に構わないけれど、先程の三田村の物言いだとまるで俺が玲子を一人で迎えることが出来ず、三田村に頼んでいるようではないか。

じつと不可解な気分で三田村を見ると、だつてさ・・・と三田村は言った。

「玲子ちゃん、いちいち反応が面白そうじゃねえか」

まあ、確かに面白そうではある。

「そういう高みの見物みたいなの楽しみはあまり好きじゃない」

「へいへい、いいんだよ・・・俺個人の楽しみなんだから」

「・・・わかったよ」

半ば三田村へのおてつけに大仰な溜息を吐き出して頷けば、丁度授業の前の予鈴が鳴った。

十二(前書き)

いいよ、全部弾いて。

“彼は自分に向つて次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと思つたことはまだなかつた。此夫々に質を違へて襲つて来る苦痛の波の原因は、自分の肉體の存在の最初に於て働いてゐたやうに思はれたからである。”

前に読んでから五日が経っていた。本に挟んでおいた棊を頼りに頁を開き、冒頭から文字を追いつながら、ああそうだったそんな風だったと、すでに読み終えた記憶と文章を反芻する。ふと、何かが脳裏にちらりと過つた気がして、何が過つていったのか、じつと思考の中で自分の頭の中を覗き込んだが見つからなかつた。奏でる音と同じで、一度過ぎたものはもう戻らない。

それにしても一体、どこをどう計測し、何をやっていったのか。昨日、木造校舎をくまなく探つていったに違いない複数人の業者の気配は跡かたもなく消滅していた。柱や壁にチヨークの書き込みでもあるだろうかと予測しながら、放課後に第一図書室の鍵を開け、あまりに変わらない様子は拍子抜けだった。本当にあと3、4ヶ月で校舎諸共無くなつてしまう場所なのか疑わしくすらなる。昼休みは開けられなかつた。棧田から職員室に呼び出されたのだ。いつも社会科準備室に籠つていて大抵の生徒をそこに呼びつけるくせに、俺に対しての呼び出しは職員室と決まっていた。用件はやはり第一図書室の事で、主語も述語もなく顔を見て突然「8月10日迄だ」と言われた。何が、と眉を顰めたら「鍵」とひどく億劫そうに心なしか苛々した様子で棧田は一言で補足した。

8月10日に棧田から預かつた鍵を返せという事らしい。それが第一図書室の存続期限だった。苛々しているのはきつと煙草が切れているのだろう、流石の棧田も職員室では禁煙せざるを得ない。嗜なむというより立派に中毒しているんじゃないのかと思つたが口に

は出さず「わかりました」とこちらも簡潔に返事をして職員室を出た。

「8月10日か・・・」

五日ぶりに開いた本を片手に、椅子の肘かけに頬杖を突く。

なら、少なくとも6月中には新校舎へ移動させる蔵書のリストアップを終え、7月頭の委員会で全て可決させなければならぬ。生徒だけで本の移し替え作業は無理だから業者を手配する算段もある。7月末には完了させておきたいと思った。ついさつき感じたばかりの疑わしさは一気に具体性を帯びたスケジュールにすり替わった。

春の大型連休が再来週末に迫っていた。いい陽気でもどこか肌寒さを含んでいた気候はいまや完全に穏やかな温かさとなり、こうして第一図書室のカウンターの内側に座り、アンティークな風情の窓ガラスを通した日光を燦々と浴びているとのぼせそうになる。桜は週末を待たず散ってしまった。遣された赤茶けた萼を押し退けるように緑の葉が勢いを日に日に増している。花を惜しむ人の気など彼等の営みに何の関係もない。自然はかくも薄情であっさりとしている。そんな風に皆あっさりと過ぎていけばいいのだが・・・などと取りとめもなく考えたりしてしまうのは、読み返した本の世界に入りかけている証拠だ。

自分以外に誰の姿もない今日の第一図書室はとても静かだった。それが本来のこの場所だったと俺はひっそり苦笑して再び本に目を落とす、読んでいない続きはまだもう少し先だった。

“彼は苦痛を、譬へば砂糖を甜める舌のやうに、あらゆる感覚の眼を光らせて吟味しながら甜め盡してやらうと決心した。さうして最後に、どの味が美味かったか。俺の身体は一本のフラスコだ。何ものよりも、先づ透明でなければならぬ・・・”

遠く微かに聞こえていた旋律が段々はつきりと聞こえてきたのに、

はつとした。跳ねる様に振動した自分の体が自分の意志で動いたのではない感じで数度瞬きをした。陽を浴びて熱くなった髪を掻き回し、額に手をあてる。頭がぼうつとしていた。うたた寝していたらしい。一体何時から？ どれ位？ 腕時計を確認しようとして手の甲に硬い角がぶつかった。本は頁を開いたまま膝の上に乗っていた。あらためて時計を見ればもう16時半を回っている。

図書室を見回せばやはり誰もいなかった。違いといえば、静けさをピアノの旋律が埋めている。同じ階にレッスン室として開放されている教室で誰かがピアノを弾いている。珍しい。芸術コースの生徒は大抵ちゃんとしたレッスンに通っているし、自宅に当然ピアノもある。木造校舎と違い完全防音のきちんとしたレッスン室は講義棟にもある。受験日が迫る時期の昼休みならいざ知らず、新学年が始まったばかりの放課後にわざわざ木造校舎へ練習に来る生徒なんかない。

カウンターから脚を降ろし、本を閉じて後ろ手に事務机に置いた。誰だろう・・・速くてやけに強弱がはっきりしていて、少し危なげなシヨパンの幻想即興曲。

だって、下手だもの。

ふと、玲子の言葉が浮かぶ。まさか、いや、もしかすると・・・椅子から立ち上がって顎を掴みながら出入口のドアの向こう廊下から流れてくる音に耳を傾ければ、丁度曲調がやや緩やかに変化する部分に入る、途端に躓く。早い部分よりもっと危なげになる。

これはひよっとするかもな・・・苦笑しながら、事務机の抽斗に本をしまった。もう閉館支度の時間だ。閉館支度といっても俺の脚に蹴散らかされて、カウンターのの上にばらけた二三本の鉛筆を端にまとめて、鞆と鍵を手にとって司書部屋を出て、開いている窓を閉め、廊下に出てドアの鍵を閉め。柱にかかる札を裏返し“閉館”と示す。それだけ。曲が終わる前に音源に辿りつけるだろう。一番近い教室にランドピアノがある。

曲調がまた冒頭に似たものへと変化する。それにしても短調の部

分の方が楽しそうに思えるのから面白い。そんな事を考えながらのんびり歩いて覗き込んだ教室に、淡い黄色な光を背に受けた制服の少女がピアノに向かっていた。まだ海外旅行が洋行と呼ばれた頃に欧州へ出た日本人画家が描いた絵のようだったが、その表情を見て思わず笑みの声が漏れた。

ふっくらした口元が完全にへの字形をとっている。曲が終わった。「練習？」

声を掛けたら、飛び上がるように頭を上げた。誰と、見開いた眼が不安げに揺れた後、ゆっくりと緩む。俺に焦点を結び、網膜が伝達した像が誰かを脳が判別し、ああ三橋くんだと思考に結びつく過程を見るような玲子の眼差しの変化だった。

「あ、もしかして聞こえてた？」

「完全防音じゃないから」

図書室と同じ金属製のドアだが、それでも防ぎきれない。まだ少しぼかんとした様子でピアノの椅子に腰掛けている玲子に近づくと譜面台の脇に肩肘をつけて寄りかかった。

「うわっ、じゃあ起こしちゃった!？」

「いや、知らない間にうたた寝して普通に起きた。来てた？」

「う、うん・・・えっと・・・」

肯定した途端、急に頬を赤らめて俺から顔を背けるように俯くと、所在無く身を擦るように両手を中途半端にばたばたし始める玲子に、どうしたんだと眼を細める。

「ええつとね、あの・・・本！ 返さなきゃと思って・・・だって月曜日借りたでしょ？ 一週間だと日曜日が期限でお休みで・・・それでねっ」

「・・・そんなに慌てて言わなくてもいいよ。寝ている間にキスでもした？」

「しないですっ!!！」

思い浮かんだ経験上の前例を冗談半分に尋ねてみたら、教室中に響く大声で怒鳴られた。

「顔なんか赤くしてるから・・・大声、出るんだな」

うん、というより、ぶんっと表現したほうが相応しいような勢いで玲子が頷く。とはいえ、本気で怒っているわけではなさそうだった。

「それで？」

途中になつていた玲子の言葉を促せば、少し落ち着いたように尖った顎を傾けてこちらを見た。ただでさえ身長差があるのに、玲子は腰掛けて、俺は立っているものだから何だか小さな子供と向き合っているような感じだった。

「それで、図書室に入ったら三橋くんうとうととしてたから・・・ちよっと待とうかなって」

「起こせばよかったのに」

「無理よ！！ だつてすごく気持ち良さそうで・・・なんだか幽霊みたいだったし」

幽霊、とはまた思いつけない言葉だ。思わず絶句してしまった。俺の沈黙にはっとしてまた慌てて玲子は幽霊という形容に対する補足を述べてくれた。

「あつ、えつと日本のじゃなくて、外国の！ ヨーロッパとか、昔の教会の絵とか・・・こうさあつと射してくる光の中にいる」

「それって、聖人の事？」

「そういうの。それとかね、小説とかで、誰もいないはずの塔にじつはひっそり貴族の男の人が暮らしてたのを発見したみたいな感じ」

翻訳ものの探偵小説に出てきそうだなと言いつけて口を噤んだ。

玲子の想像力は結構詳しい。それにしてもうたた寝していて幽霊もしくは聖人または幽閉された廃嫡貴族にされるとは思わなかった。

「何だか・・・図書室にいちゃいけない気がして」

「それで、ピアノの練習」

「こくと玲子は頷いた。

「ピアノがあつたから・・・今やってる曲が苦手で」

「シヨパン？」

「うん、聞くのは好きなんだけど・・・」

「ああ、そういうのってあるな」

むしろ好きな曲なのに、どうにも手が調子良く弾けない曲がある。聞いていて好きなだけにむきになる。そしてますます好きな響きから遠ざかる・・・玲子の言葉の中では今までで一番理解できたかもしれない。

「三橋くんでもあるの？」

驚いたように眼をぱちぱちさせて玲子が尋ねてきた。昨日、俺の家に来た玲子は、三田村が期待するほどのリアクションを残念ながら見せなかった。三田村が逆上した内弟子の出迎えにも平然と礼儀正しく応じた。三田村は流石は本條家のお嬢様と玲子に聞こえない小声で感心していた。確かに真正面から俺の家を平然と訪ねた同年代の者は少ない。佐竹も来た事は二三度あったが勝手口から入っていた。そちら側の方が俺の部屋に近いという利便上の理由もあるが祖父が母屋と廊下でつながるように増築した離れ。粹人仲間を集める広間を兼ねた稽古場と客間二室の全部が俺の部屋だった。昨日はそこまでは行かず、玲子と三田村とは始終母屋の居間で、たぶん叔父がどこかで貰ってきたものらしき菓子を食べながら取り留めのない話をして帰った。

俺達を迎えて、荷物を預かる内弟子以外はすぐに母屋の稽古場に戻り、やがて箏の音が居間にまで聞こえ始め、ふとその音に気が付いたように飲んでいた茶の茶碗を口元から離れた玲子は俺の家について尋ねた。彼女が見てみたかった“大きな家”を実際に目にして満足し、そういう家だと特に何も疑問を思っていなかったらしい。そういったところは三田村が呟くように、重要文化財級の洋館に住んでいるお嬢様らしい感覚ではあった。

「プロの“ソウキョクカ”なんでしょう？」

言い慣れない単語を発声する玲子に、ピアノに頬杖ついたまま思わず笑ってしまう。

「君がいうと何だか花の名前か何かみたいに聞こえるな。あるよ、

相性悪い曲だなって思う」

「そうなんだ」

「自分の流れみたいなのを捻じ曲げないと弾けない・・・じゃあ、得意なのは？」

「うーん、ベートーベン・・・かな？」

玲子の外見イメージでいけばショパンとベートーヴェンでは逆の様な気もするが、この五日間で見えてきた玲子の言動から考えるとこか納得のいくような答だった。すぐ真下にある鍵盤を見下ろし、その視線を玲子の手元へと動かし、そしてこちらを真っ直ぐに見ている玲子の顔へと移して、俺は軽く微笑んだ。

「弾いてみて」

「え？」

「好きな曲」

ぶんぶんと玲子が大きく横に首を振る。

「何で？」

「だって、三橋くんプロだもん」

「西洋音楽は素人だよ。それに・・・プロというより俺の場合は家業の手伝いみたいなもので修練した演奏家とは違うし、批評家でもピアノ教師でもない。それにさっきの危なっかしいショパンよりはたぶんいいだろうし」

うーん、と呻っている玲子に少々意地の悪い気分で更に畳み掛ければ、恨めしげな上目で睨まれた。

「酷い・・・言い方」

「でも、おそらく事実じゃないか？」

「そうだけど・・・三橋くん、聞きたい？」

「聞いてみたい」

返答したら、ぴくんと玲子の長い睫が震えて、またじつと俺を見る。猫が時々思案気に宙をじつと凝視するように。俺にピアノをせがまれて何を考えているのだろうか。無理なら無理でそれ以上強制するつもりはないが、玲子という、時折思いつかないことを言い出

し、自分から付き合えと要求したわりにこちらが心配するほど淡泊な少女が、無理をせずに出す音を聞いてみたくなった。だからといって聴いて何がわかるといわけではない。箏とピアノ、邦楽と西洋音楽では全然違う。それはただの興味本位で単純な音への欲求だった。

「わかった」

きつぱりと、何かの覚悟を告げるような凜とした声が聞こえて、俺は頬杖から顔を上げて、ピアノの側面に背を預け直した。こうすると本当に俺が玲子のピアノ教師のような形だ。鍵盤に白く形のいい両手を構えるように乗せて、真っ直ぐにピアノに向き直った玲子がちらりと視線だけで俺を見上げる。

「ん？」

「本当に、芸術コースの子達みたいに上手じゃないから・・・」
妙に張り詰めた表情で言われて苦笑する、俺は先生じゃないからと言うと漸くくすりと玲子も笑った。何を弾くのか『月光』とかその辺りだろうか。

「それじゃあ・・・」

そう言つて、玲子が両手同時に鍵盤をゆつくりと押した。重く低い・・・鍵盤から離れた指がゆつたりと沈鬱な調べを奏でる。聞いた事がある曲だが、すぐに題名が思い浮かばない。

徐々に音を高くして、そこから滑らかにまた下がる軽やかな旋律に追従する重く暗い和音。ふいに囁くように右手の音だけとなり、拍を置いて突然早くなったところで、ひらめいたように曲名が解つた。

叙情的なメロディーで一般的には第二楽章ばかりが有名なピアノソナタ。

「“悲愴”の第一楽章？」

弾いている時の体の揺れの延長で玲子が浅く頷いた。

「通して好きなの」

「いいよ、全部弾いて」

ピアノに凭れていた背を持ち上げて、玲子に斜向かいになった。凭れていたら骨に違う音が響く。さっきのよろよろ歩きのようなシヨパンとはまるで違う。相当、弾き込んでいる感じだった。好き嫌いが激しいのかもしれない。楽しみで弾いているなら、そんなムラも許される。勿論、弾き込んでもプロ並みとまでは言えない。それでも、二年あれば音大へ進路変更しても余裕で間に合いそうに思われた。ゆらりと遠のいては急旋回して迫ってくるようなアクセント付けと弾き方。独特の、深みに足を引き入れる波のような。

確かに玲子向きだ、そう胸の内では呟いて眼を閉じた。

玲子とピアノが消え、夕方の光が瞼を透る白っぽい視界に自分と自分が奏でるのじゃない音が広がりはじめた。

十三（前書き）

“彼”は確かに絶望した。

音が聞こえなくなったからだけではなく、それでも逃れられないと・・・俺はそう思う。

パイイン。
月光だけを照明にした薄暗い離れの稽古場にピンと張った弦の音が響く。

祖父が住んでいたところは粹人仲間を集める広間を兼ねていた稽古場は、離れの東側角に八畳間を縦に並べるように構え、部屋の二辺が庭に面している。硝子戸によつて外と内を隔てている縁廊下に出る障子を全て開け放せば、庭から月の光を室内へとふんだんに取り入れられた。

今夜は薄曇りで、明るい月の前を時折薄い雲がすうつと流れては影を落としていく。庭の中で一番広く幅を取っている部分に据えられた建物なので、室内からは近所の家は庭木に遮られて見え、水墨画のような濃淡による夜空と木々が見えるだけ。そんな部屋だからかつては観月会なんかもやっていたらしい。

母屋には叔父や内弟子が使うもう少し手頃な広さの稽古場があり、別棟に音響を完全に配慮した通いの門下生の為の正式な稽古場もあったが、複数の人間が使うのでどことなく雑然とした空気が漂っているし、母屋のは完全に建物の内側で中庭が少し見える程度であり、別棟は表玄関のすぐ近くにあるので母屋の建物か正門を眺めるばかりだ。そんな訳で俺が使うのは離れの稽古場だった、小学生の時に亡くなった父から継いだといえは稽古場と愛用の箏くらのものだ。父は俺に稽古はつけなかった・・・というより好きにさせると言うてくれていた。

琴柱の位置を調節して、また絃を弾く・・・ああ、いい響きだ、今夜は機嫌がいい。

いつも通りに六段をやつて、一休みして最初の一音を鳴らす。

パイイン・・・ッ。

音が自然に消えそうになるまで軽く揺らして響かせ、両手を十三

本の絃の上で動かし始める。ゆったりしたテンポの曲の割りに左手を結構忙しく使う。

一オクターブに五音。箏と同じ五音音階。けれど、西洋音楽だから平調子に合わせた絃とは音が違う。

違う音を絃を押し合わせる。弱く押せば半音、強く押せば一音上がる。それに加えて余韻に音を揺らす揺り色、余韻の音を変えるために音の途中で絃を押し離したりする押し放し、絃をすばやく突いて一瞬の音を変化させる、突き色・・・左手の奏法をなかなか駆使させる。しかもいつも弾く曲とはテンポの構成が違う。

もつとも西洋音楽的に見ても違うようだけれど・・・。

sans rigueur 堅苦しくなく、テンポを自由に動かしながら。

テンポの縛りが無いなんて・・・一定テンポを保つのが基本の西洋音楽では奏者泣かせな曲だろう。お言葉に甘えて好きにさせてもらった。伴奏してくれたピアノ奏者は始め合わせられずに困惑していた。とはいえ、一度のリハーサルで何とかなるのだから流石はプロだ・・・いや、プロの卵だったか？ 覚えていない。だが、人生の大半の時間を音楽の修練に使っているというのはこういう事かと感心させられた。去年の夏に、叔父が客員教授を務める音大の一般公開講座で叔父の代役で弾いた曲・・・響く調べは甘く、色どり豊かでうっとりとして流れていく。

「おお、「夏の明るい陽を浴び、雲雀とともに愛を歌う、桜桃の唇をした美少女」よ」

突然、斜め後ろから掛かったややおどけた調子つ外れな声に丁度小節の終わりで手を止めた。

シャラン・・・と、絃の音が余韻を残す。

とすとすと、畳を踏む足音はやや乱れ気味。千鳥足というほどではないけれど。

機嫌がいいのは箏だけではないらしい、振り返れば上機嫌そうな

叔父がいた。洋服を着ていて、きちんとしているがスーツではないところを見ると繁華街の奥で遊んできたのだろう。繁華街の奥には料亭が立ち並び、座敷に芸者が上がる通りがある。

「クロード・アシル・ドビュッシー“亜麻色の髪の乙女”。珍しい曲弾いてるな」

「おかえりなさい・・・酔ってますね」

「おお、ただいま。タイムリーだな洋介。丁度、その曲因縁の対決を鈴千代とやって勝ってきたところだ」

そう言つて、俺の正面に片膝を立てるようにして叔父は座り込んだ。

やれやれ・・・酔うと俺の筆を聞きに来る癖をいい加減に治してくれないものだろうか。少し酔った程度なら気が散ると言えば大人しく母屋に戻つてくれるが、本格的に酔うと動かなくなる。

「因縁つて・・・“こんぴらふねふね”で勝つのに、どれだけ飲まされたんだか」

「まあ、細かい事は気にするな」

「・・・お座敷遊びに白熱して突き指して弾けないとか、今年は無しだから」

去年そのために叔父の代わりに弾いたのだ。

一門の定演会しか基本出ないとしている俺を、表に引つ張り出すための方便としか思えない。方便じゃなければ、家元としてどうなんだそれは、と思う。

「心配するな。今年は私じゃなくてお前ご指名だ」

「は？」

「いやあ、去年の公開講座の評判よくてな。生徒のリクエスト多数で学長からぜひにと！」

「ぜひに、じゃない！」

「・・・そう言つと思つたから、一応返事は保留にしておいた」

二人同時に溜息を吐き出した。俺は安堵の、叔父は嘆くような溜息だった。

「なあ、洋介・・・詩織のようにとまでは言わん。けど、折角なんだからもうちょっと表に出てもいいんじゃないか？」

国内外でリサイタルを行い、海外の一流オーケストラとの共演もしている叔父の娘、つまりは俺の従妹の名を上げて言われたが、俺にとっては逆効果だ。

「おじ・・・父さんこそ・・・」

「別に、無理して呼ばなくていい」

特にこれといった感情の揺れもなく言われて、琴柱の位置を直す振りして軽く斜めに顔を背ける。

父と母はかなり年が離れていた。父は二度目で、母は初婚。最初の妻との間に子供はなかなか間を空けて母と結婚してできた俺は彼の晩年の息子だった。ちなみにその四年後に妹が生まれた。父は兄妹どちらも溺愛した。

俺が八歳の時、すでに六十五だった父は他界し、その時、母はまだ四十。二十五歳差だ。父に筆を習っていた、代々地方の議員を務める家の娘で大恋愛だったそうである。俺が生まれても母方の家とは絶縁状態だ。父が亡くなった時、叔父は三十八。父と叔父の間に二人の女姉妹がいて、叔父もまた祖父の晩年に生まれた末っ子で、祖父に溺愛されて育った。

男親に甘やかされて育った者同士、大変気は合うのだが・・・それに母と叔父が恋仲になって結婚したのは父が亡くなって三年後だ。叔父が門下で教室を構える前妻と離婚したのは父が亡くなる五年も前だし、離婚当時二歳だった娘は妻側が引き取って、叔父は立派な奏者に成長して活躍する娘に今も養育費を払っている。

父が亡くなった後に叔父と結婚したなんて言えば複雑な家庭に思われそうだが、全然そんな事はなく、それぞれなんの後ろ暗いことはない。強いてあるとするなら娘同然の歳の母を娶った父だろう。軽く犯罪である。

それでも俺が叔父を父と呼べないのは、やはり父が持つ威厳と音

が沁みついているからだ。仲のいい悪友のような叔父を父と思うには違和感がありすぎる。それと……。

「俺より、自分の娘にもうちよっつと目をかけてやったらどうですか・
・詩織は文句無しに一門の奏者の中では活躍してるし、実力もある」

「あいつはだめだ・・私と同じく凡庸だからな」

「家元が何言ってるんだか・・」

「兄さんが生きてたら、なるうとも思わず回ってくるはずもない役だ。なあ、洋介・・お前はその兄さんが“稽古をつける必要がない”って言った息子なんだぞ」

もう何十回と聞いた台詞にうんざりして俺は溜息を吐いた。叔父は父の言葉を曲解している。

「正確には“好きにさせとけ、稽古なんか必要ない”。やりたければ習うし、やりたくないなら習わないだろうってだけの話だ」

「あのなあ・・洋介。そのつもりなら乳幼児に使い古しとはいえ、自分の箏なんか与えるわけないだろお前の父親が。一門の人間を實力だけで黙らせた、あと数年長く生きてたら人間国宝だってありえた人だぞ！」

まさか、それは無いだろうと思ったが、叔父の父に対する尊敬と憧憬の念は並みならぬものがあるので黙っておいた。母と婚約する時に父の墓前で土下座した人だ。ちよろちよろ粹筋の女性と遊ぶ人だったが、父という後ろ盾を失った母を一門の有力者を敵に回して守った。そこまでされて子供の俺が否やとは言えない。まあ、反対する気もなかったけれど。寧ろ夫婦としては父よりお似合いだと思っていた、父と母ではどう見ても親子だ。

「晩年の息子だから可愛かったんじゃないかな？ 叔父さんだつて

お祖父さんに色々もらってるじゃないですか」

「遅がけに出来た馬鹿息子が可愛いのと、自分を凌ぐ天分を持つ一人息子じゃ全然違うんだよ。なんでわからんかな・・お前は」

「叔父さんこそ、どうしてそこまで思い込み激しいんだか」

「まあいい。とにかく弾け、家元命令だ！」

「横暴だな・・・寝ないでくださいよ、後で母屋に運ぶの大変なんだから」

「ふん、放っておけばいいだろう」

「朝になって母さんに泣きつくじゃないですか、俺が放置した、継父いじめだつて」

母が細かい事にこだわらない人だから冗談で済んでいるもの、まったく悪趣味な叔父である。おかげで父の神経質を受け継いだ妹から、蔑みの目で見られているというのに。

「第一、気が散る・・・一曲弾いたら母屋に帰ってください」

わかった、わかった。兄さんそっくりなんだから・・・といつて俺が中断された曲を頭から弾きだすとびたりと黙って目を閉じた。

箏で弾くドビュッシー・・・その時の叔父の公開講座のテーマは確か『西洋音楽にみる東洋的音階』だったか。父の背を追って誰より修練を重ね一門随一の技巧を持つ奏者と認められても、父と自分は違うといつて邦楽だけでなく西洋音楽も深く研究し、単に一門だけでなく箏曲界全体に貢献する活動をしている人だ。いまでは誰もが家元として彼を認めている。

そんな人がろくに稽古もしていない、我流に限りなく近い俺を何故自分の後に据えたがるのか、やっぱり父の息子だからだろうか・・・
・迷惑な話だ。

昔から、叔父はこうと思ひ込むと頑固で誰にも手が付けられなかった。

まったく・・・他の人達が認めるわけがないのにと苦笑して、俺も次第に自分の手元から響く音に没頭する。

今夜は本当に音の響きがいい。うっとりするような余韻の音だ。かき鳴らす右手でつい絃を慈しんでしまう。こんな風に機嫌がいいと、絹の糸を象牙の琴爪が弾き、しゅっと擦る時の感覚がとても艶かしく思える時がある。内側で常に響く音を思うまま、思う通りに

吸い込んで鳴って・・・それよりもずっときれいな音があると誘う。この楽器と交感する実感が聴力の障害で遮断されたら地獄だ。

“彼”は確かに絶望した。

音が聞こえなくなったからだけではなく、それでも逃れられないと・・・俺はそう思う。

十四（前書き）

「三橋くんも小さい頃からたくさん音、聞いた？」
「家がああいう家だからね」

十四

ベートーヴェン、ピアノソナタ第8番“悲愴” 全部弾いてと言ったら、本当に三章全部を玲子は弾いてくれた。俺に言われてというよりは彼女自身が夢中になってと言った方が正しかったが。その名の通り、明るい旋律となっても底にどこか重みのある曲を実に楽しそうに弾いていた。あんなに楽しそうに弾くのに、玲子の指が奏でる音には暗さが、いや暗さではないな・・・透明な陰鬱とでもいった感じの響きがあった。まさに曲に相応しい。

特に、一般的に人気の高い第二楽章、明るい物哀しさは秀逸だった。目を閉じていたから玲子が弾いているということを一瞬忘れて響きに没頭した。第三楽章のややドラマチックな出だしがなければ暫く我に返らなかつたかもしれない。技巧の程度はしらない、たぶん普通より少々上手い程度なんだと思う。俺にとってはそんなことはどうでもいい、うっかり引き込まれてしまった音を聞いたという事の方が重要だ。浮気というのはこんな気分かと少しだけ思っただけで苦笑した。

よろよろしたショパンといい、どちらかと言えば早めのテンポの方が得意らしい玲子だったが第三楽章はそれをよりはつきりさせた。あの普段おっとり天然気味の玲子と思えない感じだった。大作曲家が作った曲の妙でそう感じてしまうのか、高音をじつに哀しく情熱的に響かせる激しさに、閉じていた目を開いてピアノを弾く玲子を見詰めていた。玲子は演奏に入り込んでいるらしく、どんなに見詰めても気が付かず、こちらを見向きもしない。本当に好きな曲なんだなと思った。きつと好きなものに対して集中するタイプなんだろう。

探偵小説もこんな感じで没頭するのだろうか。なら、傍にいても本を読んでいてくれれば案外俺も読書を楽しめるかもしれない。すぐ傍で見ている俺を存在していないかの如くここまで無視できるの

だから・・・と考えて、俺自身も玲子の好きなモノの範疇に入っているかもしれないことに思い至った。この集中力をこちらに向けられたら・・・俺は真つ当に相手できるだろうか。

ふと、曲が途切れた。

終わったわけではない。終盤の、クライマックスが中断したような形だ。ワントーン置いて曲は束の間の穏やかさを取り戻し、急展開の激しさで終わった。

はあ・・・と肩で息をついた玲子に軽く手を打ち鳴らした。まだ演奏の余韻が抜けきらないぼんやりとした眼差しのまま玲子が俺を見上げて、やだ・・・と正気に戻った。

「拍手とか、しなくていいから・・・」

「何で？」

「そこまでじゃないもの」

「・・・そこまでだった」

「嘘」

「嘘じゃない。技術的なことは知らないけど」

少なくとも僅かな時間引き込まれたのだ、恐縮して薄く頬を染める玲子にパチパチパチと三度ほど手を打って止めた。ありがとう、ともごもごしながら玲子が呟いた。

「そんなに恐縮する程、下手じゃないと思うけどな」

「うーん・・・プロの演奏家にそう言われても・・・」

「だから、プロじゃない。本当に好きな曲なんだ」

「うん」

嬉しそうに玲子は頷いて、戯れにポロンと鍵盤を鳴らした。普段の玲子っぽい可愛らしい音がした。ものすごく素直な弾き手なのかと、内弟子の面倒を見させられた時のような、たぶん彼女の言う演奏家らしき部分で思った。

「どうして好き？ 作曲家が好き？ 旋律が好き？ 弾きやすい？

そういった要素全て含めて曲自体が好き？」

「すごい、質問攻め」

くすくすと玲子が口元に拳を当てるようにして笑った。確かに俺にしては珍しく他人を詮索していたことに気がついて、バツの悪さに口ごもった。

「別に・・・ちよつと意外な選曲だったから」

「そうかな？」

ちよこんと玲子が首を傾げた。さらりと音を立てるように髪が肩を滑った。もう日は落ちていた。まだ完全に暗くはなかったが、淡い黄色の光は無くなっていった。夜でも昼でも無い、黄昏時。やっぱり玲子の答えが気になって、譜面台のあたりに片腕を乗せて玲子に向かつて身を乗り出した。俺の体の影が玲子に被さるように落ちる。「どうして好き？」

「あの、三橋くん・・・えっ・・・と」

何故か急にうるたえだした玲子は俯いて、それでも答えてくれた。

「えっとね、ほら、ベートーベンって耳が聞こえなくなっちゃったでしょう？」

やや舌足らずな発音で玲子が作曲家について言ったので、俺は頷いた。

「だんだん聞こえなくなっって・・・その頃、作曲して。“悲愴”て本人がつけた題名らしいの。ベートーベンって自分の曲に名前付けるのめったにしなかったみたいで・・・」

「うん、それで？」

その辺りは俺も大体知っている。賛否両論、頑として区別を付けたがる者もいるが、いまの邦楽で西洋音楽を完全には無視できない。それは向こうも同じで、無限階の音を基本とするこちらの世界と交わろうとする試みはかなり以前からある。

まあ、こちらは向こうの音は弾こうと思えばいくらでも弾ける。

複雑な和音や転調も複数人で合奏すれば、かなり忠実に、演奏自体は可能だ。それに意味があるのかないのか、音楽的にどうかなど難

しい話は別として。

「“悲愴”って名前なのに、きれいな曲だから。確かに暗くて重い部分もあるけど、どの楽章にも救いっていつか明るい穏やかな部分があるでしょ。だから好きなの」

「つまり曲自体、そのものが好きというわけか」

その明るい穏やかな部分を透明感のある哀しさと陰鬱さで弾いた本人の言葉とは思えず、言いながら苦笑が漏れてしまった。あれは玲子が無意識で奏でた音か。

「うん・・・音楽家が聴力を失うなんて致命的なのに、絶望しないでこんな曲作るってすごいなって思う」

明るくそう言って立ち上がった玲子の言葉に、そうかな・・・と思った途端、えっ、と驚いたように玲子が俺の顔を真正面から見た。玲子に身を乗り出すように背を曲げていたので、ほぼ同じ高さに互いの顔があつた。

「三橋くん・・・？」

大きな目が少し不安気に揺れるのを見て、ああ、思ったことを口に出してしまっていたのかと理解した。

「ああ、いや・・・何となく。彼は何故止めなかったのかな？」

「え？」

背を伸ばしてすぐ近くにある玲子から顔を離した。

「たしかに宮廷に出入りする音楽一家だったそうだけど。第二のモーツァルトを当て込んで4歳から5歳そこらで父親から荒っぽいやり方で音楽を叩き込まれて、父親の代わりに家計を支えて・・・だからこそ唯一の救いっていうのもあるけど」

「三橋・・・くん？」

「確かに聴力を失くしたら音楽家として致命的だ。けど、致命的だからこそ文句は言えない。もう無理だから自分で働いてくれと父親に言えたかどうかは、わからないけどね」

啞然として俺を見上げている玲子に軽く笑って、手近な鍵盤を人差し指で軽く押した。

ポーン・・・と高い音が教室に響く。

「骨・・・で、聞いたんだっけ？」

「え？」

「ベートーヴェン。歯と鍵盤をステッキで繋げただっけ？ 人の声は聞こえないけど、ピアノの高音はかすかに聞こえたかもって。でも致命的だ・・・だから」

「だから？」

もう一度、鍵盤を押ししてみた。同じように高く澄んだ音が鳴る。

たとえ止めたくても止められなかったんじゃないか。歴史に名を残す大作曲家と自分を重ねる気は無いが、物心つく前に筆の音に囲まれて育った俺でも音に侵食されるような気分を味わう状態だ。天才的な才能を持ち音楽一家に生まれ、苛烈な音楽修行を強いられた彼がまったく内側に音が響いてないなんてあり得るだろうか。聞こえなくなった後に大曲をいくつも発表していることがそれを裏付けていると思った。外側からの音じゃない、内側の音を彼は奏でる代わりに楽譜に吐き出したのではないか？

「玲子の考えを否定する気はないけど、彼は絶望はしたと思うよ・・・

・それでも手段を見つけてああいう曲を作ったのはすごいと思う」

「三橋くんって・・・」

「何？」

尋ねたら、ふるふると玲子は首を横に振った。怪訝に眉を顰めたら何でもないと言われた。詳しいねと感心しているような、本当は違うことを言うつもりですり替えたような、どちらにも取れる調子の言葉に、まあ家業だから一応と答えた。

「帰らないと・・・暗くなってきてる。本は、月曜日でいいから」

「うん」

「家まで送るよ」

こくと玲子は頷くとピアノの蓋を閉じようとしかけて、鍵盤から遠ざけようとした俺の手を引きとめるように片手を重ねた。小さな不協和音が重ねた手の下から漏れる。

「三橋くんも・・・」

「玲子？」

「三橋くんも小さい頃からたくさん音、聞いた？」

「家がああいう家だからね」

「・・・そう」

玲子じゃなければ、そのまま玲子の手にもう一つの手を重ねて流れてキスしていたかもしれない。軽く笑んで答えればすぐに玲子は手を離し、俺が手を鍵盤から除けるのを見ながら蓋を閉めると、背を向けて反対側のピアノの足元に置いた鞆を取り上げた。

「遅くなっちゃったね」

「全部弾いてってせがんだの、俺だから・・・」

俺の言葉に玲子は微笑んだ。そのままこれと行って話すこともせず、けれど別に気詰まりな感じでもなく学校を出て、毎朝の登校のように並んで歩くつもりでいたら、不意に片手の指の部分を軽く掴まれた。

「・・・手、繋いでもいい？」

恐る恐る伺うような玲子に思わず笑っていいよと握り返した。

付き合って五日目でようやく手が。たしかにこれまでそういう感じに付き合いが進む女性はいなかったなど、暗くなっても艶を放っている玲子の頭頂部を見ながら、俺はそんなことを考えた。

十五（前書き）

ううん、三橋くんのごとは自分で見つけたの

手を繋ぐという行為はひどく曖昧なものに思える。

何らかの友好的感情か思惑か、親密さがないと生じない行為だろうが、別に意志の疎通がなされるわけでもなし、肉体的にそれこそ繋がるわけでもなし・・・一体感を得たいなら抱き合った方がより手っ取り早いだろうに。

末端の小さな面積に伝わる体温と相手の感触。相手もまた同じ。ぶらぶらと子供とそうするように玲子と手を繋ぎながら、そんな取りとめもない事を考えた。玲子の右肩がやや斜めに持ち上がっている。いつも両手に持っている鞆を俺と手をつなぐ為に右肩に下げているせいだった。

学校の門から国道へ。南から北に緩やかに下る坂を見下ろせば、坂道を境界にして玲子の住む区画は東の右側、俺の住む区画は西の左側に分かれる。車道の左右に歩道があり、玲子の家に向かってるので当然右側の歩道にいた。車道が左側にあるので玲子を自分の右側に置いて歩いてきた。女性と子供と老人を車道側に置いて歩かないこととは母親の躰だった。

一度持ったことのある鞆は結構ずっしりとした重みがあった。教師が推奨するのに従って、教科書を学校のロッカーに置かず律儀に持ち運んでいるのだろう。一日平均五時限。参考教材やノートも合わせれば結構な荷物になる。歩きながら無言で玲子の前から左腕を回すと、驚いたように立ち止まった。

こちらは足を止めなかったので、つっと、繋いだままの右腕が伸びる。

「み、三橋くんっ!？」

「持つ」

「え?」

「鞆」

ぼかんとしている玲子の右肩から鞆を奪い取って促すと、俺を見上げて感心したように首を傾げた。

「初めて一緒に登校した時から思ってたけど、三橋くんって紳士よね・・・」

「そう?」

頬に手を当ててしみじみとした口調でそう言った玲子に、尋ね返した。

紳士という、本で読むにはよく見かけるが、実際に人から聞く機会はあまりない単語は少し新鮮な響きだった。

「うん、意地悪だけど」

再び歩き出しながら揶揄するようにぴしりと返され、苦笑する。

一歩先に進んだ玲子の後頭部が、灯りだした街灯の明かりに青白い艶を見せている。さっと腕時計を確認すれば十八時前だった。薄暗いはずだ。

いつになく帰りが遅くなって、玲子の家は大丈夫なのだろうか。

「母がそうしないと拗ねる人で、荷持を持つとかすっかり習い性なんだ。大丈夫なのか、君の家は?」

「なあに?」

「時間、遅くなった」

「今日はお稽古ないし、お夕食の時間までに帰れば大丈夫」

「夕飯は?」

「七時」

ならまだ一時間以上間がある。

「お友達とね、寄り道しててすっかり過ぎちゃうこともあるんだけど」

「へえ・・・真っ直ぐ帰ってるのかと思ってた」

寄り道するのか。

まあ、寄り道ぐらいするか・・・どうも三田村の誇張した玲子の話のイメージが強くて、その印象のまま彼女を捉えがちだった。

可憐な容姿と健気な様子。男共は皆心を奪われるも近づけば不幸

に見舞われる。洋館に暮らす深窓の令嬢　事実その通りらしいとはいえ、接してみればどうにも少し違う。

「国道沿いの本屋さんとか行っちゃうと・・・雑誌や新刊書みたり、本を探したり、カフェもあるからつい長居しちゃって。あ、そういえば同じ図書委員だったよね」

にこにここちらを軽く見上げながら離す玲子の明るい表情とは反対に、何か微妙に暗い気配に包まれた気がしたのは、単に日が暮れて夕闇の色が深くなったからだろうか。

「佐竹さん、副委員長でしょ？」

「佐竹か・・・そうだな、世話になってる」

「一年生の時、同じクラスで。二年生では離れちゃったけど・・・時々、一緒に本屋さんに行くの。ほら、第二図書室に入れる新刊書って佐竹さんが担当してるんでしょ？」

「してるな」

佐竹が書店員並みに新刊書に詳しいのは、定期的に本屋でチェックしてたからか。それにしてもそこに玲子が付き合っていたとは。

「・・・だからか」

「え？　何？」

別れた後、これと違って後腐れもなかった佐竹が急に突っ掛つてきていたのも、やたらと玲子の事を気にするような口ぶりも納得がいく。自分が見限った男と友人が付き合い始めたら、心配にもなるだろう。

「いや、別に・・・」

「あ、お話、逸れちゃったね・・・三橋くんのお母さんの話だったのに」

「いいよ、母の話は・・・」

それよりも、まったく接点が無かったと思われる玲子が告白してきたのは、佐竹を通じて俺の事を知っていた末での事なのだろうか。佐竹と付き合っていたことを隠す気もなく、知られて困ることはない。

けれども、委員長としても付き合っていた男としても、佐竹の口から人に話して聞かせる人物としてろくな評にはならなさそうに思える。

佐竹の性格からして俺と付き合っていたことを話すとは思えないが……。

「三橋くんのお母さんってどんな人？ この間、遊びに行った時はいらっしやらなかったね」

明らかに興味津々といった玲子の表情に小さく溜息を吐いた。

従順そうなようで、意外と人の話を聞かない。

「……一言で表現すれば、“姫”かな」

「ひめ？ って、お姫様？」

「ああ、でもドレス着てお城にいるのじゃなくて、着物で御殿に住んでるような……いや、その言い方も誤解するな。大名とか殿様とかの城じゃなくて……何て言うのかな……竜宮城、とか？

そんな架空の城に住んでるような“姫”」

「全然、一言じゃないね」

くすくすと玲子が可笑しそうに鈴を転がすような声を立てるのを、俺はひどく困惑した気分で聞きながら歩く。

「とにかく、説明しづらい……この間は一門の支部に出掛けてた」
普段はおおらかなを通り越してほわんとしているが、ぼんやり呆けているわけでもない。なんと言うか掴みどころがない人だ。

「でも、お母さんがお姫様ってすごいね」

「結婚前に実家ですごく大事にされてたお嬢さんだったから、何となくそんな感じなんだ。浮世離れしているというか……まあ、父が亡くなって三年たった後とはいえ、叔父と結婚するくらいだから「え?!」」

今度は玲子がひどく困惑する番だった。

「もしかして……聞いたやいけなことを聞いたやつ？」

「いや、全然」

一見、複雑そうでその実まったく複雑ではない、俺の家族事情に

ついてかいつまんで説明すれば、何となく予想した通りに説明している間にも玲子の瞳が潤んだようにきらきらと輝き始めた。

「素敵！」

「素敵、じゃない」

「ええっ！？ どうして？　すごい歳の差もお家の反対も押し切るなんて……」

「玲子、君、少女趣味過ぎる……。はっきりいって父と母は子供の俺から見ても父と娘みただったし……」

「歳の差なんて……」

「あんな、両親に反対されて自室に軟禁されて、窓から脱出、屋根づたいに家出して父のところに来た母も母だけど、そのまま籍入れる父もどうかと思う」

しかも、当時の母には彼女の父親の秘書という婿入り予定の婚約者がいたのだ。親が勝手に決めたと婚約者とはいえ……。母方の祖父が「娘を浚った」と言っただけの父や家を憎むのも無理もない。

「ドラマみたいな大恋愛」

「皆、そう言うけど……」

「三橋くんのお母さんって、すごく魅力的な人なのね、きっと」

「確かに……。それは否定できない」

「よかつたね」

「何が？」

「三橋くんも、三橋くんのお母さんと妹さんも……。三橋くんのお父さんと同じくらい好きになってくれる人がいて」

叔父の事かと、理解した。確かに叔父の、母をはじめ家族への愛情は本物だ。

父との騒動の頃から、実は片思いだったらしい……。父の墓前でそう律儀にも打ち明けていた。もちろん父にだ。叔父にとって父は絶対的に敬愛する兄である。

その時の叔父の姿が幼心に感じ入ったのか、父の記憶が薄いせいもあり、妹など完全に叔父の事を父親と慕い理想の男性とまで公言

している。

「まあね・・・俺も、よかったんじゃないかと思ってる。少なくとも見た目親子じゃないし」

笑いながら言えば玲子はゆっくりと微笑んだ。

そこで本條家の洋館の門に着いた。

なにしろ徒歩十分程度の距離だ、すぐに辿り着く。繋いでいた手を離し、玲子に鞆を渡せばありがとうと礼を言われた。

「それじゃあ、また月曜日だね・・・あ、三橋くん」

「何？」

キイツ・・・とアイアン製の門を押し開いて自宅の敷地に入りかけた足を玲子が止めて振り返れば、不意に強く吹いた湿った冷たい風が長い髪を乱した。

さつきよりは弱まったが、止まない風にもう暗くなった夜空を見上げれば紺色の濃淡で厚みのある雲が空を覆わんと流れていた。

「雨になりそうだな・・・」

僅かに咲き残っている桜も完全に終わりだなと、まだところどころに花を残している玲子の家の玄関先の桜の大木へと視線を向けた。

雨が・・・自然に顔を少し顰めてしまう。雨自体は嫌いではないが、この冷たく湿った風は余りいい感じはしない。

箏の響きは湿気に敏感だ。

「大丈夫？ 傘とか」

「いいよ、いくらなんでもすぐには降ってこないだろうから。何か言いかけなかった？」

「あ・・・うん。あのね」

しばし躊躇うように俯いて、意を決したように顔を上げた玲子の様子に、何となく予感がした。

「佐竹さんと・・・付き合ってたんでしょ？ えっとね、気になるけど・・・気にしないからっ・・・！」

「・・・言ってる先から矛盾している」

「違うの！ 佐竹さんにはちゃんと話してるし。三橋くんが気にしたらいけないから、黙ってようかなって思ったんだけど、さっき佐竹さんの話しちゃったし、その内わかっちゃうかなって・・・」

玲子の言葉の意味は半分以上理解不能だったが、とりあえず俺のことを慮ってのことらしいということは理解した。何とも形容しがたい気持ちで前髪をかき上げると、しゅんと玲子が肩を落として頂垂れる。

「あの、ごめんなさい・・・」

「何で君が謝るんだ？」

「・・・なんとなく」

「謝る必要はないよ・・・俺のことは佐竹に聞いて？」

たぶんそうだろうと考えていたが、それに反して玲子はきよとんと俺を見上げふるふると首を振り、そうして俺を真っ直ぐに見詰めた。

俺に告白した時と同じくきつと睨むような強い眼差し。

「ううん、三橋くんのごときは自分で見つけたの」

見つけた・・・？

何十秒か目が逸らせずに見詰め合う形のまま互いに黙って、先に眼差しを伏せた玲子が気をつけて帰ってねと言って背を向け小走りに玄関へと向かう。

暗闇に紛れそうな玲子の足元から、砂利を踏む音が聞こえた。

「三橋くん、また月曜日」

勢いよく振り返って手を小さく振った玲子はいつも通りの玲子だったので、彼女に応じるように軽く手を挙げ、その姿が玄関先に消えるのを見送ると俺は本條家の洋館に背を向けた。

「色んな意味ですげーな、玲子ちゃん」

「何が？」

白熱灯のオレンジがかかった光にきらきらと輝いている、鏡を嵌めこんだバーキャビネットと収められたクリスタルグラスを眺めなが

ら、バーテンダーの衣装でグラスを磨いている三田村に尋ねる。

帰宅して間もなく降り出した大粒の雨はあつという間に激しい降りになった。

昼間いい陽気だったこともあり、温まった地面に雨水は湿気となつて立ち上る。

離れてエアコンがついているのは俺の部屋だけで、湿度が高まった稽古場で機嫌を損ねている筈は音を思うように響かせず、そんな時は大抵、気晴らしに俺は三田村がバイトしている彼の父親が経営するバーに顔を出す。元証券会社の敏腕トレーダーだった三田村の父親が経営する店は殆ど彼の道楽商売に近かった。ビルの地下にありながら看板すらだしてない。雨降りの深夜にわざわざ立ち寄るような客は少なかった。

「付き合つて一週間だろ？　そこまでお前が自分について喋つたことつてあつたか？」

「聞かれたから話したただけだ」

氷の入ったロックグラスを傾ける。琥珀色の液体はウイスキーではなく烏龍茶だ。別に酒でもいいのだが、見た目ヤクザで中身は真面目なバーテンダーはそれを許さない。

そもそもバイトの理由からして大学進学のためだ。本当はファミレスとか居酒屋とかそういう場所で働きたかつたそうだが、それを両親に相談したところ、だったら店を手伝えと父親に提案されたらしい。

時給は千五百円。その高給ゆえに三田村は父親の提案を承諾し、彼の父親は本来他人に払うべき金を息子の教育費用に当てるのが可能になった。なんとも親孝行な息子だ。

しかし三田村ぐらい頭がいい息子なら進学させがいもあるだろう。ヤクザな外見で学年一位を入学以来独走し続ける男は職員室では大変に評判のいい生徒である。生徒からはインテリヤクザ扱いで、属している剣道部には真剣が隠し置いてあると、まことしやかに囁かれているが。

「それに元カノのこともさ・・・女って怖ええ、両者の間では話は付け済みってやつ？」

「まさか、単に打ち明けあったとか報告したとかその程度だろ？」

「・・・お前って、つくづく女難に見舞われる奴だよなあ。まあ同情はしないけど」

「しないのか？ 友達甲斐の無い奴だな」

冗談半分にはやけば、シュツと左隣でマッチを擦る音が聞こえた。火を消した、炭の匂いのするただの煙と微かに甘さを帯びた紫煙が流れてくる。

「同情の余地なしだろう。なあ、三田村」

「そーそー、棧田先生の言う通り。自業自得」

「・・・客はいないと踏んできたのに」

「そりゃ、こっちの台詞だ。いい感じに貸切だったところに乱入しやがって」

煙草を左手に持つ先客だった棧田の前にはロックグラスが置いてある。二杯目か・・・と思った。棧田はストレートから始まりロック、水割りと三杯飲んで終わりと、飲み方が決まっていた。どういうわけか、一度ばったりこの店で鉢合わせて以来、よくタイミングが合う。

「まさか、俺が来るタイミング見計らって飲酒しないよう見張っているとか？」

「馬鹿言え、お前一人にそんな労力掛けてやるほど暇じゃねえ」

「でしようね。俺と鉢合うのが嫌なら雨の日は避けてくださいよ」

「何で、おれがガキのお前に合わせてやらなきゃならないんだ？！お前が夜遊び止めれば済む話だろうが！」

「正論だな、先生」

「三田村・・・」

軽く睨めば、当たり前だと磨いたグラスをキャビネットに仕舞いながら返される。

「先生は単価のいい客、お前は単価の悪い客」

「資本主義か・・・」

「それは論点が違うぞ、三田村。そもそもお前等ここにいること自体が問題なんだからな！ 見逃してやってるからって調子に乗るな！」

「実際に教師らしい一喝はごもつともなので三田村と同時に詫びれば、つたくと煙草を口元に運んだ。」

「馬鹿ガキ共が・・・」

「おれ達一応、成績優等組っすよ」

「そういう話じゃない・・・で、女難の三橋は来週も怖い本條と付き合っのか？」

「別れる理由が無い」

「その言葉だけ聞けば、真っ当なんだがなあ・・・」

「俺は真っ当ですよ。まあ・・・けど、来週はちよつと休みがちになるかもしれません」

額を両手で支えながら、深く息を吐けば棧田が怪訝そうにこちらを見る気配がした。

「教師に向かって、堂々サボリ宣言か？」

「違いますよ・・・いや、近いかも・・・」

「おい、三橋・・・いくらおれでも見逃せることとそうじゃないことがある」

「家の事情で。ヨーロッパ公演から戻る従妹が、家に来るらしくて・・・」

「ああ・・・と三田村が声を発し、ご愁傷さまと両手で拝んだ。」

「何だ、三田村？」

「中道詩織って聞いたことない？ 先生。十六歳の天才邦楽少女」

「知らんな」

「N響とかとも共演してるんだけどな、三橋流では文句なしの若手トップ」

「生憎、おれは“文”の人間でな、“音”の分野に興味ない」

「東大の哲学博士がそれでいいんかよ」

驚くべきことに、棧田は東大の大学院卒である。しかも、緑風高等学園卒。

つまりは俺達の一応先輩に当たる。第一志望東大の三田村がその希望通りに入学すれば完全に後追いだ。三田村の志望は文科三類だった。

「修士だ・・・その天才少女と三橋がどうしたんだ？」

「従妹なんすよ、こいつの。すっげー我儘で、気が強くて、偉そうな」

「ほう？」

「三田村」

紫煙を吐き出しながら面白い話を聞いたと目を細めた棧田に顔を顰め、三田村の解説を止めた。

「それで、その詩織ちゃんとやらに心無いはずの三橋委員長は弱いわけか？」

「ご名答！ どういうわけか逆らえないみたいで・・・」

「次の公演、東京でその後すぐにまたアメリカ。金沢の実家に戻るの面倒だからって・・・滞在中たぶん面倒みないといけない」

「そういえば、定演会も近くなかったけ？」

「それもある・・・」

「ま、よくわからんが頑張れ・・・学校には来いよ」

ぱんつと背中を軽く棧田に叩かれ、俺は再度嘆息した。

「学校については叔父に言ってください」

帰宅した直後の俺に詩織の世話を頼むと言って、逃げるように九州へと行ってしまった叔父を俺は恨む。スケジュールは事前にわかっていたはずだから絶対に意図的だ。彼は実の娘との接触を出来る限り避けている。

帰ってきたら絶対に一言苦言を呈することに決めていた。

「担任じゃねえからなあ・・・」

知ってますと答えて、俺はカウンターに酔いつぶれた客のように突っ伏した。

詩織は日曜日朝に帰国する。きっと月曜日は俺を連れまわそうとするだろう。学校があるなどという理由は彼女には通用しない。

また月曜日と玲子は言ったが・・・月曜の朝迎えに行けるかどうか疑問だ。そして漸く読みかけを再開できそうだった横光利一も・・・うたた寝して結局まだ読んでいない部分は読み進むことが出来なかった。

どうやら玲子の“呪い”はまだ続いているらしい。

本どころか、結局落ち着いた気分で箏を弾くことが出来るのは次の週末となることなど、その翌週は第一図書室を開けられない試験期間に入ることなど、まだその時の俺は知らなかった。

十六（前書き）

洋ちゃんを虜にする“箏の精”に勝てる女なんていないもの

「洋ちゃん、寝たい」

寢床にもぐりこんできた柔らかな物体に揺り起こされた。

無理矢理に目覚めさせられようとしている意識が抵抗している。

まだ起きる時間ではないはずだ。

たぶん明け方だ。薄目に見た障子が白く、まだ室内が薄暗い。

朦朧とする頭で途切れがちに考えながら、突然もぐりこんできて、寝巻きの胸元の合わせを肌蹴させるように擦り寄る、確かな感触と質感を伴う温もりは何だろうと輪郭を手が触れた窪んだ部分から上に盲目の人のように掌で辿る。

「眠らせてよ」

ぐずった子供ののような癪のある声に意識がはつきりした。

緩やかに波打つ輪郭を辿って、丸い盛り上がり終点に辿り着いていた手の甲を毛のようなものがチクチクと柔らかく刺すのを感じる。

「抱いて」

「抱かない」

何度と無く繰り返されている誘いに即答して目を開けば、硬質でさらさらした栗色のショートカットと、かなり早い朝にも関わらず眠気など微塵もなく開いている爛々とした目があった。

音楽雑誌におよそ演奏と関係ないファッション雑誌のようなスチール写真が掲載されるだけあって目鼻立ちを整っている。

玲子が可憐な美少女なら、詩織は年齢よりやや大人びた美人の顔立ちだった。

つんと高く通った鼻筋に、赤味が強い唇、すっと切れ上がった目、左目の下に小さな泣き黒子がある。

「詩織……」

寝起きで自分の声が低く籠って聞こえた。

一体、何時。始発も動いていないのにどうやって来たのか。

「許婚じゃない」

「十一歳まで。それも幹部の大人が言つてた悪趣味な戯言で」

黙って触れたままでいた剥き出しの肩から手を離し、横臥から仰向けに寝返りを打って従妹の少女から身を離す。

布団の中なのでよく解らないが、キャミソールに柔らかい素材のショートパンツのようなものを穿いているようだった。

寝返りを追うように絡みついてきた片脚が素足なのは寝巻きの上からでもわかる。

「寒くないのか・・・」

「洋ちゃん暖かいもん」

寝起きで思考力が低下しているとはいえ、抱きつくように胸の上に腹ばいに申し掛かってきた細身の体に、うっかり藪蛇な事を呟いたと顔を顰めた。

「重い」

「嘘」

「・・・詩織」

「離れたら寒いもん、風邪ひいたら洋ちゃんのせい！」

自分が心地いい体勢を探って身動きをする詩織に思わず溜息が出る。

即座に看破された通り、細身の体は重くは無いが寝苦しいことこの上ない。

休日だからといって起床時間は変わらず、それよりも早い時間に起こされてまだ眠り足りない。

もっとも、眠り足りなさでは詩織の方が深刻なようであった。

帰路の飛行機でも、帰国してからも眠れていないのだろう。

俺の肩先を枕にしている詩織の頬が、寝巻きの肌蹴た胸元にぴったりと密着していた。肌馴染みのいい感触は何となく血縁であることを意識させる。

父の弟である叔父の、実の娘。

叔父が離婚した後、詩織の親権者は彼女の母親となっていたが、その戸籍に詩織を呼び寄せる手続きを取らなかった。

戸籍を抜いても親子関係の証明に支障はないが、おそらくは一門の奏者としての詩織の可能性と将来を考えて三橋の家系に残したのだろう。

俺の母親と叔父が結婚したことで、叔父の姓を公に活動するのに名乗るのはデメリットがあると母親の旧姓“中道”を名乗っているが本名は“三橋詩織”だ。

「全然眠くならないの・・・抱かれた後ってすごく眠くなるんですよ？」

細い指先で俺の肋骨が薄く浮いているを箏の絃のように弄びながら、やや鼻にかかった平生より甘くして問いかけてくる声が胸骨に響く。

「確かにすぐ眠ってしまう人はいるな・・・」

それなりに深く達しないと、即座にははいかないようだけれど。そういう事を尋ねてくるということは詩織はまだ少女のままであるらしい。

そうでなければ、こんな暴挙ともいえる無防備な行動にはでないだろう。

もつとも幼馴染の従兄に対し、リアルな危機感など持たないものなのかもしれないが。

「いとこ同士は鴨の味って言うらしいよ。洋ちゃん鴨好きじゃない」

「たぶん君が考えてるのと意味が違う」

「いとこ同士の夫婦は鴨肉の味みたいに良すぎるんでしょ？」

「情愛が深いという意味」

「良すぎるから深くなるんじゃないの？」

たしかに、それは一理あるのかもしれないが。

「そういう事もあるかもしれないけど、言葉の用法としては違う。

一年の大半、外国にいてそういう言葉をどこで覚えるんだか・・・」

「日本語研究してるフランス人の大学生から聞いた」

“アムールの国”なんて言われる国の先入観から、そういう誤解は生まれそうだなと思った。そういえばヨーロッパは王侯貴族の間で近親婚が行われていた歴史もある。

「とりあえず、たぶん曲解だと教えてあげた方がいい。あとそういうこと余り言わない方がいい」

「なんでよ」

「無邪気な好奇心を逆手に取られて、俺に犯されたらどうするんだ」腹部に一つ年下の少女にしては早熟な質量と弾力が押し付けられている感触から考えれば、細身の体は少女のままというわけではなさそうだった。

前に会ったのは一年近く前だったか。

女性の体つきについて関心は余りないので、特に気にも留めていなかったけれど。

「どうもしない・・・ていうか、洋ちゃんわたしの言葉聞いてた？！」

俺の両肩を布団に押し付けられるようにして身を持ち上げると、神経が昂っているのかキンキンした声で詩織が詰るのに、もう寝直しは無理だろうなと半ば諦める。

「抱いて欲しいんだろ」

「そう！」

「即答で抱かないって返答した。完結している」

「それって、血縁だから？　いとこ同士は結婚できるし、問題ない」

「行為自体はそう支障ないだろうけど・・・今は特定の相手がいるからそういう不誠実なことは出来ないんだ」

「なによっ！」

不服を全面に現した詩織に平手でこめかみ付近を叩かれる。みしりと額の端が音を立てて熱っぽい痛みが広がった。

「腹立つ！」

完全に身を起こして俺の胴体に馬乗りになった詩織が、憤慨した

様子で腕を組み俺を見下ろす目が異常に輝いている。

春とはいえ明け方はまだ冷える。

上半身にかかっていた布団を跳ね除けられた肌寒さに力が入った腹筋にほんの僅か持ち上がった詩織の重みを感じた。

「いつ戻って来た？」

「昨日の夜。全然眠れないの。ホテルで弾いてるのも飽きちゃったし」

だからといって睡眠薬扱いされても困る。

大体、初めてだったら眠るどころじゃないんじゃないだろうか・
付き合った女性全員を抱いたわけもなく、関係した複数人は処女ではなかったのによくわからない。

いや、その件はすでに完結しているからいいのか。

「ホテルにとつては迷惑な客だな」

夜中に箏をかき鳴らされては隣室の客は気になって眠れないだろう。

それでなくとも、詩織の奏でる音は人の感情を煽るような響きを持つている。

「スイートだもの平気よ」

「贅沢だな」

「事務所持ちだもの、ここにはタクシーで」

全て許されて当然という風に言っつて、ふるりと剥き出しの肩を竦めて詩織は身を震わせた。

寝巻きを着ている俺でも肌寒いのだから、薄着の詩織は冷えるだろう。

「何か羽織るかしたら？ 風邪をひく」

俺から離れるのも癪で、かといってまた元通りに跳ね除けた布団の中に入るのも気位の高い詩織の性格からして嫌なのだろう。

暫く黙って気難しそうに眉根を寄せて口を尖らせていたが、やはり寒さは嫌なのか後ろ手に跳ね除けた布団を掴んでばさりと頭から被って、俺の上に再び寝そべった。

今度は誘惑ではなく単純に暖を取る為だ。

「昔、遭難ごつことかやつたの思い出すな」

「ほっんと腹立つ！ 洋ちゃんに好かれてもないのに抱かれてる女がいるのに！」

もごもごと布団の奥から悪態を吐く詩織を咎めるように背中を軽く叩いた。

真実ではあるものの、そう悪意の棘をまぶして言われるのは愉快なことではない。

「詩織……」

「なによ、洋ちゃんが一度だって付き合ってる女を好きになっただとってある？」

「……ないよ」

好きだと思っ間もなく別れている。付き合っても三ヶ月と続くことはなく、そんなことだから抱いても一度切りということが殆どだった。

佐竹だけは五ヶ月続いたが……どうだろう。

何度か抱いたし欲望もそれなりに覚えたが、果たして好きだったのだろうか。

そして玲子はどうだろう……流石にまだ一週間では何とも言えない。

とりあえず一緒に過ごしていて不快を感じたり面倒に思ったことは一度もないが。何しろこちらがそれで付き合っていることになるのだからかと心配してしまう程の、淡泊さと執着のない態度だ。

そんな事を考えながらの返答だったが、どうやら詩織はお気に召したらしい。

首に両腕を回して囁かれた。

「当然よ……洋ちゃんを虜にする“箏の精”に勝てる女なんていないもの」

俺が夢中で箏を弾くことを、詩織はそんな風に表現する。

そういえば以前、棧田にも箏が俺の本命だと言われたことがあっ

た。

あれは確か、三田村のバーで初めて棧田と鉢合わせした時だったか……。

「ねえ……洋ちゃん、抱いて」

「抱かない」

「エツチな意味ではなくて、一緒に寝て」

「いいよ」

軽く叩いた詩織の背に腕を回して抱きかかえるようにして、互いに横臥になるよう寝返りを打つ。僅かな面積に触れる互いの素肌に違和感のなさ体温が心地よく、目を閉じかけたところで衿を強く引っ張られた。

「ダメ、わたしが寝るまでは起きてて」

「……わかった」

「わたしが起きる前に起きてどっかいくのもダメ」

「朝食は採りたいんだけど……」

長時間眠っていないなら、今から眠っても詩織が起きるのは早くて昼頃になるのではないだろうか。

「だって、わたしからパパを奪った洋ちゃんは、わたしを淋しくさせないんでしょう？」

「そうだよ」

詩織は叔父の娘だ。

俺は詩織から父親を奪った。そう欲してではない。母と結婚したからでもない。

俺が叔父が敬愛して止まない彼の兄、つまりは父の息子であるという一点だけで叔父は詩織に背を向け、俺に正面を向いている。

憶えていないが三つか四つの俺が、叔父の前で玩具代わりに父から与えられた使い古しの箏を鳴らしてからずっと実の娘を蔑ろにして、俺を叔父は可愛がった。

その事ばかりではないが、それも原因の一つとして詩織の両親の間の溝は広がり、結果として離婚している。

もつともそんな事を知ったのは叔父が離婚した八年も後。

母が叔父と婚約した小学校を卒業する頃だったが。

「パパは洋ちゃんのお母さんも好きだけど、洋ちゃんの筆のために結婚したの……」

漸く眠気が訪れたのだろう。うとうととして、まるで睦言のような囁き声の詩織に緩やかに首を振って抱き寄せる。

「それはない……」

「ちゃんと一緒に寝てて……」

胸元に擦り寄る詩織に頷いて、背を緩やかに撫でてやる。

やがて穏やかな寝息の音が聞こえてきたのを確認してから、俺は目を閉じた。

十七（前書き）

ほどほどにしないとだめだよ。もー、芸術家って本当、わけわかんない。

「本ツ当ツ、信じられない！ 信じられないっ！」

朝食兼昼食に添えられたバターロールの中心に入れた切れ込みに、卵を刻んだデイツプをこれでもかと詰めながら、俺と同じく生まれつき波打つ肩下に届く髪を何本ものヘアピンを駆使して複雑な形状に纏め上げている三つ年下の妹が俺を詰る。

休日この妹と朝食を食べるなど久しぶりだ。彼女は休日は遅起きで食事の時間がずれる。

「本当っ、あり得ない！ お兄ちゃんも詩織ちゃんも！ もう子供じゃないんだよ！！！」

母屋のダイニングルームにいる人物三人の中で、年齢的に最も子供な妹の剣幕は一向に衰えない。

「寝てたら来たんだから仕方ない」
ちらりと隣の席をみれば、まだ半分寝ぼけ眼の詩織が欠伸を手で覆い隠しながらぼんやりしていた。

そういえば、詩織は寝起きが悪かった。
着替えるために部屋から追い出した詩織はそのまま母屋へ先に行った。

俺がダイニングルームに顔を出した時には、おそらく妹に借りたのか、もしかすると着させられたのかもしれない、見覚えのあるカーディガンを薄着に羽織った姿で先に座っていた。

「あのね、お兄ちゃん！」
「何？」

それにしても詩織とは対照的に妹は朝から・・・いやもう昼に近いか、元気である。

お気に入りらしき卵色のワンピースを着ているから、食事の後、何処かに出掛けるらしい。

よく見れば、ほんのりとだが化粧もしている。眉を少し描いて、

白粉を軽く叩いた程度だが。

中学二年生というのにませた妹だ。まあ、背伸びしたい年頃なのかもしれない。

「お兄ちゃんがタラシで、最低最悪女の子の敵なのは知ってるけど！ 身内に手を出すとかどんだけ飢えてるわけ!?」

「・・・出してない」

「洋ちゃん・・・手を出してくれないもん・・・」

ふああ・・・と、また欠伸を手で押さえながら「たまご・・・」

と、もごもごと呟く詩織の言葉に、黙って取り分け用ではなく、自分に用意されていたティースプーンを取り上げると、ディップの皿から卵を掬い、詩織の口元に運んでやる。

雛が親鳥から餌を貰うようにして詩織は卵を食べ、もつとと言うように口元を軽く開けた。

ガンツと正面で乱暴な音がして、そちらへ視線を移せば、牛乳多めのカフェオレの入ったマグカップをテーブルに置いた妹がこちらを睨みつけている。

「ご飯くらい、自分で食べなさいっ!!」

「・・・お母さんみたい」

「当たり前っ!! もつ、お兄ちゃんも詩織ちゃんを甘やかさない!!」

「そんなつもりないけど」

テーブルに着いてからずっとぼんやりただ目の前に用意された食事を眺めているだけなので、これではいつまでたっても片付かない。

テーブルの中央に卵の入ったガラスボウル、バターロールとバゲツトを薄く切ったものが入った籠、サラダの入った白い深鉢。保温されたステンレスのコーヒーポットと紅茶の入った白いティーポット、牛乳入りのガラスピッチャー、ドレッシングの入ったガラス容器。

そして各々に白い取り皿が二枚と、マグカップとティーカップ、スプーンが二本とフォークが一本、苺ジャムとマーマレードとバタ

一の小皿が三つ。

妹の茜がサラダを食べ、二個目のロールパンを手にする間に、俺はバゲット二枚に卵とサラダを挟み、紅茶と共に至極合理的に朝食を済ませていた。その間ずっと詩織は椅子に腰掛けていただけだった。

「・・・パン」

小さな呟きに、バターロールを取って苺ジャムとバターを塗ったものを詩織の両手に渡してやると、詩織は大人しくそれを持ち上げてもぐもぐと口元を動かし始めた。まるでリスかハムスターのようだ。食べているうちに目が覚めるだろうと考え、食事の補助は止めることにした。

それにしても毎朝こうなら、音楽事務所ではなく中道の家には雇われていたらしい彼女の世話をする付き人兼マネージャーは大変だ。一度、挨拶したことのある三十代前半くらいの有能そうな女性は三橋家が詩織を預かっている間は休暇で、今頃は少女の我儘に付き合うことのない開放感を満喫していることだろう。

「お兄ちゃんっ!!」

「この様子じゃ、朝食を食べるだけで日が暮れる」

「・・・大体、起きて来ないって時点で、また女の子連れ込んでるって思ったのー」

詩織について俺の言葉に同意したらしい、ぶすつと不機嫌に頬を膨らませて卵を挟んだバターロールを頬張って飲み込むと、茜は文句の矛先を変えた。

佐竹が泊まっているところを見られたことはないのだが、知っていたのかと思った。

まあ、客間の準備は長くいる内弟子に頼んでいたし、何度か出入りすればわかるか。

「語尾を伸ばして話すの、止した方がいい」

「ふん・・・お兄ちゃん、不潔っ!!」

「多感な中学生の潔癖さは凄まじいな・・・」

空になった自分のティーカップに紅茶を注ぎ、ついでに詩織のにも入れてやりながら嘆息する。

そうという言葉は普通、父親に向けられるものではないだろうか・・・五歳で父親を失くしたからか茜はファザコン傾向らしく義理の父である叔父にはべつたりで、話によく聞く思春期もしくは反抗期に入った娘の父親への攻撃性は殆どすべて俺に向けられていた。だって、起こしにいったら上半身裸とかあり得ないし・・・詩織ちゃんと抱き合ってるし、おとーさんが聞いたら泣くよお・・・茜も反応に困るっ!!」

「寝てる間のことまで責められてもな・・・」
詩織が擦り寄ってもとも肌蹴りかけていた寝巻きは、起きたら背の半ばまで脱げ落ちていた。

肌寒さから抱えたのか、単に隣にいるから抱えたのか・・・安眠している詩織を抱き枕のように抱えていた。

「お兄ちゃん、最低っ・・・」
「うるさい・・・出掛けるのか？」

「友達と映画。お兄ちゃんはどうぞせお稽古でしょ？ 帰りに何か買ってきてあげてもいいよ」

箏に触ったことがあるかどうかも怪しい妹はごく一般的な中学生として、部活や遊びと日々を謳歌している。休日には友達の家なりどこかへと出掛けていて殆ど家にいない。

「そうだな・・・“赤木堂”のマカロン二袋」

「お菓子なら、お父さんが貰ってきたのがたくさんあるじゃない」

「和菓子は飽きた」

「和菓子？ 桜餅?!」

ガタツと椅子が動く音がして、俺を斜に見ていた茜が首を動かして詩織の方を向いた。

「あ・・・詩織ちゃん、起きた」

「桜餅食べたい!!! 飛行機からずっと思ってたの!」

「詩織ちゃん、桜餅はないよ」

唐突に何か欲しがったりする詩織の性格は茜もよく知っている。昔は、ぬいぐるみなどを巡ってこの二人の少女は壮絶な争いを展開したりもしていた。

「なんでよ、日本の春っていったら桜餅でしょ?!」

「もうお花見の時期も過ぎちゃってるよ・・・てか、相変わらずだね」。詩織ちゃん

「洋ちゃん、買ってきてっ!」

「お兄ちゃんはお稽古だよ」

面倒になったのは俺の何気ない一言のせいだと言わんばかりのじつとりとした目を向けて、淡々と茜が詩織をいなす。奏者であるが故に稽古という言葉に詩織は弱い。

「んっっ、じゃあ茜ちゃんでもいいから買ってきてよ」

詩織の言葉に茜があらさまにむっと表情を変える。

そもそも、詩織の要求は今すぐにとというのが前提になっている。

「今すぐとか無理だし! 大体、人にものを頼む言い方じゃないし! 自分で買いに行きなよ、道わかるでしょ?」

二つも年下の茜に諭されて、詩織はぐっと唇を引き結んで眉を陰しく吊り上げた。

次の言葉は容易に想像がつく。

「茜ちゃん、年下のくせに生意気っ!」

「超わがままな、詩織ちゃんの方が子供だよっ!」

「なんでわたしが我儘なのよ? 大体、外国から帰ってきたお姉ちゃんの欲しがるものとか考えないわけ?」

「考えない! 詩織ちゃん居候なんだからちよっとは遠慮しなよ」

「ふん、ここはパパの家だもの。詩織の家も同然! ねー、洋ちゃんっ!」

「お兄ちゃんっ?!」

どっちの味方かと実と義理の妹から睨みつけられて、うんざりした気分で溜息を吐いた。

そっういえばこの二人は仲もいいが喧嘩も激しい。しかも実に下ら

ないことで喧嘩をする。

「・・・要するに桜餅が食べられれば、詩織の気は済むのか？」

「お兄ちゃんっ!!！」

「詩織に付き合ってたら、茜も映画に行けなくなる」

「・・・そうだけどお」

「語尾伸ばすの止めたら？」

「詩織！」

高飛車で棘のある詩織の口調に、茜がぎつと詩織を睨むのを見て詩織を咎めた。

「洋ちゃんもさつき注意したじゃない。なによ、茜ちゃんの味方？」

「どっちの味方でもない。朝食の後、一浚えしてからなら買いに行ける」

「じゃあ、わたしも一緒に行く。待たせる罰でデート！」

ころりと掌を返すように機嫌を直して俺の腕にじゃれついた詩織に、もはや怒りを通り越して呆れたという風で茜が溜息を吐く。そうして、残っていたパンを食べ終えカフェオレを飲み干すと立ち上がった。

「付き合いきれない・・・茜、出掛けてくる」

「ああ」

「お兄ちゃん、詩織ちゃん甘やかし過ぎ・・・ま、仕方ないけど」

叔父の俺への執着を知っている茜は、もう一度溜息を吐いて肩を落とした。

「ほどほどにしないとだめだよ。もう、芸術家って本当、わけわかんない」

芸術家ではないんだが・・・茜は一門の奏者を俺や叔父も含めてそんな大雑把なイメージで一括りにして捉えていた。

とうに朝食を済ませていた俺は廊下の掃除をしていた内弟子の一人を呼んで、詩織の朝食の世話を頼み、急かされる様な気分で離れに戻ると、ごくごく事務的に日課の分だけ箏を弾き、財布を取って母屋に戻ればすっかり身支度を整えた詩織が居間で俺を待ち構えて

いた。

結局、その日は、和菓子屋で桜餅を食べた後、子供の頃によく出掛けた近所を詩織に連れまわされた。

夜は夜で、母屋に用意された客間を嫌がった詩織を宥め、困り果てた母親と駄々をこねる詩織のために妥協案として離れの客間を提供することにし、昼間の内に家に届けられていた詩織の荷物を再びまとめて運ぶのを手伝った。

詩織と一緒に寝ようとするのは断った。安眠妨害までされてはたまらない。

普段と違う休日の生活にすっかり疲労した俺は、午前中に日課を済ませておいた自分の判断の正しさを思いながら、落ち着いたところで茜に買ってきてもらった菓子を持って自室に入り、その晩は早めに寢床についた。

十八（前書き）

そ、そついでにと・・・めまり言わないで・・・。

いつもと変わらない様子でにこやかに玄関から現れた玲子に、詩織の相手のために二三日学校を休むことになりそうだと告げれば、不思議そうに彼女は首を傾けた。

じつと何か考えているような表情で俺を見上げるのに、何だと思つたが、黙つて玲子の言葉を待ちその小さく整つた顔を見た。

相変わらず毛穴がまつたくないようなつるんとした肌をしている。それに三田村の言うところの天然記念物クラスの美少女というのは、ライトを当てなくても白い肌が淡い艶を放っているのだと玲子を見て俺は知つた。

内側から淡く発光しているような瑞々しい艶がある。

叔父が鼻屑にしている　いや叔父を鼻屑にしているだろうか・
・必ず演奏会にはやつて来て、熱烈な言葉を並べ立てて直の稽古に通うことを承諾させたのだから　芸者の鈴千代姐さん辺りが見たら、声を上げて羨ましがりそうだと思つた。

繁華街の奥には花街めいた料亭通りがあり、時々叔父は遊んでいた。

ただ食つて飲んではいやいで調子に乗つて帰るだけ、健全そのものな文字通りのお座敷遊び。

「それで・・・」

随分と躊躇いがちな玲子の声が聞こえた。

「三橋くんは・・・今日お休みするのに、それを言い到此まで来てくれたの？」

その通りだったので肯定の相槌と共に頷けば何故か玲子は眉を顰めた。

「それで・・・三橋くんはこれから一緒に学校まで行ってくれるの？」

「そう」

答えれば、今度は呆気に取られたようにぼかんとした表情を見せて、複雑そうに微笑むと、いつも通りにすつと足を綺麗に伸ばして歩き出したので、俺も合わせた。

「先週、また月曜日になって私が言ったから？」

「うん」

身長差があるので肩は並べられないが俺の隣に寄り添うように歩きながら玲子が尋ねたのに頷くと、小さな溜息を玲子は吐いて俯き、何か問題があったかと思った俺がその目元を覆い隠す切り揃えた前髪が揺れるのを見詰めると、くすりと桜桃のような唇が緩い弧を描いた。

「三橋くんと約束は怖いね」

そう言って微笑む。

それ以外は予測していたように帰れとも、よかったのにとともに、うれいとも、迷惑とも言わなかった。そして、その言葉から玲子もあれを約束だと認識をしていたことがわかって、やはり迎えに来てよかったと俺は微かな安堵を覚える。

「絶対、守らなきゃ」

くすくすどこか生真面目さを残す表情で玲子が笑うのに、俺も苦笑を漏らした。

「馬鹿馬鹿しいって思ってるだろうけど、約束は縛りごとだから。縛りごとっていうのは破っても大抵ろくなことにはならない」

楽器の取り扱いも、音階の規律もすべて縛りごとを破れば調和を乱す。

それと同じだ。

「まあ、守ってもろくなことにならないことも時にはあるけど・・・

」

特に女性は。

「いま、特に女の子はって考えなかった？」

「探偵みたいだな、帰ったらとは言わないんだ」

「推理じゃなくて推察・・・あのね、ここで三橋くんを追い返しち

やったら、来てくれたのが本当に無駄になっちゃうもの」

「流石だな」

特に擲うわけでもなく思ったままを言えば、玲子はごくんと頷いた。

「今週のお迎えはお休みね。三橋くんのお家の予定も決まってないみたいだし。その方が三橋くんも困らないでしょう？」

「そうだな・・・そうしてもらえると有り難いな」

「じゃあ、決まり。三橋くんの従妹さん、久しぶりに帰国して会ったんでしょ？」

「前に会ったの去年の夏頃だったから・・・まあ一年近くかな？」

「親戚に同じ年頃の人いないから、そういうのなんだかいいなあ・・・」

「久しぶりに会うのが？」

「うん、それで兄妹みたいに仲良しとか。なんとなく懂れる」

「兄妹だけだね。戸籍上は、叔父の娘だし」

「あ・・・そっか、そうね」

立てた人差し指を頬に当てて、玲子は少し考えるように空を見上げる。

その目線の先を追えば、週末に雨を降ったり止んだりさせた後のすつきりした青空が見えた。

「ああ、そうだ・・・」

青空とは何の関係もなかったが、不意に何のために教科書やノートの入っていない鞆を自分が手に持っているのかを思い出した。

立ち止まって先を進む玲子のさらさらの長い髪がセーラー服の後ろ衿に揺れるのを眺めながら、鞆の中へと手を突っ込み入っている物を取り出すと、数歩進んで俺が立ち止まったままにしているのに気がついた玲子が振り返って戻ってきた。

「どうかしたの？」

「これ、お詫び」

白っぽい褐色の一口サイズに絞ったメレンゲを焼いた菓子が十数

個程入っている透明袋を玲子に差し出す。袋の口は赤いリボンで閉じられていた。

袋に貼られたリボンと同じ赤い色の、金で縁取りされたラベルには縁取りと同色の文字で“AKAGI-DO”“MACARON”と二段に分けて印刷されている。

「あ、赤木堂のマカロン！」

袋に貼られたラベルを見ながら玲子が声を上げる。

ぱつと花が咲いたようにうれしそうなお表情に、どうやらお気に召したらしいとほっとして歩き出す。

「好き？」

「うん、おいしいよね。ケーキ屋さんとかに売ってるマカロンとは違うけど」

鞆を右手、菓子を手左に持って歩きながら、無邪気な様子でケーキ屋に売ってるマカロンとは違うと言った玲子の、その言葉に俺は引っかかりを覚えた。

きっと玲子は色とりどりの丸い焼き菓子二枚の間にクリームやペーストを挟んだものを想像しているのに違いない。

「ケーキ屋の？ クリームとか挟んだやつのことかな、例えば『ラデュレ』みたいな」

「え、ええ・・・三橋くん？」

答えた玲子の様子がどこか戸惑いを覚えているように見えたが、俺にとつては玲子の誤解を解くことが優先であった。赤木堂のマカロンが古い洋菓子屋が、古い時代に珍しい洋菓子を真似て適当に名を付けただけの、マカロンもどきの菓子だと思われていたら実に遺憾だ。

「あれは“パリ風マカロン”といって、まさしく『ラデュレ』が元祖で確かにマカロンといえば一般的にアレを差すけれど、マカロン自体は他にも色々な種類がある・・・イタリアのアマレットイもその一種だし。コレはどっちかっていうとそれに近い」

「そうなんだ・・・？」

「ああ、だから間違っても昔の洋菓子屋が適当に作って名づけた菓子じゃない」

「そんなこと考えてもなかったけれど・・・」
「なら、いい」

「ぱちぱちと瞬きをして確認してきた玲子の目を見ながら、念押しするように頷いてみせる。」

明治の末頃に創業の洋菓子屋は、創業当時から舶来の菓자에確かな理解がある。そう思える品を提供する店であった。

「・・・しまわないの？」

「あ、うん。ありがとう三橋くん」

いつまでも菓子の袋を持ってぽかんとしている玲子に問いかければ、はっとしたように鞆に菓子をを入れる。がさがさと教科書を学校に置かない玲子の鞆は中身の多そうな音を立てた。

促しながらも荷物が沢山はいつている玲子の鞆に中身が砕けないか少々心配になる。

しゅわつと淡く舌の上で半ば溶けて、適度な甘みとアーモンドの風味が実に絶妙な柔らかい生地を楽しむのに、あの一口サイズは計算された大きさだと思うのだ。

だからつい、注意してしまった。

「砕けないように気をつけて」

「あ、うん。お弁当箱の上に乗せたから、たぶん大丈夫・・・」

「それならいい。赤木堂のマカロンは好き？」

玲子に尋ねれば、一瞬の間を置いてクスクスと玲子が弾かれたように笑い出した。

「・・・うんっ、ふふっ・・・たぶん、三橋くんほどじゃないけど・・・っ」

笑いながら、鞆の持ち手を両手で持つのを右肩に掛ける形に変えて、バランスが崩れるのを防ぐように俺の肘辺りの袖を左手で小さく掴むように引っ張った。引っ張りながらまだ笑っている。

一体、何がそんなに可笑しいのか。見れば目じりに涙さえ浮かべ

ている。

「何？」

「うっんっ・・・三橋くんって、お菓子好きなの？ でもこの間お家に遊びに行った時はあんまり食べてなかったね」

「和菓子は貰い物で飽きるほど食べてるから」

「あ、じゃあ洋菓子が好きなんだ。でも、迎えに来られないからって、そんなに気を使わなくてもいいのに」

「たぶん、今週は君と会えないから」

家に戻ったら、詩織の用事に付き合っすぐ東京へ向かう。

そこで二泊・・・だが、三泊になりそうな気もしないではない。

そうなれば戻ってくるのはたぶん木曜日の夕方だ、金曜日も保障はない。

日曜日に演奏会で、前日の土曜日にリハーサルの予定だから稽古に付き合わされる可能性もある。

公演は東京なんだからいつそずっと東京にいればいいのじゃないかと思うのだが・・・それは嫌なのだそうだ。

面倒だなと、つい眉間に余分な力が入ってしまったままで玲子に意識を戻せば、笑いが収まった玲子は今度は頬を真っ赤にしていた。

「どうしたの？」

「そ、そういうこと・・・あまり言わないで・・・」

「何が？」

「わかってるの、わかってるのよ。三橋くんは・・・そうっ！ 女の子の期待に応え過ぎちゃって、そういうこと平気で言っちゃう人だってことは・・・」

「何を言っているのか、よくわからない」

しかも、少し失礼なことを言われているような気がする。

「ええつとね、あの・・・とにかく」

「玲子？」

「気にしないでっ！！・・・ください」

「・・・わかった」

話しているうちに耳まで真っ赤になった玲子に奇異の感を覚えつつも、袖を摘んでいる玲子の左手を取った。言葉にならない母音だけで構成された声を断続的に玲子は上げたが振り払う様子は見せなかつたので、そのまま先週の金曜日の帰り道と同じように繋いだ。

「ああ、あと第一図書室は閉めるから。本は佐竹に渡しておいて」「あ・・・はい」

漸く平常心を取り戻したらしい返事を玲子がする。

「君、螺子巻きのおもちやみたいになるな・・・時々」

「おもちや・・・」

「うん、急に動き出したりして見ると面白い」

「・・・そう」

小さく溜息を吐いた玲子と登校し、「じゃあね、三橋くん」と手を振った玲子に応じたあと、そのまま職員室へ向かって担任の姿を探す。

この学校は生徒だけではなく教員の数も多い。

数多い生徒をきめ細やかに指導する方針をとっているためだが、それにしても多いと思う。

棧田が社会科準備室に籠もっているのは、この数多い教員同士の人間関係を厄介に思っ、物理的に距離を置いているためだった。

しばらく担任の机周辺を見回して、学年主任である教師と立ち話している姿を見つけ、話の区切りがついた様子を見計らって近寄り、当面学校を休む旨を事情説明と共に申し出る。

棧田と違い、担任は二つ返事で許可を出した。

おそらくは生徒の親と余計な軋轢は避けたいと思っているのだろう。

加えて俺の家は一般に比べると特殊な環境と言えるから、多少の融通は簡単に利いた。

もつとも学業は疎かにしないという前提ではあったが。

中間テストとは別に連休前に行われる、前学年時の学習内容を範囲とする実力テストが近づいていたことを担任の言葉で思い出し、

胸の内ですみましたと担任の顔を見ながら呟いた。

来週から、この学校は試験期間に入ってしまう。

進学校らしく、試験期間中はあらゆる部活動と委員会活動が停止となる。

例外とされているのは、学習室としての機能もあるために試験期間中も必要と認められ、かつ風紀委員の見回りのように教師による代行が容易ではないとされる第二図書室の当番活動のみ。

実質的に利用者のいない第一図書室は、必要性のある活動と認められておらず、当然開けることは出来ない。

今週、学校に来られなければ翌週から約二週間の試験期間、それが終われば連休だ。

それでは約一ヶ月近く第一図書室に行けない。

読書のこともあるが、管理の仕事もある。

第一図書室は7月末には完全に閉館するのだ、なんて間が悪いんだと思わず顔を顰める。

「……出来るだけ休まずに済むよう、努力します」

俺の表情と言葉が、学業を疎かにしないよう注意した自分の言葉のためと誤解した担任教師は満足そうに頷いたが、生憎とそれは間違いであった。

十九（前書き）

本当に洋ちゃんの彼女なの……？

十九

——遅い！

帰宅して早々、長袖のＴシャツとショートパンツ姿で玄関先で仁王立ちで待っていた詩織にそう言われて肩を竦めた。

靴入れの脇に備え付けてある使い古しのフェルト布とブラシを手にとったついでに、靴入れの上の置き時計の時間を見る。

「遅くない、まだ十時前だよ」

「もう、十時前！ 学校休む手続きなんて電話で済む話じゃない」
学校だけなら詩織の言う通りだ。

「そうでもない。先生だけじゃなく色々都合もある」

「それって、女？ 洋ちゃんの今の彼女？」

「相変わらずの詮索したがらだな」

上がり框に腰掛け靴を脱ぎながら笑うと、詩織は仁王立ちのまま頬を膨らませそっぽを向いた。

「洋ちゃんのことには全部知りたいの……！」

ぶすりとした表情で口の中でもごもごとそんな事を言う。

全部か・・・それは不可能だろう。

誰しも自分のことすら全て知ることにはできないと思う。

「全部なんて無理だな」

「じゃあ、洋ちゃんの彼女との都合を教えて。なんの予定？ 放課

後デートだったとか？」

「違うよ。一緒に登校してて、迎えにいってるから休むこと伝えな
いと待たせて困るだろ？」

「はああっ?! なによそれ！」

反応は予測していたが、考えていた以上に甲高く上がった呆れ声
に思わず耳を塞いだ。

甲高い女性の声は身内であってもどうにも苦手だ。

聴覚の高音域を感知する神経が損傷するんじゃないかと思える。

「それこそ電話で済む話じゃない!!」

「知らないんだ」

「は?」

「クラスも違うから、連絡網も違うし……」

「本当に洋ちゃんの彼女なの……?」

ワントーン下がって接近した声に振り仰げば、手を当てたまま腰を折り曲げ、詩織に背を向けて座っている俺に鼻先をつけるように身を乗り出している詩織がいた。

「まあね」

「電話も知らないで?」

「まだ、付き合って一週間だし。尋ねる必要もなかったから……いや、こういう時のために聞いておくべきだったな」

そつえば、玲子からもそんな質問はなかった。

朝、玲子を迎えに行き、その後の予定を伝え合う。

都合が合えば第一図書室で会って話し、都合が合わなければ会わない。

それが定まりかけていた玲子との付き合い方のベースだった。

「呆れた。その人って洋ちゃんのこと好きなの?」

「たぶんね」

なにしろ本人から想いを告げられている。

一緒にいる様子を見ても、普通に好意を持ってもらっている様子だ。

何故かと問われれば、全くもって心当たりがないのではあるが…

…。

しかし、詩織の興味はそこで終わったようだった。

乗り出した身を今度は持ち上げて反らせ、まるで女王様のようにふんぞり返って詩織は両腕を組む。

「まっ、いいわ。早く支度して」

「すぐ出るのか?」

振り仰いだ顔を元の位置に戻し、脱いだ靴底に付いた土をブラシで払う。

「出たい」

「学校の下見ぐらい、一人で行って欲しいんだけどな……」

「いやよ」

とすん、と背に重みが掛かった。

「心細いもん、洋ちゃんも付いてきて……」

ぼそぼそと囁く声に軽く息を吐いて、肩から突き出されるしなやかな手の甲に、持っていた靴を床に置いた手を軽く添えてやる。

高飛車で勝気な詩織だったが、それは臆病な性格の裏返しでもあった。

小さな頃から、人前で筆を弾く前日は必ず熱を出したり吐いたりした。

たぶん、今もだろう。

国際的に活躍する演奏者として世間の注目を浴び、プレッシャーがきつくなっている分酷くなっているかもしれない。

詩織は金沢で母親と一緒に住んでいるが、年の大半を国内外の演奏会に出演するために飛び回っているため、地元で進学した学校にまともに通えていない。

幾分か融通を利かせてはもらっているようだったが、普通の公立学校では足りない出席日数を考慮するのも制度的に限界があった。

なにより、音楽科でもない。

おまけに金沢という土地は移動上のロスも大きかった。

国内の演奏会は東京・大阪・名古屋・福岡といった主要都市が多く、それらは新幹線の路線で繋がっているし、海外から戻る時も大抵東京。

羽田から石川県への国内線は一日3便程度、列車も便利とはいえない。
難しい。

「叔父さんが行ってる大学の付属校なら心配ないよ」

「どうだか」

諸々の理由で東京に部屋を借り、叔父が客員教授を務めている東京の音大付属の高校に編入を詩織は検討していた。

部屋を借りてといつても、完全な一人暮らしは危なっかしいので、中道の家が雇っている詩織のマネージャーが住むマンションに入る予定だ。

仕事とはいえ、詩織のマネージャーもご苦労なことである。

最初、俺の家も詩織の住居候補に上がってはいたそうだが、東京から通学一時間かかるのでは何のために実家を出るのか本末転倒となってしまうため、却下となった。

「洋ちゃんと違って、わたしのことはパパいい加減なもの」

「そんなことないよ」

「あるの。洋ちゃんは天才、わたしは凡才」

「16歳の天才邦楽少女が何言っているんだか……」

「洋ちゃん……それ、すごい嫌味……」

ぐいぐいと押し掛かってくる重みに苦笑して、立てないと言えば詩織は離れた。

「一門の若手の中でも文句無しに詩織が一番だよ」

「洋ちゃんを除けばね」

背を向けたまま詩織にそう言えば、溜息混じりに彼女は小さく呟いた。

「俺は、一門の人間とはいえないよ」

ただ、周囲の見よう見真似や、叔父が幼い俺が訊ねるまま教えてくれたのを元にして勝手に弾いてるだけに過ぎない。

門下生として修練したことがない。

それなのに一門の定演会に出ているのもおかしな話だ。

皆、一門の奏者扱いしてくれているが、それは俺が前の家元の血を引く息子だからだろう。

春・夏・秋・冬と年四回の定演会に毎年のように今年はあるのを止そうと思うのだが、その準備を取り仕切っている古株の内弟子の人達に当たり前のように出演者の頭数に入れられてしまったため、毎

回断りそびれていた。

「……ふざけてる」

ボソリと小さな詩織の声を聞きながら、フェルト布で靴がかぶった土埃を軽く払って立ちあがり、フェルト布とブラシを元の場所に置いて詩織を振り返った。

「だから、俺が家元なんておかしいんだよ」

きゅっと詩織の眉根が寄って、何か物言いた気に口を開きかける。

「ん？」

「別に……」

結局、唇を引き結んで詩織は少しの間黙り込むと、急に思い出したように顔を上げて俺の制服の袖を引っ張った。

「そんなこと言ってる暇があつたら早く支度してよ、洋ちゃん！」

「はいはい」

俺を急かしながらじつと据わった目つきをしている詩織に、これ以上、機嫌を損ねられても堪らないので素直に従った。

「若先生、箏はいいんですか？」

玄関先に車を回してくれた、三十過ぎの、古参の内弟子に尋ねられて俺は頷いた。

「邪魔になるからいいよ」

「でも二日は戻らないんでしょう？ 弾かずに耐えられるんですか？」

真剣に心配してくれるのはいいのだが……。

「まるで中毒者の扱いだな、透さん」

そう呟けば、ひょこりと首を竦めて駅まで俺と詩織と荷物を送り届けてくれるはずの大人は苦笑した。

「あ、失礼しました……けど、弾かないと気持ち悪いつつも言うじゃないですか」

たしかにそうだけれど、別に絶対ではない。

家にいる時はなんとなく習慣だからそうであるだけで、外泊の時

は仕方ないと切り替えられる。

でなければ、泊まりがけの学校行事にも参加できない。

とはいえ、あまり長いと少し身体にも違和感が生じるのだけれど。「まあね、どうしてもとなったら支部にでも寄るから。それより稽古あるのに」

庭の稽古場では平日の昼と夕方、通いの門下生のための教室が開かれ師範の資格を持つ内弟子の人達が交代で講師にあたっている。

「構いません、昼の教室は下のが面倒みますし。むしろ駅まで申し訳ないくらいで……」

「いいよ、師範会もあるって聞いている。定演会近いし、打ち合わせか何か？」

「ええ、出演する教室の先生方を集めての連絡会です」

「それで、今回は叔父と一緒に行かなかったのか」

叔父の直弟子としてもう十年來の付き合いになるこの人は、付き人のように叔父の外出の供をすることが多い。

慌てて出掛けていった叔父を車に乗せて、一人帰って来たので珍しいこともあるものだと思っていた。

「ええ、まあ……それにしても、詩織お嬢さんの演奏聞けなくて残念です」

「ああ……」

たしかに、表に出るようになってから詩織がこの家に来ることは少なくなっていたし、来ても一日二日遊びに来るようなもので、以前のように、叔父の稽古を受けることもなかった。

もちろん中道の家では稽古してるのだろうが。

「まあ、ご自分のを修繕にだされてるんじゃないですけれどね。詩織お嬢さんは繊細な方ですし……それも受け取りに行かれるんでしょう？」

「らしいね」

繊細ね……単に神経質なだけだと思うけれど。

ただ弾くだけなら基本的に何でも構わない俺と違い、詩織は自分

の愛器以外はあまり触ろうとしない。

箏に限らず、他人が触れた道具類を使うのを詩織は嫌う。

年の半分はどこかで演奏を披露しているような状態だから、箏は一面だけでなく、二三面使っているようだが、家に届いた荷物には含まれていなかった。

たぶん、マネージャーの女性が預かっているのだろう。

「そうだな……久しぶりにちょっと聞きたかったかもな」

「小さい頃はよく一緒に弾いて遊んでましたもんね」

「え？」

最後に詩織の演奏を聞いたのはいつだったかと考えを巡らせていて、耳を打った言葉に相手の顔を見れば、俺の様子におやと首を傾げた。

「覚えていないんですか？」

「ああ……」

音大の邦楽科に在籍中から叔父に師事して、もう十年以上、叔父の元、つまりはこの家にいる人だから当然、子供の頃の俺を知っている。

「まだ前の家元もお元気で。若先生よく詩織お嬢さんの稽古覗いてたじゃないですか」

「そうだったかな」

「詩織お嬢さんが若先生についさっきやった稽古を教えるまねして

……若先生はぼうつとしてそれ聞いて。はは、お二人とも可愛らしかったですよ」

ちよつと待て、と透さんと普段呼んでいる内弟子に思う。

だとすると、俺が箏の基本を習ったのは詩織ということになる。

「……叔父は？」

「もちろん側にいましたよ、前の家元と一緒に」

それで叔父に習ったと記憶がすり替わったのだろうか……だとしたら幼少期の認識なんて随分と曖昧なものだ。

いや、詩織だってまだ小さいから俺に教えるまねをしたところで

ままごと程度だ。

叔父が側にいたのなら、一緒に教わったのかもしれない。
しかし、父……はいたのだろうか？

あの人は俺に……というより、誰も教えたりはしなかったはずだが。

「ああでも、その時だったかな……」

「何？」

「え……いや、その……」

余計な事を言ったというように口元に手を当てて、困惑の表情を温厚そうな顔に浮かべた透さんに俺が訝しんで、口籠ったのを促そうとした時、背後から陰を含んだ声がかかった。

「洋ちゃん！ もう荷物積んでくれた？」

振り返った先には、ツインニットとスカートに着替えた詩織が立っていた。

「積んだ……まったく人を急かしておいて」

「女の子の支度は色々あるんだから仕方ないでしょ！」

女性は皆これに近い台詞を言いがちだが、色々って具体的には何なのだろう。

化粧だつてそんなに時間がかかるものとは思えないし、ましてや詩織は高校生になりたての少女だから化粧もないのに。

「じゃあ、お二人共行きましょうか」

さっきの困惑の表情はきれいさっぱり消した透さんが苦笑しながら、後部座席のドアを開けて促すのに従って、大人しく車に先に乗り込む詩織を見てさっきまでの会話を思い出し、何となく腑に落ちない消化不良な感じのものを抱えたまま、俺も詩織に続いて車に乗り込んだ。

中点(前書き)

どちらも狂っていたら？

中点

照明は客一人に一つ灯される小さなグラスキャンドルの光だけ……違った、床の一部が人の足を誘導するようにテーブルとテーブルの間や通路に沿って仄白く光っている。

都内でも、規模が大きく高級な部類に入るホテルは詩織が予約した。

箏があるから、最低でもリビングスペースがとられた広いタイプの部屋になる。

学生には分不相応な部屋の、宿泊料の払いは一体どこから出るのやら……いくらなんでもプライベートの費用まで詩織の所属事務所が持つてくれるとは思えない。

だとすれば中道か三橋か……もしかすると一門の事務局付かもしれない、それは十分ありえる。

家元の実の娘で北陸の教室を束ねる中道は三橋の分家筋、若手奏者を代表する立場と実績を持つ詩織は、一門の中で俺よりずっと特別な存在だ。

詩織は将来一門を背負う可能性を持つ者として育てられ、歳が近いから宗家である三橋直系の俺の結婚相手として生まれた時から考えられていた。

俺が前家元であった父に放任されている分まで詩織は稽古をつけられ、教室通いの子供はたくさんいたが、俺と妹以外に詩織と交流する子供はいなかった。

中道の叔母と叔父が離婚した時、詩織は二歳。

叔父夫婦は俺達と一緒に暮らしていた。

詩織は叔母が引き取ったのだが、箏の稽古をするなら圧倒的に宗家である三橋の家の方が有利だった。詩織を将来一門の奏者にするつもりでいた叔母は叔父が俺の母と結婚するまで詩織を三橋の家に預け、詩織のために頻繁に三橋の家を訪ねた。

会って娘と過ごすのと、稽古を見るためだ。

中道の叔母は躑も稽古も厳しい人で、叔母が来る前日よく詩織は離れの庭の隅、道具小屋の影に隠れていたものだった。

家の中から姿を消した詩織を見つけるのは常に俺だった、庭に時折迷い込んでくる野良猫を他の者に内緒で世話する場所と同じ所に隠れていたからだ、俺自身の秘密を含む場所なので詩織がどこにいたのか他の者に告げたことはなかった。

そんなことをとりとめもなく思い返ししながら、周囲を軽く目だけを動かし見回す。

夜も更けてきたメインラウンジは、ディナーを終えた様子の大人達の語らいの場となり、男女二人組が多かった。

「腹が減ったな……」

「なにかお願いする？」

可憐な少女の声が俺を慮ったが、空腹ではあっても食べることにへの意欲が湧かなかったので首を横に振った。

「やめておく」

「そう」

正面に座る相手は頷いたきりで、メニューに載った軽食等を勧めることはしなかった。

相手はそういった、無駄な干渉を他人にしない少女だ。

「とても疲れた顔してる」

詩織に三日付き合って、騙し討ちまがい目の目に合った上に口論したら疲れもする。

だから……やけに耳について気になっってしまうのだろう。

ラウンジの中央に黒光りするグランドピアノが一台、黒いドレスを着た女性の手によって静かなBGMを奏でている。

振り向けば背後はすぐ一段下がってロビーとなる席から、ピアノを超えたガラス張りの壁越しに、淡い光源を岩影に仕込んだ人口滝が水と光の幻想的な風景を作り出しているのを横目で眺め、座っているソファのベージュの肌触り滑らかなウール地の背もたれに開い

た両肩を預けて、上半身を天井に向け斜めに仰向けになって目を閉じた。

旋律の中の微妙な違和感、弾き手はそつなく弾いているから技巧のせいではない。

「自信はないけど、ピアノの調律ちよつと微妙かも……」

「それってもしかして、絶対音感？」

「いや、それはないんだ。基準音がないと何がどの音なんだかさっぱり。けれど、昨日まで音大の付属校見学してて流れてくるピアノの音を聞いていたから……」

その気になれば無段階で音进行操作できる箏を扱っているから、音の高い低いといった音程を感じ取る相対音感とは割と鋭い方だと思う。「音と音の幅が少し違つ気がする……でも、昨日聞いたのが狂っていたのなら、こつちが正解なんだろうけど」

「どちらも狂つていたら？」

くすりと笑み混じりの声で悪戯っぽく問われて、その可能性もあるかと肩を竦めた。

「ありえる……。そういえば、絶対音感ならそつちこそ……」

目を開けて姿勢を正し相手を見る、幼少期からピアノを習っていると聞いた。

「うづん、ピアノの音をよく聞いてどの音が拾えるくらい。習ってるからって誰もがTVに出る演奏家みたいになるわけじゃないもの」
演奏家か……。

「詩織がいたらきつとわかるんだけどな、両刀使いで、異常に音に鋭いから」

「え？」

「三歳から箏の稽古始めて、四歳から叔母の意向でピアノも習ってる。ピアノはプロデビューする前に止めたみたいだけど」

「すごい……」

「叔母が詩織の音楽教育に熱心で、それで……小さい頃は同じ家に暮らしていたけれど、全然顔合わさないんだ。ずつと何かの稽古し

てるから」

「うん」

「母と叔父が結婚するまで、詩織は叔父の元にいた」

「なら、三橋くんが小学校の終わりくらいまで一緒にいたのね」

「そうだな……」

最後の方は、月の半分くらい詩織は中道の家で過ごす感じにはなっていたけれど……。

「それにしても……玲子」

「はい？」

「どうして君と、ここでこんな話をしてるんだか……」

ホテルは先月大きく内装を変えたばかりであるらしく、その新しい内装を手掛けたのが本條家が経営する会社の一つであつたらしい。

今夜は宴会場の一間を使いホテル主催で関係者を招いたパーティーめいたものをやっていたそうで、玲子は都合がつかなくなった母親の代理で父親と来ていた。

「本当、フロントに預けてたお部屋の鍵をとりにいこうとしたら、

三橋くんの声が聞こえてきてびっくりした」

「声ね……」

怒鳴り声みたいなものだったのによくわかったものだ。

「振り返ったら女の子と言いつ争ってるんだもの……もしかしてこれが修羅場というものなのかしらってどきどきしちゃった」

「玲子……その場合、君はたぶん酷い目に合っている女性の側でどきどきしている場合じゃないと思う」

「そうかな。相手の女の子が過去に付き合ってた人やこれから付き合う人だったとしても、それは三橋くんとその女の子の間のお話だもの。わたしに関係するなら三橋くんはお話するでしょう？」

「……まあ」

俺がいわゆる二股をしないというのを信用してくれているらしい。仮に玲子を振ってそっちと付き合うことを選んでも、別の相手と、

玲子との間は全然別の問題だと。

「それに、やり取りがそんな感じじゃなかったし」

「世の中の女の子が皆、玲子のように冷静で合理的だと面倒が起こらなそうではないな」

「そういうわけではないの」

「うん？」

「ただ、三橋くんが好きだから……」

ぼつりと小さく呟いた玲子の、普段から潤んでいる様な大きな目が、テーブルのグラスキャンドルの光に壊れそうな儂さで揺れる。

「……制服の時と随分感じが違う」

目を伏せて、テーブルの上に置かれていた白いティーカップを見つめる玲子を、しばらく黙って眺めてからそう呟いた。

一つに編み込みきれいな形に結い上げられた長い黒髪は、濃紫色のシルクタフタの幅広のリボンで飾られ、普段着ている紺地の地味な制服とは違って華やかで手の込んだ振袖を玲子は身に纏っていた。時代を感じさせる奥深い色合いをした淡紅色のぼかし地に、肩から裾へ袖も含めて全面に垂れ下がる白と紫の藤の花が描かれ、その花の房の一つ一つに施された刺繍が彩りと立体感を添えている。

細く覗く薄紫の半襟にも藤の刺繍が施され、金糸を裏に通した白い帯地に色鮮やかに織り出された蝶が舞い、帯留めは藤の葉と枝の絡ませた彫金の後ろに嵌めた珊瑚が透けていた。

「まさに、令嬢って言葉が相応しい」

それも完璧なまでに美しい令嬢だ。

微かな憂いを見せる様子は一枚の絵の様で、だから却ってたぶん健気に聞こえるはずの自分に向けられた言葉がなんとなく他人事に聞こえた。

「見事な、藤尽くし」

白く細い指が白磁のティーカップを持ち上げ、ゆらりと漂ってきた紅茶の湯気の中に二三滴垂らされたブランデーの香りに鼻腔をくすぐられ、俺は組んだ両手を頭の後ろへやって再びソファに頭を預

けた。

「昔の、お着物なの」

「家にも何枚かそういう昔からの着物ってあるけど、そこまでのはないな」

「そんなことっ……」

さらりと衣摺れの音がして、カチャリとガラステーブルの上にティーカップが戻る。

面映そうにうろたえる様子の玲子は普段よく見知った玲子で、何故か少しばかりほっとしたものを覚えた。

「とりあえず、詩織が君に水なんかを浴びせなくてよかったと思ってる」

「まさか」

「するよ。きつい性格してるし、ああなると落ち着くまで手が付けられない」

だから疑問に思う。

詩織は……いや、玲子は詩織と一体何を話していたのだろう。

「三橋くんのこと、とても好きなのね詩織ちゃん」

だから、と玲子がキャンドルの火に揺らめいて見える瞳で俺を見るのを、ソファにもたれたまま上目に受け止めた。

「お部屋で、少し一人にしてあげた方がいいと思って……三橋くと離れて」

「それで内線かけてきてここに誘ったのか」

「同じお部屋って聞いたから」

「心配しなくても、ベッドは分かれてるよ」

「えっと、そんなことはいいですっ」

オレンジ色の炎の色に染まっていた玲子の白い顔に、それだけではない赤みが差すのを見ながらいいのかと思った……従妹で妹だからだろうか？

「少し、言い過ぎちゃったかも」

「そういえば部屋に戻ってきた時、やけにしゅんとした」

それにも驚いた。

てつきり玲子を悪し様に言っ、俺に当たり散らすに違いないと思っ、ていたから。

俺が詩織から父親の関心をそっくり奪っ、てしまったことと、幼い日の出来事を持ち出して。

「意外だっ、た、あそこで玲子が割っ、て入っ、てくるとも思わなかつ、たし」

頭を支えている腕を抜き取っ、て、腕時計の時間を確認する。

九時半過ぎか……もう三時間近く時間が過ぎている。

『迷惑なのは洋ちゃんじゃないっ、！』

気が立っ、て逆毛を立てた猫のように、席を立っ、て声荒げる詩織を回想する。

『洋ちゃんは才能がどうい、うものかっ、てわかつ、てないっ、自分じゃ誰も巻き込んでないっ、て思っ、ても違っ、んだから……あたしやパパとは全然、違っ、んだからっ、……』

何が違っ、うのか、何の事だか支離滅裂だ。

けれど、詩織の言葉と甲高く叫ぶ声から蓄積された苛立と怒りと遣る瀬無さを感じた。

『ちやんとしないなら止めてよ、！』

それは出来ない、そもそもちやんとっ、てなんなんだ。

ちやんと一門の稽古を受け、後継者として一門のなかで振る舞えとい、うことなのか。

そうでなければ、弾いては駄目だと誰がなんの理由で決めるのか……。

詩織のお伴の最後の用事は、俺に用意された面談の席だっ、た。

カフェでお茶をしたいとい、う詩織に付き合っ、てみれば、予約された席に各種コンサートを手掛けるプロモーターだとい、う四十がらみの男が待っ、ていた。

定演会の俺の演奏を保存した媒体を、詩織は事前にその男に渡し

ていた。

嵌められたと思いながらも、仕方なく色々と相手が話すことを聞いた。

要約すれば、詩織と同様にプロの演奏家として活動してみないかということだった。

もちろん、表立った演奏活動もCDデビューも興味もなければする気もない。

かなり面倒な気分であったが、詩織の今後に差し障りが生じたり一門に迷惑はかけられないため、俺の一門での状態と考えを両方話し丁寧に断りをした。

おそらく向こうも薄々何かおかしいと感じていたのだろう、思ったよりもあっさりと引いていつか気が変わったらとまで言って立ち去った。

向こうからやってきて、俺がただ嫌だといってそれで済むならいい。

けれど詩織が持ちかけたら話は変わる。

ましてや叔父まで背後で関わっているならなおさらだ。

それを詩織の物言いから察した途端に、さすがに怒りを覚えた。

「なんでそう迷惑なことをするんだか……」

吐き捨てるように呟けばガタンと音を立てて詩織は立ち上がった。

周囲の客が、一斉にこちらを向いたのに心底うんざりしてため息まじりに詩織をたしなめたが気を高ぶらせた猫のように詩織はこちらを睨んで微動だにしなかった。

「詩織……」

「迷惑なのは洋ちゃんじゃないっ!!」

そこからはもう、俺にとっては理不尽なだけの……けれどそう簡単に切り捨てるのは躊躇われる様々な感情を含んで浴びせられる責めの言葉だ。

大人げないとは思った。

詩織が言う事にも一理あるにはあるのだ。

けれど……。

「わかってないのは詩織達だっ！」

座ったままではあったが、気がついたら詩織を怒鳴りつけていた。「なによ…なにがわかってないの?! わかってないの洋ちゃんじやないっ、あたしもパパも洋ちゃんが洋ちゃんのお父さんの後だっ
て思ってるのにつ!!」

不毛な口論だ。

このまま話していても、たぶん両者が納得する回答は出ない。

「だからっ……」

「たぶん、どちらもわかってないんじゃないかな?」

床下から突然俺の言葉を遮った可憐な声に、俺と詩織の間の争いの色は一瞬空白になった。声の方向を振り返ってラウンジの床から見下ろせば、一段下がったロビーから振袖姿の玲子が見上げていた。

「誰……?」

「玲子?」

「こんばんは、三橋くん」

そう言って、玲子はにっこりと微笑んだ。

「……ごめんなさい。よく知らないのに立ち入って」

「いや、たぶん玲子が詩織を食事に誘わなかったら收拾つかなかった」

前の会話を聞いていたのだろう。

俺と言い争っているのが詩織だと知ると、玲子は丁寧な挨拶をして詩織だけを食事に誘った。

好戦的な性格の詩織がそれを断るはずがない。

その場を置き去りにされた俺はひとまず部屋に戻り、詩織の箏を睨みながら手持ち無沙汰な時間を過ごした。

「詩織と、何を話してた?」

「三橋くんのこと。すごい才能だって聞いた。次の後継者について言

われているんでしょ？」

玲子の返答に深いため息を吐いて、ソファに預けていた頭を起した。

「叔父と詩織がそう思い込んでいるだけだよ……父さんは、稽古する必要ない好きにさせておけて言ってた」

「そうなの？」

「本格的に習うならそうさせればいいし、妹の茜は箏に触ったかも怪しいくらいなただけれどそうなるならそれでいいって。叔父達が言う通りだったらちゃんと習わせるだろ？」

俺の問いかけに、うーんと玲子は悩むように眉をひそめて首を傾げた。

「玲子？」

「全然、習ってないのに三橋くんは難しい曲も弾けるの？」

「ああ……なるほど、そういうことか。」

「いや、全然習ってないわけじゃないんだ。小さい時詩織の稽古観いてて、たぶん叔父に教わってるから基本的な弾き方だけけど」

じつと俺を見つめて話を聞く玲子に、あとは勝手に遊び半分といえば困ったように微笑んだ。

「だから次期家元とかそういうの資格ないというか……詩織や叔父みたいに人生の殆どを修練に費やしてる人ではないから」

「尊敬してるのね、叔父さまや詩織ちゃんのこと」

「尊敬……なのかな？ でもそういうの蔑ろにするみたいな才能なんかはない。父は才能のある人だって言われてたけどちゃんと修練もしてた。たとえ俺に同じ才能があっても違うんだ」

「小さい頃から、毎日弾いてるって聞いたけど……？」

「好き勝手ただ弾くの、稽古は違うよ」

「そう……。そういえば、三橋くん学校にはいつ来るの？」

「学校か……」

今夜は、詩織のお伴で東京を訪れて三度目の夜だった。

学校の見学は何の問題もなく、二日間に渡る見学は詩織を満足さ

せたらしくあとは編入手続きを残すのみ。

修繕中の箏も無事に受け取り、調子も確かめた。

詩織の買物に付き合い、一通り目当てのものを彼女は買い込んで、明日、また三橋の家に戻りたいという詩織と二人して帰る予定だった。

明日は木曜日、翌日からならなんとか学校に顔を出せるだろう、きつと家に戻ったら詩織は公演のリハーサルのため他者を拒絶して稽古に打ち込む。

「たぶん金曜日かな。たった一週間なのに随分長い間行ってない感じがする……詩織と二人でいるとそんな感じになるから」

「そんな感じって？」

「何か切り離された感じ……一度、二人で家出をしたことがあったけど、時間がすごく長く感じた」

「え?!」

薄闇にグラスキャンデルのオレンジ色の光が小さく揺れる中から驚く声が出て、俺は天井を見上げて僅かに目を細め、玲子の声は静かで澄んだ響きの声だなと思った。

干渉せず、感情的になつたりもしない玲子の性情が現れている気がした。

「家出と言っても道具小屋の中で一晩過ごしただけで、家の敷地さえ出てないけど」

「いよいよ中道の家に移る二日前の晩だった。」

テーブルに灯されている小さな炎の明かりの中で玲子が微笑む気配を感じた。

「道具小屋で詩織にキスした……あれが初めてかも」

「素敵ね」

「どうか……翌日の昼に内弟子に発見されて連れ戻されて、次の日に詩織が叔母の元に行った翌朝、起きたら下着汚してたし」

「もしかして、それも初めて？」

「思いもかけない質問に天井を見上げたまま苦笑する。」

「まあね」

「初めてがたくさんあったのね」

こくりと紅茶を一口飲んだ気配がして、天井を向いたまま俺は頷いた。

吹き抜けの天窓になっている天井は高く、遠く小さく円形に、窓枠で等分されたケーキのように夜空が切り取られていた。

「いま考えれば、そう、たぶん……好きだったんじゃないかと思う」「そう」

腕を動かしたから着物の長い袖が膝に擦れ合ったのだろう、さらに衣摺れの音がした。

「まだ子供だったから抱かずに済んだ。そういうのって女の子はずっと憶えてるし……詩織から理由はどうあれ結果的に父親を奪ってしまっているから罪滅ぼしっていうか、いい兄でいたいんだけどな……玲子？」

等分された夜空を突然遮った、玲子の顔のアップにさすがに驚いて目を見開いた。

こちりと小さな衝撃とそのぶつかり音が額に響く。

「骨……」

「ほね？」

「ベーターベンの……小さい頃からたくさん音、聞いたんでしょ？」

ぼそぼそと囁く玲子の吐息が鼻先にかかる。

玲子は俺を立てて見下ろし、自分の額を俺のそれに顔を下ろしてふつつけていた。

「詩織ちゃんの話聞きながら、弾くの止めないんじゃないかって、止められないんじゃないかって……」

「玲子」

「三橋くんに詰まってる音、こっちに移せたらいいのよね」

「……口移しとかは無理かな？」

まともな返事がすぐに出来ずになんとなくそう言ってみたら、ぴ

しつと口元を指先で塞がれ額の温かみを持った感触が離れた。

「そ、そういうのはっ……三橋くんがちゃんと好きになってからで」「みんなちゃんとが好きだな」

ちゃんとしてるはずなんだけれど……とぼやけば、くすくすと玲子が鈴を転がす様な笑い声を立てた。

「詩織ちゃんにさっきの話してあげたらいいと思う。あ、わたしそろそろお部屋に戻らないと……」

「うん」

もう十時前頃だろう、別に疾しい事はないけれど父親と来ているのなら部屋に戻ったほうがいい。

「また、学校でね。おやすみなさい」

「おやすみ……」

玲子との別れ際にしては妙な挨拶だなと思いつながら応え、ひらりと鮮やかな藤の袖と蝶のように文庫に結んだ白い帯の先を揺らしてエレベーターホールへ向かう玲子の後ろ姿をなんとなく名残惜しい様な気分で見送った。

何も考えても、知ってもいなかった。

額を合わせた時が、俺と玲子の midpoint で。

midpoint から二人は等しく離れて、そうして互いを見る??。

一 十九（前書き）

奏でるのが??唯一の、音への抵抗だ。

一十九

部屋に戻れば、ベッドの上に塊が乗っていた。

布団をかぶっている詩織だ。

泣いてはいない、ベッドから怒りと拗ねている様な気配が伝わってはくるが。

吐き出しそうになった溜め息を飲み込み、ベッドへは近づかずにその足下から広がっているリビングスペースで向き合っているソファへと向かった。

ソファの前にあるはずのテーブルが部屋の隅に移動していた。代わりに昨日受け取ったばかりの詩織の箏が台に乗ってそこにあった。

三橋の家に生まれた者は皆、生まれてすぐ自分の箏を持つ。

弾くか弾かないかに関わらず。

だから俺も、弦に触れた事すらない妹の茜も、自分の生まれ年に作られた箏を持っている。

箏には寿命がある。

七十年から八十年……丁度、人の寿命と同じ位、そして人同様にその音色は成長していく。弾き手が成長するとは別に、木材が含む水分がだんだんと抜けていき箏そのものが年をとっていく。

若い箏は音色に潤いがあり、年をとった箏は音色が乾いたものとなる??。

会津桐の木目と紅木の艶が綺麗な、洋蘭の蒔絵の箏。

勿論、奏者であれば一面で間に合わず生まれ年以外のものも持っているが、詩織の愛器は叔父が彼女のために作らせたものだった。

張り替えたばかりの絹糸も新しく、生糠で磨かれた表面も艶やかな詩織の箏。

「弾いて」

布団を隔ててその瘤の強さが弱まった声がぼそぼそと聞こえて、

今度遠慮せずに息を吐いた。

「何で？」

詩織は自分の箏を他人に触れさせるのを嫌う。

「弦、慣らし」

「俺に詩織の加減はわからない」

「いいから！」

がばりと布団を跳ね上げる音がして、ベッドの上にぺたりとつけた両足の間に跳ね上げた布団を掴んだ両手をついて座った詩織が俺を睨みつける。

「……本気で弾いて」

「一曲通して弾けてこと？ まあ、いいけど……」

歩いた後を戻り、出入口近くのクローゼットの中の自分の荷物が入った鞆を開けながら問いかけたが詩織は黙っていた。

「何、弾く？」

琴爪をつけながら、こちらをじっと見据えている詩織を伺い見る。

「洋ちゃんの好きなの」

「そういう注文一番困る……」

「だって……なんだったって一緒だもの……」

なんだったって一緒。

詩織がどういってもりでそう言っているのか知らないが、その通りだ。

軽く鳴らしてみる。

もう調弦は済んでいるようだ、おそらくは俺がいないうちに詩織がやったのだろう。

箏も持ち主に似るのだろうか、きりきりと緊張感のある音がホテルの部屋に響いたが、絹系の弦で、反響するように作られた部屋でもないので響き具合はたかがしれている。

詩織同様に扱いにくいなと思うより先に、音色に誘われたのを感じて目を細めた。

何を弾いたって同じ……結局は俺の知らない、けれどいつも聞い

ている音の響きに誘われるのを振り切つて、仰ぎ見て、吸い寄せられて、追つてしまふ。

低音から高音へ順番に一音ずつ鳴らしていく間に捉われて、操られて、浸食されて……。

「……くる」

ぼそりと小さな弦音が聞こえた。

詩織だろうか……：そうだろう、ここには詩織と俺しかいない？？。詰まつてるんじゃない、留まつているようなものではない、一瞬、甦りかけた玲子の言葉もすぐに消し飛び、聞いている詩織のことからあんなに気にかかつていたはずなのにどうでもよくなる。

気にしていたら聞こえない。

「ただの“みだれ”なのに……誰だつてお稽古してたら習うような曲なのに……」

目を閉じて、指にあたる弦の他に何も無い場所で耳を澄ませる。

ただ聞きたい？？それだけだ、あの綺麗な響きさえ掴めたら、束の間の静寂が訪れる。

委ねるのが、集中するのが、捕らえるのが……。

奏でるのが？？唯一の、音への抵抗だ。

序盤から中盤にかけて一音ずつ響かせ、中盤から同じような細かなフレーズの繰り返し、曲の終盤に向けてひたすら音を速く高く重ねていく。

乱輪舌？？通称“みだれ”と呼ばれる曲はきつと、早さや左手の忙しなさに気を取られてしまふからだろう、美しく弾くのが難しいと門下の人達は言うが、重ねるように絶え間なく奏でられる音はやがて大きなうねりとなって、あの響きを捕らえやすい。

「……そつとしておいた方がいいと思うですつて？！ できるわけ無いじゃないっ！！」

突然、箏の音を割つて耳に入ってきた詩織の叫びに、驚いた俺の指がピンツと不調和な音を弾いた。

「詩織？」

「洋ちゃんには時間がないの、大人になってからじゃ遅いの、どんなにすぐくても……それだけじゃ……」

「うん」

爪を指から抜き取りテーブルの隅に転がし、嗚咽を漏らし始めた詩織に近づく。

仮に叔父の評価通りだったとしても、詩織の言う通りそれだけで演奏家としても、宗家を継ぐことも出来るはずがない。

「うん、わかって……」

「わかってる？ 何を？」

ゆらりと不意に目の前が覆われたように陰る。

ぐらぐらと左右に傾きながらベッドの上に立ち上がった詩織の影が、俺の顔にかかっていた。

「詩織？」

軽く見上げた詩織の顔は泣いてはいなかった、息を詰めて話していただけたらしい、気が強そうな細く澄ましたように整った顔に表情はなかった、ただ目だけが異様に光っている。演奏家として稽古に集中している時の詩織の目だ。

「四歳から……ずっと弾いてるの……」

「三歳だ、詩織が弾きはじめてのは」

「洋ちゃんよ……小さい頃、洋ちゃん一度弾き出すと止まらなかったの。大きくなってからは、毎晩だつて？ 十三年、洋ちゃんだけが聞こえる音のために毎日弾き込んで……洋ちゃんに足りないのは既成事実だけ……わたし洋ちゃんのことずっと」

「……詩織？」

「嫌い」

嫌いよ……洋ちゃんも、洋ちゃんの弾く音も??。

翌日、詩織と一緒に帰らなかった。

都内に新しく借りた彼女の部屋に、箏と大量の買い物袋と一緒に

帰っていった。

そして俺は平穏な日常を取り戻し、離れの稽古場でいつも通りの日課をやって、酔っぱらって帰宅した叔父の奇襲を受けている。

「叔父さん……だから、寝ないでくださいって……」

一曲弾き終えないうちに、俺の目の前で片膝を立てて首を落とされている叔父に声をかける。

酔っているとはいえ、座ったまま、しかもおかしな体勢でよく眠れるものだ。

「……叔父さん」

「う……うう……ああ……あんまりいい音だったんでつい、な」

俺は頷いて、軽く弦の表面を手のひらで撫でた。

「今夜は機嫌がすごくいいみたいだから」

本当に、音の響きがいい。うっとりするような余韻の音だ。

内側で常に響く音を思うまま、思う通りに吸い込んで鳴って……それよりもずっとずっときれいな音があると誘う。

この楽器と交感を失ったら地獄だ??。

完全な静けさを得る手段を失う。

「詩織とやり合ったそうだな？」

うーんと背筋を伸ばし後ろに回した手で首と肩をほぐすようにしながら、何気なく問いかけてきた叔父に眉をひそめた。

「……誰から聞いたんですか？」

叔父は昨日九州から戻ったばかりで、土曜日の今日詩織はリハ―サルだ。

二人が会って話すような機会はない。

そもそも、詩織が叔父に話して聞かせるとも思えない。

まして玲子と叔父に接点などないだろうし……。

「昨日、羽田で仕事相手にな……詩織の奴、父親を出しにしたばかりか抜け駆けするとはいい度胸じゃないか」

叔父の言葉に、今のいままで忘れていた詩織との争いのきっかけとなったプロモータだという人物を思い出した。

「ああ……なるほど。大丈夫、でしたか？」

向こうからしてみれば、声をかけてやったのに断った上、子供の喧嘩を見せられさぞうんざりと不愉快だったろう。

「おお、相手さん恐縮しきってて、かえって気を遣われた」

「……そうですか。俺はてっきり父娘で手を結んだのかと思ってました」

「そんなわけがないだろう」

よいしょつと呟きながら叔父はあぐらに足を組み、左頬を軽く搔いた。

「詩織は私を憎んでいるからな……実の娘を顧みず、義理の子供達を可愛がる酷い父親だと……ま、お前達とまで仲違いしなかったのはよかったがな」

「どうか……嫌いだって言ってた」

「ん？」

「ずっと、俺も俺の弾く音も嫌いだって……」

「そりゃ、好きの裏返しだ」

肩を竦めて、溜め息を一つ吐き出しながら背中を丸め、その姿勢のまま叔父は首だけを持ち上げるようにして俺を見上げた。

「叔父さん……？」

「世話になるし今年は詩織にやらせようかとも考えたが、やっぱりお前弾け」

「は？」

「公開講座の話だ。ああ、そうだな……詩織にも同じ曲を弾かしてやってもいい」

「詩織に頼むんなら、俺は……」

「ピアノで」

「どこまで詩織を虐めるんですか……」

「別に、虐めているわけじゃあない」

「どこが……詩織はプロの奏者なんですよ」

「ピアノだってアマチュアには出来てる」

酔っているからといって、いくらなんでも悪ふざけが過ぎる思いつきだ。

俺は箏から離れて叔父の前に屈みこんだ。

「叔父さんっ！」

「師として弟子のことを考えてだ……詩織はさらに父親を嫌い、お前に天の邪鬼な感情を抱くだろうが、だがその分昇ってくる」

「え？」

「詩織は……まだ全然発展途上だからな。うぬぼれるなよ、お前のことは評価しているが表に出すなら私の目の届く内輪の場程度だ。ま、そういつた既成事実が重要なんだが」

さて、と。寝るか。

そう呟いて立ち上がった叔父を俺は屈んだまま仰ぎ見た。

この人は……やはり家元で、詩織の父親だ。

そして立ち上がった俺を見下ろし、この離れの稽古場にやってきて言った言葉を繰り返すのだ。

「なあ、洋介……詩織のようにとまでは言わん。けど、折角なんだからもうちよつと表に出てもいいんじゃないか？」

「父さんとは……やっぱりしばらく呼べないと思う」

「ああ、構わんよ……兄さんも若い頃、ふらふらしてたらしいから焦ってはいない……それよりお前、ちゃんとメンテナンス出してるのか？」

箏を指差されて、軽く首を振るとあからさまに呆れた様な表情で叔父は肩を落とした。

「大事にしるよ、それ、お前にとっては父親の形身なんだから……」

「……はい」

じゃ、おやすみ。
そう背を向けて、叔父は俺が弾いた曲の鼻歌を歌いながら稽古場を出て行った。

亜麻色の髪の乙女。

「桜桃の唇をした美少女??か」

ふと、玲子のことか思い浮かんだ。

昨日、金曜日、学校で彼女とは会えなかった。

登校時の迎えはその週は止めていた。

『そつとしておいた方がいいと思うですって!?!』

詩織の叫び声が耳の奥に甦る。

それは、玲子が詩織に言った俺についての言葉なのだろうか……。

庭に目をむければ、薄曇りの、夜空を流れる雲が切れ明るい月の光が薄闇に慣れた目を射って、俺は不意の眩しさに目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2322s/>

本條玲子とその彼氏

2011年9月26日03時10分発行